
LAST DANCE -head-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L A S T D A N C E - h e a d -

【Nコード】

N 4 0 8 2 C

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

王都を襲撃したセフィラと共にねえちゃんが消えた。どこへ行ったのかは誰にも分からないという。ねえちゃんがない世界なんて考えられない。探しに行こう・・・地の果てまでも。（LOSTC O I N - h e a d - 続編）

SECT・1 はじまりの遅刻（前書き）

この物語は連作です。

【LOST COIN - head・】 [de.syo.setu.com/n3660c/](http://nco
de.syo.setu.com/n3660c/)
【LOST COIN - tail・】 [de.syo.setu.com/n3665c/](http://nco
de.syo.setu.com/n3665c/)
【LAST DANCE - head・】 （本作）
【LAST DANCE - tail・】 [ode.syo.setu.com/n4617c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n4617c/)
【PAST DESIRE - head・】 [ode.syo.setu.com/n6324c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n6324c/)
【PAST DESIRE - tail・】 [ode.syo.setu.com/n7899c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n7899c/)
【WORST CRISIS - head・】 [ode.syo.setu.com/n0921d/](http://nc
ode.syo.setu.com/n0921d/)
【WORST CRISIS - tail・】 [ode.syo.setu.com/n0973d/](http://nc
ode.syo.setu.com/n0973d/)

順にお楽しみください。

SECT・1 はじまりの遅刻

ディアブル大陸の西岸を支配するグリモワール王国。

初代グリモワール国王ユダ「ダビデ」グリモワールは稀代の天文学者ゲーティア「グリフィスと共に、72の悪魔を魔界から召還した。

悪魔それぞれと契約した証に全部で72のコインを作り、72人の天文学者にそれぞれ与えた。

しかし、何百年もの時は流れ、王家が所有するコインの数はいつしか減っていた。

72人いた天文学者も今ではわずかに5名、所有するコインは17にまで減ってしまった。

太古の天文学者と同じ名前を授けられた現国王ゲーティア「ゼデキヤ」グリモワールは5名の天文学者に、失われた55個のコイン——ロストコインを集めるよう勅命を下した。

それが今からちょうど3年前の話——

「おはよう、アレイさん！」

稽古場の扉を開くと、すでに黒髪長髪の男性と褐色の肌の戦士が打ち合っていた。

しまった、もう始まっていたか。初日から遅刻してしまった！

と、思っていたらバリトンの声が鋭く突き刺さった。

「遅刻だ、くそガキ」

腰まであるストレートの黒髪で涼しげな印象の男性は、こちらに紫色の眼を向けずに言い放った。細身だが常人以上の運動能力を有

していることは動きから明白だ。

細く長い剣を腰の鞘にしまう音がきん、と軽く響いた。

「ガキって言うな！」

眉を寄せて言い返すと、褐色の肌の戦士が唇の端で笑った。

戦士の背に輝くのは純白の翼、頭上に戴くのは煌く金冠——この戦士が普通の人間でないことは明らかだった。

「仲がよいな」

「よくないよ！」

「全くだ」

「そうか」

褐色の戦士はもう一度おかしそうに微笑んだ。

まだ少年のあどけなさを残した八重歯の目立つ表情がとても目を惹く。その瞳には炎妖玉ガイネットと碧光玉サファイアが一つずつ埋め込まれ、褐色の肢体は鍛え上げられてしなやかな筋肉がついている。くすんだ紺色の袖なし服から伸びる腕に握った青い刃の揺らめくような刀を腰の鞘に納めた。

背の純白の翼と金冠もさることながら、黒髪からは二本の短い角が飛び出しているのが人間味を完全に取り払っていた。

この戦士の少年の外見と裏腹に放たれる闘気と、それと裏腹に笑った時この人を包み込む穏やかな空気がとても好きだ。

「悪魔さんてみんなマルコシアスさんみたいに強いのか？」

「少なくとも我の知る者は皆 剣術を嗜む 人の子には負けぬ」

第35番目の悪魔マルコシアス……グリモワール王国に仕える天文学者、レメゲトンと呼ばれる地位を持つ者が使役する悪魔の一人だ。彼は他に類を見ない屈強な戦士だった。

「アガレスさんも？」

「無論」

「本人に聞けばいいだろう。お前もレメゲトンなんだ」

「いいじゃん。だってアガレスさんに聞くと答えが1000倍になって返ってくるんだよ？」

「お前にはいい頭の体操になるだろう、くそガキ。ちゃんと全部聞いて考えろ」

「考えてるよ！ 考えるけど、ぜんぜん分かんないんだ。アレイさんもいつぺん聞いてみるといいんだ。分かんないはずだ！」

「お前の頭が足りないだけだ」

「マルコシアスさんの言うことは分かりやすいじゃん。ずるいよ！」
「何がずるいだ」

アレイさんはあきれたようにため息をついて腕を組んだ。

「少しはレメゲトンとしての自覚を持て」

「むー」

眉間にしわを寄せたけれど、アレイさんは紫の瞳でちらりとこちらを見ただけだった。

そんな自分とは言えば剣の稽古をつけてもらうためにアレイさんの屋敷に来たところだ。最近は夏に近づいて暑くなってきたのでブーツをやめて皮のサンダルを履き、デニムのショートパンツにくすんだ紺のノースリーブ……これはマルコシアスさんとお揃いだ。わざわざ育て親のねえちゃんに頼んで作ってもらった。

3日ほど前にアレイさんと二人で街まで出向いたときに購入した小太刀をベルトに差し、肩にかかるくらいの黒髪は後ろでまとめてきた。

「第一なぜお前はアガレスに剣術を師事しないんだ」

「アガレスさんにはおれが3歳くらいの小さい子供に見えるんだって。だからやりづらいつて言われたよ」

「幼き娘 か」

「あれ？ どうしてその呼び方を知ってるの？」

『幼き娘』というのは、ついこの間契約した第2番目の悪魔アガレスさんが自分に対して使う呼称だから他のヒトが知ってるはずない。

「アガレスとは 永きに渡る 戦友だ」

「そうだったの？」

「クローセルも 長い付き合いになる」

言われて第49番目の悪魔クローセルさんの姿を思い浮かべる。

金髪碧眼で純白の翼と金冠を抱いた切れ長の眼の美しい悪魔さんだ。見た目だけなら天使といっていいと思う。

「堕ちた者同士 惹かれあうものだ」

「あのさ、マルコシアスさん。もう少しだけ質問していい？」

「構わぬ」

「ラース……グラシャ・ラボラスについて教えて欲しいんだ」

マルコシアスさんはその名を出した瞬間、顔をこわばらせた。

それは完全な嫌悪と拒絶だった。

「知らぬ やつの素性も 由来も」

「！」

オッドアイに灯った冷たい光に背筋に冷たいものが這った。

そう、このヒトは悪魔。魔界でも類を見ない勇壮な姿に見合う強く真直ぐな心を持つ——戦の悪魔マルコシアス。今だって自分が怖がらないように闘気を最大限まで抑えてくれているはずだ。

その優しさに甘えていてはいけないことを自分は最近身をもって学習した——その証としてすでに自分のものではない左手の甲には悪魔のコインが埋め込まれている。

「それよりも早く稽古を始めるぞ。ただでさえお前は遅刻してきたんだからな」

「分かったよ！」

アレイさんはいつもイジワルだ。

この間少しかだけ優しくかったと思ったのに、あれはもしかすると夢だったんじゃないだろうかと思う。とても目の前のこのヒトがあんな台詞を吐いて優しく包み込んでくれたなんて信じられない。

おかしいなあ。

アレイさんはアレイスター・W・クロウリーと言って、この国に自分を含めて6人しかいないレメゲトンの一人だ。同時に伯爵の地位も持つらしい。

第35番目の悪魔マルコシアスさんの他に第43番目の悪魔サブ
ノックさんを使うというのだけれど、そのヒトはまだ会ったことが
ない。

いつか会いたいとずっと思っている。

SECT・2 はじめての剣術

ねえちゃんに新しく作ってもらった箆手を両手にはめた。左手の甲に埋め込まれたコインが隠れて少しほっとする。

「どうしたらいい？」

「最初は木刀だ。短刀以外は使ったことがないだろう」

「はい」

アレイさんから木刀を受け取って右手で構えると、マルコシアスさんが不意に近寄ってきて木刀を両手に握らせた。

「これは短剣に非ず 片手では弾き飛ばされる」

「とにかく剣はしっかり握れ。落とすな。落としたら終わりと思え。そのうち体術も教えるが、体の小さいお前にとってそれは本当に最後の手段だ」

「分かった」

ぎゅっと木刀の柄を握って構えると、アレイさんが目の前に立った。

「スタンスはゆるく、肩の力を抜け……そうだ。相手の目から視線を外すな」

「基本は短刀と変わらぬが 間合いが遠い 用心せよ」

マルコシアスさんが自分の後ろについた。

「アレイ 力を抜け 唯の稽古だ」

「はい」

アレイさんの真剣なまなざしを受け取って、しっかりと見返した。「簡単な組み手だ。話しながらでも軽く受け流せるように型を体に叩き込むことにする」

「刃をよく見る 力に逆らわず 受け流せ」

アレイさんが木刀を振り上げた。

まっすぐに振り下ろされてくる軌道を読んで横になぎ払った。

「違う 力で捻じ曲げず 水に揺れ風に誘われる 木々の揺らめき

の様に」

構えを戻して次の攻撃を待つ。

横からなぎ払うような攻撃をまともに受けると、手がびりびりと震えた。

「そんな受け方をしていたら非力なお前では体が持たない」

言われてはつとする。

ラースが自分の体を使ったとき、ものの数分で自分の体に限界が来たことを思い出した。

「もっと流れに身を任せるんだ」

「難しいよ！」

何度か打ち合って手がしびれそうになったころ、マルコシアスさんはいったん自分を止めた。

「一度 見るといい」

自分から木刀を奪ってアレイさんの前に立つと、軽くアレイさんに打ちかかった。

——速い！

音速で振り下ろされた木刀を、アレイさんは受け止めもはじきもせずにまるで撫でるようにして軌道を変えた。

「！」

ほとんど木刀がぶつかり合う音もしない。

すごい。

アレイさんの動きはまさに流れるようで、攻撃を受けているというよりは軽くかわしているだけに見えた。

すさまじい速さで打ち合った後、マルコシアスさんは不意に間合いを切った。

オッドアイをこちらに向け、軽く微笑む。

「見えたか」

「見えた！ すげえ！」

「眼は良いようだ　すぐ上達する」

「言ってることが判った気がする。やってみるよ！」

マルコシアスさんから木刀を受け取って、もう一度構えなおす。紫の瞳をまっすぐに見つめた。

「相手から目を離すな！」

「力を抜いて、しっかり刃を見る」

「はい！」

「精進せよ 幼き娘」

「はい！ ありがとうございます！」

数時間後、ようやく特訓を終えて床にへたり込んだ。

もう汗だくだ。

呼吸を整えながら座り込んでいると、マルコシアスさんが近寄ってきた。

「大丈夫だ　すぐに強くなる」

「ほんと？」

「筋がいい　アレイとの契約を思い出す」

「契約の時？　アレイさんが3ヶ月も帰って来なかったっていう…」

…

そう聞き返すと、マルコシアスさんは少年のような顔で楽しそうに笑った。

「3ヶ月か　精々30時間ほどだと　思ったのだがな」

「おかげでかなり鍛えられました」

「時間の流れが違うんだよね。向こうのほうがゆっくりなんだね」

「ゆっくりとは限らない。時空列に規則性がない。速いときもあれば遅いときもある」

「そうなんだ。んじやあ年のとり方も違うの？」

「もともと我等　年をとらぬ　外見はそれなりに変えられる」

「んじやあ今の見た目は作ってるって事？」

「形を変えようと意識せねば　こうなる」

「背中の翼も？」

「これは我が 堕ちた証 常に存在する」

マルコシアスさんの純白の翼はとても魅惑的だった。

「あの……触ってもいい？」

恐る恐る尋ねると、マルコシアスさんは微笑んだ。

アレイさんは奇異なものを見るように驚いた目でこっちを見た。

「許す」

「ほんと！」

「マルコシアス！ このくそガキを甘やかさないでください！」

嬉しい。前にねえちゃんの使用役する悪魔クローセルさんに頼んだときはにべもなく断られたのに！

マルコシアスさんが体を横にずらして翼を差し出してくれた。

左手を出すのは憚られたので、純白の翼にそっと右手を伸ばした。

「……あつたかい」

暖かくて柔らかくて気持ちよくて、不思議な感じがした。

吸い込まれそうでしたと絡みつくような手触りに思わず翼の表面に手を滑らせていた。

「気持ちいい……幸せだ」

穏やかな気持ちになれた。まるでアレイさんの腕の中にいるみただった。

「満足か 幼き娘」

「うん……この羽根、すごく素敵だね」

「一枚抜いて 持っているといい」

「いいの?!」

「構わぬ」

「ありがとう！」

翼の表面に並ぶ羽根を一枚選んで、思い切って引き抜いた。

「……痛くなかった？」

「心配せずとも 大丈夫だ」

もらった羽根をじっと見つめる。

ここは屋内だというのに陽の光を反射したようにキラキラと輝い

て、動かすとその風で草原のようにさざめいた。その上手触りは極上だ。

「アガレスさんにも羽根はあるのかな？」

「奴は 翼を鳥に変えた」

「あつ、あの鷹がアガレスさんの翼だったの？」

「翼と 失った眼の代わりだ」

「！」

そうなのだ。自分が契約した第2番目の悪魔アガレスさんは横一文字に切られた傷で両目の視力を失っていた。

「ねえ、マルコシアスさん。アガレスさんの目の怪我……誰にやられたの？」

「それを 我に聞くのか 幼き娘」

「……あ、うん、ごめん、本人に聞くよ」

「それがいい」

そうは言ったものの、アガレスさんからひどく長い回答を受け取るだろう事を予想してげんなりとした。

SECT・3 おだやかな時間

そのままアレイさんのうちで昼食をご馳走になった。

食事をした部屋はとても広くてテーブルの上で剣の練習だつてできそうなくらいだったけれど、アレイさんと料理を運んでくれるヒト以外は誰もいなかった。

「アレイさんのおうちは静かだね」

「そうか？」

「うん。ねえちゃんちは賑やかだよ。もっと小さなテーブルでねえちゃんの母上様とヨハンとあと同居してるグラント子爵と一緒に食べるんだ」

「ケネスⅡグラント子爵か。遠くイスベリカに妻子があると聞いたが」

「うん、おれくらいの子供がいるんだって。すごく優しいおじちゃんだよ」

「子爵をおじちゃんなどと呼ぶな」

「アレイさんだつてじい様のことくそじいって言うじゃん」

それは前々からほんとに気に入らないんだ。じい様はあんなに優しいのに！

「じいはいいいんだ」

「よくないよ！ おれじい様好きだもん！」

ぷつと膨れると、ちょう給仕のヒトが目の前にデザートフルーツカクテルを置いてくれた。

「ありがとう！」

お礼を言つてフルーツを口に運ぶ。

甘くておいしい。

その幸せに浸っていると、アレイさんの冷たい視線が降ってくる。

「ガキだな」

「ガキって言うな！」

もうこの言葉を何度アレイさんに向かって叫んだろう。

アレイさんも本当は優しい人だと思うんだけど、なんで口を開く
とこうなってしまうんだろう。

これはねえちゃんの年と同じくらい不思議なことだ。

「あ、そうだ！」

思い出した。

「今度ね、ねえちゃんのお休みが取れたら一回カトランジエの街に
連れて行ってもらうんだ！ アレイさんも行かない？」

「カトランジエというとお前が以前住んでいた街だな。なぜ俺を誘
う？ 二人で行ってくるといい」

「だってアレイさんも一緒がいいと思っただ」

ねえちゃんもそれがいいと言ってくれた。ただ、アレイは忙しい
からちゃんと本人に聞いてみるのよ、と。

アレイさんは困っているのか不機嫌なのかいまいち分からない表
情で腕を組んだ。

少し考えているようにも見えた。

「行ってやってもいい。ただ、もう少しだけ待っている」

「うん、いいよ。おれのお休みはあと2週間残ってるから」

「2週間か」

アレイさんは唇を引き結んだ。

何かを決心した表情^{かお}だった。

「どうしたの？」

「お前は知らなくていい」

ぴしゃりとした言い方にむっとした。

「何でだよ、教えてくれたっていいじゃん！」

「言いたくない」

「！！」

何でアレイさんはたまにこんな子供みたいなこと言うんだろう！

「ねえさんの休みはいつ取れそうなんだ？」

「一週間くらい後だって」

「わかった。覚えておく」

「うん」

にこりと笑うと、アレイさんはがたりと席を立った。

「どこ行くの？」

「何とか時間を作ってやる。一週間マルコシアスとの稽古は休みだ」

「えー？」

「代わりに稽古場を紹介してやるからついて来い」

「ほんと？」

アレイさんが向かったのは馬小屋だった。

「馬には乗れるのか？」

「乗ってるくらいならできるんじゃないかな」

「違う、馬術はやったことがあるかと聞いているんだ」

「ないよ」

アレイさんはため息をついた。

仕方ないじゃないか。今まで乗らなくちゃいけない機会なんてなかったんだから。

「それも頼んでおこう」

漆黒の毛並みの馬を一頭選んで、使用人みたいなヒトに鞍を付けてもらっていた。

アレイさんは馬の背に乗ると右手を差し出した。

「早くしろ」

首をかしげていると、いらいらしたように叫んだ。

「乗れと言ってるんだ」

「じゃあそう言ってよー！」

仕方がないので差し出された手をとると、体がふわりと宙に浮いた。

気がつくとも馬上で横座りしていた。

「少しじつとしている」

「うん」

こうしてみるとやっぱりアレイさんは大きいなと思う。自分の体はアレイさんの腕の中にすっぽりと入ってしまう。

きょとんと紫の瞳を見上げると、アレイさんは少し眉を寄せた。

「何だ？」

「アレイさんは何でもできるんだねー」

「は？」

「剣術も馬術も、悪魔と契約だってしてるし……すごいね！」

「……落ちないようにしっかりとつかまってる。」

アレイさんはため息をつきそんな勢いで手綱を握った。

「うん」

馬は一つ甲高くいななくと、走り出した。

アレイさんの大きなお屋敷の庭を抜けて、門を通過した。

「どこに行くの？」

「お前がこれから世話になる漆黒星騎士団の団長のところだ。そろそろ挨拶にいつてもいい時期だろう」

「騎士団長さん！」

響きがかっこいい。絵本の中の世界でも、騎士団長はとても強くて勇敢な戦士だった。

「どんなヒト？」

「歴史上レティシア・クロウリーに次いで若い年齢で騎士団長に就任された方だ。クラウド・フォーチュン騎士団長、侯爵の位も持ちだ」

「いくつくらい？」

「もう30は越したがとてもそうは見えない。そうだな、雰囲気は少しクロールセルに似ているかもしれない」

クロールセルさんはねえちゃんが召還する金髪に碧眼、純白の翼と金冠を持つ切れ長の瞳のまるで天使さんのような悪魔だ。

あんまり口はよくないのだけれど、黙って笑っていると本物の天使のように美しいヒトだ。

「へえー。きれいなヒトなんだね」

「剣の腕は一流で、古体術にも秀でた方だ。きっとお前のよい師になつてくださるだろう」

「アレイさんは騎士団長さんと仲良しなの？」

「……義兄だ」

「お兄さん？」

「姉上の、結婚相手だ」

「アレイさんにお姉さんがいたんだ！」

びっくりして思わず紫の瞳を見上げると、とても緊張しているような何かを怖がっているような微妙な表情を浮かべていた。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

目の前にはねえちゃんの屋敷を髣髴とさせる大きなお屋敷が近づいていた。

SECT・4 おだやかな夫婦

インフェルノ外郭内の貴族のうちはどこにも一緒に見える。

ねえちゃんのうちもアレイさんの屋敷もこの騎士団長さんのお屋敷もみんな大きくてきれいで立派で、しかも迷子になりそうなほど複雑なつくりをしている。

それは王様の住んでいるジユデツカ城も同じなのだけれど。

門を過ぎても馬に乗ってお屋敷の入り口まで行くななんて今でも信じられないことだ。

入り口近くでアレイさんは馬を止めた。

先に下りて、また右手を差し出してくれる。

一人でも降りられるけれど、アレイさんが優しいのは珍しいことなので甘えておくことにして手を借りて馬から下りた。

「アレイ！」

鈴が鳴るように愛らしい、でも芯の通った女性の声でした。

はっとして振り向くと、空色のドレスを纏ったねえちゃんくらいの年の女のヒトだった。あまり化粧はしておらず、装飾も首のペンダントと髪留めの金のバレッタだけだった。

それでも顔立ちは整っていて、自然に美人だというのがとても好印象だった。

「姉上」

「思ったよりも早かったのね。待っていて、今クラウド様もいらっしやるわ」

「出迎えなどよかったのに」

「だって待ちきれなくて」

柔らかなこげ茶の髪を結い上げたその女性はアレイさんと同じ紫色の瞳をしていた。

「はじめまして。新しいレメトゲンさん」

「はじめまして！」

無愛想な感じのアレイさんとはあんまり似ていなくて、微笑みがとても温かい。ねえちゃんもすぐ美人なんだけど、それとはまた違った風に優しそうできれいなヒトだった。

「ラック」グリフィスと言います。よろしくお願いします」

ペこり、と頭を下げると女性も愛らしい声で返してくれた。

「私はダイアナ」フォーチュンよ。アレイの姉です。よろしく、ミス・グリフィス」

「ラックでいいよ、ダイアナさん」

そう言つとダイアナさんは楽しそうに笑った。

「ふふ、よろしくラック」

その時家の扉が開いて一人の男性が顔を出した。

「クラウド様、そんなに急がなくても誰も逃げませんよ」

「いや、だが待ちきれなくてな」

ダイアナさんと同じ事を言つてそわそわしながらこちらへやってきた。

「この子がそうかい？」

「えと、はじめまして、ラック」グリフィスと言います。騎士団長さんですか？」

「そうだよ」

とても優しそうなヒトだった。金髪に翠光玉の瞳、それと目元の雰囲気は確かにクロセルさんによく似ている気がする。

このヒトのほうがずっと柔らかな空気を纏っていたが。

「クラウド」フォーチュンだ。アレイがお世話になつているね」

「んとね、どつちかというとおれの方がお世話になつてるよ。アレイさんがいなかったらおれもう3回くらいは死んでたかもしれない」

正直にそう思ったのに、騎士団長さん——クラウドさんはくすくすとしそうに笑い、アレイさんは額に手を当ててため息をついた。
「そうかそうか」

ニコニコと笑ったクラウドさんは確かにもう30歳を超えているなんてとても信じられなかった。隣にダイアナさんが並ぶとまるで

絵本に出てきそうな王子様とお姫様みたいに見えた。

クラウドさんはアレイさんより少し背が低いくらいで、それでも標準よりはずいぶん上だろう。ダイアナさんは自分と同じくらい。でもヒールの分ダイアナさんの目線のほうが少し高かった。二人は見下ろすことも見下ろされることもない距離で、それが少しだけうらやましいなと思った。

アレイさんは少し大きすぎると思うんだ。

そうして紫の瞳を見上げると、相変わらず仏頂面で見下ろされた。

「アレイさんはちょっと大きすぎると思うよ」

「いったい何がだ」

「だって近づくとすぐく見上げなくちゃいけないじゃん」

「……」

「あら、それはどうしようもないわねえ」

ダイアナさんは朗らかに笑った。

アレイさんはなんともいえない顔で自分を見下ろしていた。

「おいで、ラック」

クラウドさんが手招きした。

てくてく近寄ると、クラウドさんは自分を軽く抱え上げて肩の上に座らせてくれた。

「うわっ」

「義兄上っ」

アレイさんがあわてて駆け寄ってくる。

初めてその紫の瞳を見下ろした。

思わず笑みがこぼれる。

「……何だ」

アレイさんが不機嫌そうに見上げてきた。

その黒髪をぽんぽん、と撫でてにっこり笑った。

「ガキ」

もちろんその直後アレイさんによってクラウドさんの肩から引き摺り下ろされたのは言うまでもない。

SECT・5 みらいのお話

「義兄上、絶対にこいつを甘やかさないください。姉上もです！ただでさえ調子に乗っているというのに……」

「だってラックかわいいじゃない。ねえ、クラウド様」

「本当だよ。今すぐ養女にもraitたいくらいだ」

アレイさんはそれを聞いて肩を震わせた。

こんな風に感情をあらわにするアレイさんはとても珍しい。

「肌もきれいな、髪も艶々だね。手足もすんなり伸びてるし……もつたないわね」

ダイアナさんは自分をなめるように上から下まで観察した。

「そうだね。ちょっといらっしやい、ラック」

ダイアナさんに連れられてお屋敷の中に入った。

連れて行かれたのは、ねえちゃんちでも見たことのある大量の衣装が収納された部屋だった。しかもこの家の衣裳部屋はゆうに自分の部屋以上はある。

「少しだけアレイに近づけてあげるわ」

「ほんと？」

「本当よ」

自分の身長はダイアナさんとそう変わらない。サイズもほとんど違わない。ねえちゃんの服を着るときほど苦労はしないだろう。

「何色にしようかしら。そうね、黒髪だから淡い色のほうが似合うと思うの」

とは言っても着せ替え人形になるのが好きなわけではない。

余計な口出しはせずに黙っておくのが一番だ。

「何色が好きかしら？」

「んー、オレンジ」

お日様の色だから。

そうしてダイアナさんが選んだのは、橙のパステルカラーだった。

胸の下にリボンが結んであつて、そこから広がるようにひざ上までのすそがひらひらと舞っている。布地はグラデーションに染色してあつて、シンプルではあつたがとても見栄えのするワンピースだった。

袖がなく肩が完全にあらわになるものだったが、少しずつ熱くなつてきたこの季節にはぴつたりだ。

「私がまだ十代の頃に来ていた服よ」

「かわいいね」

正直に感想を述べると、ダイアナさんはにっこりと微笑んだ。

「それじゃ、これにしましょう」

とりあえず服を脱いだ。

籠手はずすと左手のコインが見えてしまう。

「手袋も必要ね」

あまり深く追求せずさりとってくれたのがとても嬉しかった。白い手袋ときらきら光る銀のネックレス、それに蒼水星アクアマリンの髪留めと明るい橙色の靴を借りた。

服を脱ぐと、ダイアナさんが息を呑んだのが分かった。

「3年前の傷だからもう痛くないよ」

自分の背中には逆十字の傷がある。それは肩甲骨の真下を横断し首筋から腰にまで及ぶ大きなもので、アイリスとリコリスを除けばねえちゃんしか知らないものだった。

3年前ねえちゃんに拾われたとき負っていた傷はほぼ完治したのだが、この傷だけはどうしても消えなかった。

「痛かった？」

「ん、よく覚えてない」

それは本当だった。3年前ねえちゃんに拾われた頃の記憶はとも曖昧で、はつきりと思ひ出せるのは『探索者』に任命された瞬間からだつた。

「そう」

ダイアナさんは悲しそうに微笑んで、その傷を隠すようにすぐワ

ンピースを着せてくれた。

軽く髪を整えて、装飾品を身につけた。少しするだけでも変わるのよ、と唇に薄く桃色のラインを引いた。

「じゃあ、これを履いて」

明るい橙の靴を差し出された。

華奢なつくりで指先が出るタイプの涼しげな靴だったが、ヒールがそれなりにあってこれを履いて歩けるかというのはかなりの問題だった。

案の定履いたはいいもののあまりうまくバランスが取れない。

「ほら見て。かわいらしいわあ！」

ダイアナさんに手を引かれて鏡の前に立ってみると、そこに映っていたのは自分じゃないみたいなたった。

淡い橙のワンピースから伸びる手足はすんなりと細く伸びていて、薄く紅を引いた唇もはつと目を惹く。黒髪に黒瞳、象牙色の肌に明るい太陽のようなオレンジ色はとてもよく合っていた。

「ほんとだ……おれじゃないみたい」

「ふふ、きつともう2年もすれば結婚の申し込みが殺到するわよ。」

「えー？」

何で？

「そんなものいらないよ」

「そうね、少し早いかもしれないわ」

「おれは結婚なんてしないよ。ねえちゃんとずっと一緒にいるんだ」

「あら、それは寂しいわ」

「何で？」

「だって私、あなたがアレイのお嫁さんになるのをすごく楽しみにしているんですもの」

「アレイさんの？」

思わずきょとした声が出してしまった。

「何で？」

「ラックはアレイ嫌いかしら？」

「うっん、すごく好きだよ」

「そう、よかった」

ダイアナさんはそう言って嬉しそうに笑った。

「じゃあ二人のところへ戻ってお披露目しましょう」

「はい」

結婚なんてすごく先の話だと思っていた。でもよく考えれば、世間一般的に見ればそんな年なのかもしれない。

とは言ってもまだ実感はぜんぜんわからない。誰かを好きになることだってないのに、結婚なんてずっとずっと遠い未来の出来事のよう to 思えた。

だったらおれはねえちゃんと結婚したい。

でもそれは無理なんだってねえちゃんは言ってた。結婚は男と女と一人ずつじゃないとだめなんだって。

それならおれは男にだってなるのに。ねえちゃんをずっと守ってあげたいのに。

それは少し違うんだとねえちゃん言う。

いつか守ってもらって嬉しいと思うときが来るから。そして、何をかけても守りたいと思うヒトができるからって――

「さあ、開けるわよ？」

気がついたら一つの部屋の前に来ていて、ダイアナさんは微笑んで扉を開けた。

一瞬だけアレイさんの紫の瞳がよぎった気がしたのだけれど、なぜだか分からなかったからすぐに忘れてしまった。

SECT・6 いじわるの裏返し

「おお！」

クラウドさんは歓声を上げて立ち上がった。

自分の部屋の何倍もある空間の向こうに明るいい日差しが差し込むテラスがあって、アレイさんとクラウドさんが席についていた。

「美しい！ 本当にこのまま娘にしまいたいくらいだ。」

なれないヒールのたどたどしい足取りでテラスのほうへ向かう。

でも、外に出る段差のところで躓いてしまった。

転ぶ、と思ったがふわりと誰かの腕で支えられた。

そのまま手をとってテラスの側へエスコートされた。

こういう時アレイさんはやっぱり貴族で、リードするのも上手だなと思う。きつと小さい頃からそんな風に教育されて、普段の生活でそうしてきたのだろう。

でもアレイさんはまるで目を逸らすように紫の瞳を庭の方向に向けてしまっている。

「ありがとう」

特に返事はなかった。でも、いつもより少しだけ紫の瞳までの距離が近い気がする——ああ、そうか。靴の踵が高いぶん少し近いんだね。ダイアナさんの言ったとおりだ。

重ねた右手を見て、少し近づいた紫の瞳を見上げて、にこりと微笑んだ。

「少しだけ近づいたね」

「……気のせいだ」

相変わらず無表情で何を思っているのかは分からないが、どうやら特別嫌がっているわけではないらしいということは今までの経験から知っていた。

「さあ、お茶にしましょう。美味しいハーブティがあるのよ」

アレイさんが椅子を引いてくれて、すんなり座ることができた。

本当にすごいなあ。貴族の男のヒトってみんなこうなんだろうか？
と、思ってたクラウドさんを見ると、やっぱりダイアナさんが座る
椅子をちゃんと引いていた。やっぱりそうなんだ。

貴族のヒトって優しいんだなあ。

「クッキーは好きかしら？」

「大好き！」

ダイアナさんの言葉に即答する。

「それじゃ、ケーキは？」

「甘いものは全部好きだよ。とくにフルーツケーキが好き。クリー
ムたっぷりやつ！」

「そう、それじゃ明日は作っておくわ」

「ほんと？」

「明日からはここに通うといい。マルコシアスとアレイのようにい
かないかもしれないが、いくらか剣術と馬術の指南をしよう」

クラウドさんはにこりと微笑んだ。

「ありがとう！」

「ねえさんには俺から話しておく。とりあえず一週間待っている」

「うん、いいよ。帰ってきたら遊びに行こう」

「あらアレイ、どこかへ行くの？」

「……すぐ戻る」

アレイさんは不機嫌そうに呟いた。

いったいどこへ行くかは知らないけれど、一週間したら戻ってく
るってアレイさんが言うんだから絶対戻ってくるはずだ。

きっと帰ってきたら話してくれるに違いない。

「うちの王子は姫に余計な心配をかけたくないそうだよ、ダイアナ」
「あらそう。意地っ張りも変わらないわねえ」

ダイアナさんはくすくすと笑った。

その様子は花が綻ぶように思わず自分もつられて微笑んだ。

ダイアナさんは本当にきれいで優しいヒトだ。自分の母親はどん
なヒトか知らないけれど、こんなヒトが母さんだったらすごく嬉し

い。

「ダイアナさんが母さんだったらよかったのに」

正直にそう言うと、アレイさんは盛大に頭を抑えてため息をつき、クラウドさんは楽しそうに笑った。

当のダイアナさんは少し驚いた顔をしていた。

「もしかして嫌だった……？」

心配になってダイアナさんを見たが、すぐに微笑み返してくれた。

「いいえ、嬉しいわ。私もあなたのような娘が欲しいわ」

「よかった！」

にこりと笑うと、ダイアナさんはさらに続けた。

「でも、どちらかというと娘より妹がいいわね。それならきっと今からでも遅くないはずよ」

「そうなの？」

首を傾げると、隣に座っているアレイさんが絞り出すような声を出した。

「姉上……そろそろお暇します」

「あら、もう帰ってしまうの？ 寂しいわ」

「明日からこのくそガキをよろしくお願いします」

そう言つてさつと席を立った。

突然すぎるよ！

「待つてよ！ おれも一緒に帰るよ！」

慌てて後を追おうとしたが、慣れない靴では追いつけない。

よろよろと歩いていると、目の前に手が差し出された。

「似合わない靴を履くからだ」

見上げると紫の瞳がいつもより少しだけ近くにあった。

なぜだかそれがとても嬉しくて、心から微笑んだ。

ダイアナさんがその服はあげるわ、と言ったのでそのまま着て帰ることにした。

馬には少し乗りにくかったが、アレイさんが手を貸してくれたからあんまり苦勞することはなかった。

「お茶ご馳走様でした」

「いいえ。明日もいらっしやい。ケーキを焼いて待っているわ」

「わあい」

「ケーキじゃなくて稽古だろう。義兄上、よろしくお願いします」

「分かってるよ」

「では、失礼します」

アレイさんは手綱を取った。

邪魔をしないように少し縮こまって、クラウドさんとダイアナさんに小さくお辞儀をした。

「アレイ！」

走り出す直前クラウドさんの声が追いかけてきた。

「マルコシアスのご加護を！」

アレイさんは軽く礼をすると馬を走らせた。

大きなお屋敷が遠ざかっていく。

「ねえさんの屋敷まで送ってやる。ついでにねえさんに話もあるかな」

「ありがとう」

アレイさんがいつもこんな風に優しくかったらいいのに。なんでイジワルだったり冷たかったり思い出したように優しくったりするんだろう。

もう何だかアレイさんがよく分からないよ。

紫の瞳を見上げていると、アレイさんが気づいて少し見下ろした。

「……どうかしたか？」

「あのさ、何でアレイさんは優しくったりイジワルだったりするの？」

「……」

そう聞くとアレイさんはもうそれ以上口を聞いてくれなくなってしまった。

どうやら本当に怒らせてしまったらしい。

SECT・7 ふしぎな気持ち

ねえちゃんのうちに到着して降りようと手を貸してくれた時も全く口を開いてくれない。

「……怒ってる？」

「別に」

「嘘だ。だってぜんぜん喋ってくれないじゃん」

唇を尖らせて上目遣いに見上げるとアレイさんは大きなため息をついた。

「本当にお前は……」

何もかもを言葉を飲み込んだようにもう一つ大きく息をつくときしゃりと髪を撫でてくれた。

「仕方ない奴だな」

とても珍しいアレイさんの微笑みに思わず釘付けになった。

前に辛いことがあった時してくれたみたいに優しい腕の中に包み込まれたような気持ちになった。温かくて安心する微笑だった。

「怒っていない。そんな顔をするな」

「ほんと？」

ほっとして笑うと、アレイさんはもう一度頭を撫でてくれた。大きな手のひらが心地いい。アレイさんの手はとても好きだ。

とても子ども扱いされている気がしたが、なぜだかとても嬉しかったのでその感触を存分に楽しむことにした。

「ただいま」

出迎えてくれたマリーばあやさんに挨拶すると、ばあやさんはびっくりしたように目を大きくした。

「ラック様。そのお召し物は……」

「すまない。客人をフォーチュン侯爵家にお連れした。その際の土産物だと思ってくれ」

アレイさんが簡単に説明した。

「それよりもファウスト女伯爵はご在宅か？」

「いいえ、まだ帰っておりません」

「んじゃあおれの部屋で待ちなよ。広いから」

アレイさんの手を引いて自分の部屋まで行った。

戻ってすぐに靴を脱いだ。この靴を履いているとずっと爪先立ちで歩いているような状態だ。つま先が痛くてしょうがない。

「痛いよう……」

ベッドの端に座って足を伸ばしているとアレイさんがずっと目の前に跪いた。

「見せてみる」

「ん」

「少し赤くなっているな。サイズが少し合っていなかったんだろう、薬を塗っておく」

どこから取り出したのかアレイさんは小さなビンを取り出して、つんとする匂いのする薬をひりひりと痛む足の側面に塗ってくれた。

「そのお薬、いつも持ってるの？」

「ああ。仕事柄怪我をする機会も多いからな」

怪我、と聞いてどきりとした。この間自分のせいで大怪我を負わせてしまったばかりだ。きっとその傷だってまだ完全に癒えていないはずだ。

明日から一週間待っていると言った。

もしかしたらまた危ない目にあうんじゃないだろうか。

「アレイさん」

「何だ？」

「ちゃんと戻ってくるよね。ひどい怪我したりしちゃうだよ……？」

胸の辺りがきゅっと締められるように傷んだ。

なんだろう、この気持ち。

アレイさんが怪我をしたり危ない目にあったりするのはいすごく嫌

だった。ちゃんと無事で元気に帰ってきて欲しい。

真直ぐに見つめたアレイさんの紫の瞳が少し揺らいた気がした。
目が離せない。

深い紫から視線を外すことができない。

このまま吸い込まれてしまいそうだ……

「失礼します」

アイリスの声ではっとした。

「お茶をお持ちしました」

と、アイリスの視線がこちらに向けられる。

靴を脱いでベッドの端に座る自分と、そこに跪いたアレイさん。

いったいどう解釈したのかは分からないが、アイリスは真っ赤になつてお茶の入ったお盆をテーブルの上に慌てて置くと、

「しっ、失礼しましたっ！」

そのまま慌しく出て行ってしまった。

「……？」

首を傾げていると、アレイさんはすぐに立ち上がってアイリスを追った。

いったい、どうしたというんだろう？

アレイさんはすぐに戻ってきて、アイリスとリコリスもその後についていた。

「あ、アイリス。どうして逃げちゃったの？」

「すみません、ラック様。私はてっきり……」

アイリスは恥ずかしそうにはにかんで、アレイさんは大きくため息をついていた。

「今お茶の用意をしますね」

アイリスとリコリスがお茶を入れて、自分とアレイさんは4つし

か椅子のない席に着いた。とはいってもカトランジェの街で住んでいたアパートにあった机の2倍以上はあるのだが。

カップから湯気が上がっている。

「ねえちゃんはまだ戻らないの？」

「ええ、いつもならすでにご帰宅されている時間なのですが……今日は遅くなるとも聞いていませんし」

外は暗くなり始めている。

日の長いこの頃では日が落ちてすぐに夕飯をとるのが常だった。

「城で何かあったのか……？」

薄く闇が降りてきた窓の外にはジュデッカ城のシルエットが浮かんでいる。

今までそんなことは思わなかったが、今日のジュデッカ城はなぜかとても禍々しい気を纏っているように見えた。

嫌な予感がする。

それはアレイさんも同じだったようで、唇を真一文字に結んでジュデッカ城を睨みつけていた。

ねえちゃんはその日、帰ってこなかった。

- - - はじまり - - -

明るい朝日を迎えながら、絶望的な気分でジユデッカ城を見上げた。

ねえちゃんはいったいどうしているんだろう？

ほとんど寝ないで一緒に待っていてくれたアレイさんが隣に来てポツリと呟いた。

「すぐにジユデッカ城へ行くぞ。嫌な予感がする」
唇をひき結んで深く頷いた。

すごくすごく嫌な予感がした。

今まで感じたことのないくらい不安感は過去のフラッシュバックのときの感覚に似ている。

馬を準備しているアレイさんを待つ間に震えそうになった肩をアレイさんがぎゅっと抱きとめてくれてとてもほっとした。

漠然とした不安をやわらげたくて、手綱を握るアレイさんの胸にしがみついた。

それでも消えない不安がこの先の困難の大きさを物語っているようだった。

震え出しそうになる度にアレイさんに頼った。それを全部受け止めてくれたのがとても嬉しかった——アレイさんが一緒にいてくれてよかった。

一緒にいてくれることが本当に嬉しかった。

何か大きな歯車が動き出そうとしていた。

幸せな日々と日常が音を立てて遠ざかっていく。ゆっくりと何かが崩壊していく。まるでこれまでの平和な日々が嘘だったみたいにきつとそれはもう止められないこと——それは心のどこかで分か

っていた気がする。

それでもいつかまた日常に戻ってくる。

それだけを信じて目の前のジュデッカ城を見上げた。

SECT・8 サミュエルⅡⅡメイザース

ジュデツカ城に入るのは二度目だ。

ところが、今回はなぜか門番の警備が厳しくて簡単には中に入れなかった。たぶん二人とも私服で来たのも一つの原因だろう。

「レメゲトンのアレイスターⅡクロウリーとラックⅡグリフィスだ。中に通してくれ。王と話がしたい」

そう言うつと門番さんたちは掌を返したようにさつと道を開けた。

「レメゲトンて……すごいんだね」

「位としては騎士より上だ。国中でお前を合わせてもたつたの6人しかないからな」

ジュデツカ城の長い廊下を急ぎ足のアレイさんを追いかけながら、必死で不安を消そうと話しかけた。

「アレイさんはレメゲトンで騎士で伯爵なの？」

「名目上はそうだ」

「長い肩書きだねえ」

「仕方がない。気づいたら増えていたんだ」

そこでまた門番に止められた。

今日の警備は厳重すぎる気がするよ。門番さんがあちらこちらにいて、すぐに止められてしまう。

「どちら様ですか。謁見許可は？」

「レメゲトンのアレイスターⅡクロウリーとラックⅡグリフィスだ。許可はないが緊急で話したい」

アレイさんが早口で言った瞬間、門番さんの後ろから声がした。

「クロウリー伯爵、ゼデキヤ王がお待ちです。すぐ中にどうぞ」

ふと見るとそこには同じレメゲトンのベアトリーチェさんが立っていた。

この間王様に会った広くて明るい部屋とはぜんぜん違って窓の小さい、しかも書類に埋まった部屋の片隅に王様がいた。

王様の顔は口ひげ以外全く覚えていなかったが、その口ひげが少しも変化していなかったものでほっとした。やっぱりこの王様、王冠以外は普通のおじちゃんに見えるよ。

「すまぬな、クロウリー伯爵、それにラックも来ているか。すぐにヴァイヤー老師とメイザース侯爵も来るだろう」

「……一体何があったのですか？」

アレイさんが真剣な口調で聞いた。

「全員が集まってから話そう。大変な事態が起きた」

「それはねえちゃんが昨日から帰らないことと関係あるの……？」
一番聞きたかったことを口にした。

その瞬間に王様の顔が強張った。

心臓がどくりと跳ね上がる。ねえちゃんに何かあったんだ！

さらに問おうとすると、アレイさんがぼん、と肩を叩いた。

「落ち着け、ガキ」

「……ガキって言うな」

言いなれた台詞を吐いたら少し落ち着いた。

それでも心臓の鼓動はおさまらない。耳もとで大きく心臓の音が鳴り響いている。

沈黙の中で少し待っていると、扉が開いてじい様と共に一人の男性が姿を現した。

「すみません、遅くなりました」

初めて見るヒトだった。ぼさぼさと長い前髪に濃い紺のローブを纏ったそのヒトは眼鏡の奥の温和そうな瞳を困ったようにゆがめてこちらを見た。

「見たことのないヒトがいますよ？」

「つい最近レメゲトンに就任したラックⅡグリフィスだ。噂くらいは聞いているだろう」

「ああ、この子が例の……」

眼鏡のヒトはにこりと笑って手を差し出した。

「僕はサミュエルⅡⅡメイザース。レメゲトンの一人です。普段は書庫に籠っているからあまり会う機会はないかもしれませんが、よろしく」

「おれはラックⅡグリフィスです。よろしく願います」

簡単に挨拶を済ませて、すぐに本題に入った。

「さあ、一体何があつたか教えてください」

「急いでない、若造」

「うるせえくそじじい」

アレイさんがじい様を睨んだ。

「これはジュデツカ城内とレメゲトンだけで内密に処理したい……
極秘事項として扱ってくれ」

「昨日の晩ですか？何が……」

「セフィラが、現れたのだ」

「！」

じい様と王様以外全員が息を呑んだ。

「このジュデツカ城にですか?!」

「そうだ。正確には夕刻、地下牢獄での出来事だ」

昨日の夕方、突如セフィラが地下牢獄に現れたらしい。

その場にいた衛兵たちを屠り、すぐ地上に飛び出してその場は騒然となった。

天使の加護を受けたセフィラはそのままジュデツカ城に侵入、何かを求めるようにしてさまよった拳句謁見の間にたどり着いた。

ちやうど居合わせたねえちゃんとじい様が応戦して……

「ファウスト女伯爵が第18番目の悪魔バシンを使いセフィラもろとも何処かへと空間転移したのだ」

SECT・9 切望の搜索

「ねえちゃんが……！」

「昨夜は騒ぎを収めるので手一杯だった。ファウスト女伯爵の身が案じられる」

心臓が切り裂かれそうに痛んだ。ものすごい速さで脈動している。頭の中を様々な考えがくるくると入れ替わって目の前の景色が遠くなる。思わず倒れそうになったけれどなんとか自分の足で支えた。探しに行かなくちゃ！」

そうだ。こんなことしている場合じゃない。

ねえちゃんを探さなくちゃ。

どこかへ飛んだのが昨日の夕方なら、とっくに帰ってきていてもおかしくない。それなのに戻らないということは何かあったに違いない。

セフィラと一緒に飛んだ、と言った。

怪我してないだろうか。それどころかまさか……

目の前が真っ暗になった。

そんなことあるはずがない。ねえちゃんは強いんだから、負けるはずがない。

「搜索にクロウリー伯爵とラック、それとアリギエリ女爵を任命したい」

「ゼデキヤ王?!」

アレイさんは信じられない、という表情をした。

「このガキを連れて行けというんですか?! セフィラと交戦するかもしれないですよ?!」

つまりは自分は王都に残っている、とアレイさんは言っているのだ。

そんなことできるはずがないじゃないか!

「だいじょうぶだ、おれも行く!」

「だめだ、お前は残っている」

「やだ！」

「どれだけ危険か分かっているのか！」

アレイさんの怒号。

それでも引く気はなかった。

「危険でもねえちゃんが……」

ねえちゃんがない世界なんて考えられない。探しに行く。たとえそれが地の果てだとしても。

「くそガキ！」

「クロウリー伯爵、ラックも連れて行つてはどうだ。そう頑なに断るものではない」

「……セフィラに会うには、足手纏いです。こんなガキ」

「確かにそれは言える」

じい様の声に思わず目を見開いた。

「何でだよ、じい様！」

「今回のセフィラもあのティファレットだ」

「！」

銀髪の一ト。

どくりと心臓が脈打った。

「お主はティファレットに執着しておる。捕われては危険だ」

今でもその姿を思い浮かべると会いたくてたまらない感情に押し流されそうになる。あの銀髪に、陶器のように白い肌に触れたい。

声が聞きたい。

何もかもを降伏させる圧倒的な銀色のオーラを思い出して背筋がぞくりとした。

「それもお主はまだアガレスしか使えんだろう？ セフィラの前で墮天のコインは無力……それは自分がよく知っておろう？」

そうだ。銀髪の一トが天使を呼び出した時、アガレスさんは召還に応じてくれなかった。

滅びのコインとも呼ばれたグラシヤラボラス、つまりラーズの力

があつたからこそ退けられたものの、自分ひとりの力では全く歯が立たないことはわかつている。

「無論それはこの若造にも言えることだが、若造はそこそこ剣術の嗜みがある。何しろ炎妖玉騎士団では若干20歳にして部隊長にまで上り詰めた男だ。だが、お主は……」

「じゃあフラウロスさんと契約する！」

思ってもいなかった言葉が口から飛び出した。

でも、これしかなかった。

天使を召還する銀髪の一と対等になるにはそうするしかないと思つた。

「今すぐ！ そしたら行つてもいいでしょう、ねえ、王様！」

「……」

ゼデキヤ王は少し迷っているように見えた。

でも、それは一瞬だった。

「よかるう」

「ゼデキヤ王！」

アレイさんが叫んだ。

「クロウリー伯爵、ラックを連れて行きなさい。おそらくその洞察力は役に立つはずだ。フラウロスとの契約後、すぐに出発せよ」

王様が厳しい瞳でアレイさんを射抜いた。その力強さは先ほどまで普通のおじちゃんだと思つていた王様の瞳とは全く別の色をしていた。

そう、ねえちゃんが時折見せる強い意志を反射した帝王の瞳だ。

その瞳に、アレイさんはまだ何か言いたそうだったが口をつぐんだ。

「……御意」

「セフィラの目的が全く分からない。白昼堂々城に空間転移してきた理由も、何を探して城内に侵入したのかも。分からね以上慎重な行動を願う。ヴァイヤー老師は引き続き占星術を、アリギエリ女爵はすぐに出発、メイザース侯爵は史料を探してくれ。特にセフィラ

との戦いについてだ」

「はい」

「かしこまりました」

部屋を出たが、アレイさんはなかなか出てこなかった。

「契約の間に魔方阵を準備する。ついてきなさい」

「はい」

じい様に連れられて神殿へ向かった。

アレイさんのことは気になったけれど、それよりもねえちゃんの
ほうが大事だった。

絶対にフラウロスさんと契約してねえちゃんを探しに行くんだ。

負けない。フラウロスさんを必ず降伏させて契約を結ぶ。

強い気持ちでまだ契約していないフラウロスさんのコインを握り
締めた。

SECT・10 必然の誓い

神殿の地下もまだ2回目だった。

相変わらず不気味な魔方陣が所狭しと並んでいる。明かりだつてもつと増やせばいいのに、なんで暗いままにしておくんだろう。

じい様は本を見ながらゆつくりと魔方陣を描いていった。

この間はねえちゃんもアレイさんも一緒だったからあまり思わなかったけれど、今回この部屋の中にかすかに漂う血の匂いが気になつて仕方がなかった。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

自分に言い聞かせて心を落ち着けていると、反対にどんどん不安が膨れ上がってきた。

呼吸の音が大きく聞こえる。そうだ、昨日あんまり寝てないんだつた。

壁にもたれかかつてずずず、と座り込んだ。

ねえちゃんはどうしているだろう。ちゃんと眠つただろうか。怪

我なんてしてないだろうか。ご飯ちゃんと食べたかな。

そんなことを考えていたら鼻の奥がつんとした。

どこいっちゃったんだよ……ねえちゃん……！

視界がじんわりとに滲んでくる。おかしいな、こんなことで泣いたりなんかしたくないのに。

「何泣きそんな顔してるんだ」

バリトンの声。

はつとして顔を上げると、目の前に紫色の瞳があった。

「行くぞ」

「え？」

思わず目を見開いた。

目線を合わせるように膝をついたアレイさんは言い聞かせるように、確認するようにはっきりと言った。

「契約。するんだろ？ねえさんを探しに行くんだろっ？」

「うん」

「じゃあ立て」

「うん」

腕で涙をぬぐって立ち上がった。

アレイさんも立ち上がって、少しだけ紫の瞳が遠ざかる。

「魔方阵はまだか、くそじい」

「急がせるでない。もう少し待っておれ」

「やはりもう年だな」

不機嫌そうに舌打ちするアレイさんはいつものアレイさんだった。
でも、どうしてここにいるんだろっ？

「何でここに来たの？」

「俺も契約するからだ」

「え?!」

「マルコシアスだけではセフィラに対抗できない。もう一つ、別の
コインと契約する。もともと決めていたことだ。こういう事態にな
らなくても今日には契約を執行するつもりだった」

「!」

そう言い放ったアレイさんの横顔はランプの明かりに彩られてと
ても凛々しかった。

同時にすごく嬉しかった。

「がんばるよ。絶対フラウロスさんと契約して帰ってくる」

「絶対だ」

アレイさんがこちらを見ずに言った。

その胸中に強い意思が秘められているのは一目瞭然だった。

「どんなコインなの？」

「第38番目の悪魔ハルファス。マルコシアスと同じ戦をつかさど
る悪魔だが、墮天ではない。戦闘を好み常に自分より強い者を求め
ている。調伏させるには完全に打ち負かす以外ない」

「……戦うって事？」

「そうだ」

「怪我、しないだね。元気で帰ってきてね」

そうか。前にアガレスさんと契約する時、ねえちゃんやアレイさんはこんな気持ちだったんだ。

危険なことは分かっている。でもそれでも止めることはできない。

それでも心配で心配で仕方ない。だから願うんだ。

ちゃんと無事に帰ってきて欲しいって――

「おれもちゃんと帰ってきてくるよ。だから、アレイさんも約束して」

「……」

アレイさんはなんとも言いがたい瞳で見下ろした。

でも本当に本気だった。

催促するように両手を伸ばした。

「どうした？」

「屈んでよ、屈かないよ」

アレイさんは少し不思議そうな顔をしたが、言われるがまま少し屈んだ。

紫の瞳が近くなる。

そのままアレイさんの黒髪に手を伸ばして、頭の後ろに手を当てて胸に抱え込んだ。

「！」

「死なないで。帰ってきて」

そっと呟いた。

アガレスさんと契約する前にアレイさんがそうしてくれたように。さらさらの髪はとも手触りがよくて、頬にかかると少しくすぐったいような感触でなぜだか泣きそうになった。

これから危険なところに飛び込んでいくんだと思っただけで胸が締め付けられるように痛んだ。

ぎゅうつとアレイさんを抱きしめたら、アレイさんも背に手を回してくれた。

「全く、何を言ってるんだ」

地面から足が離れた。

そうして幼い子供をあやすようにばんぼんと軽く背を叩くと、アレイさんは自分を地面に降ろした。

「大丈夫に決まっているだろう。お前は何も心配しなくていい。自分が契約することだけを考える。そして、ねえさんを探すことだけを考えるんだ」

肩に手を置いて真直ぐに見つめて、強い意思を含んだ言葉で。

「だいじょうぶ、アレイさんは強いんだから。」

「わかった」

こくりと頷くと、アレイさんは満足したようにまた視線をはずした。

そのとき、じい様の声がした。

「できたぞ、若造」

「さあ、行くぞ」

「うん！」

二人一緒に足を踏み出した。

魔法人のサークルの中に入って、ぎゅっとコインを握り締めた。

だいじょうぶ、きつと無事に契約して帰ってくる。そして、ねえちゃんを探しに行くんだ！

「フラウロス！」

「ハルファス！」

その瞬間、目の前の景色が一変した。

SECT・11 フラウロス

魔法陣を包む黒い霧が晴れて、周囲の景色が見えてきた。

「暑い……」

最初に思ったのはそれだった。

目の前にはごつごつとした岩場が広がっている。自分よりずっと高く聳え立つ岩がいくつも天を刺すように林立していた。

足元の岩も普通の石と違って黒っぽく表面がでこぼこしている。

少し目線を先にやると、岩のくぼみが赤い液体が沸騰したときのように泡立っていた。赤い沼のようなそれを見つめていると、顔が焼けるように熱かった。

そんな赤い沼はよく見るとあちこちにあり、どこも不気味な音を立てていた。

「フラウロスさん……どこ？」

あたりを見渡してみたが見当たらない。

一步、足を踏み出した。とにかく暑い。額に大粒の汗が浮かんだ。ぼこりと不気味な音を立てて赤い液体が泡を吹く。

「魔界にもいろんな所があるんだな」

前回アガレスさんに会ったのは荒涼とした冷たい風が吹き荒れる殺風景な場所だった。

マルコシアスさんが住むのはどんな場所なんだろう？ 今度聞いてみてもいいかもしれない。

「フラウロスさん！」

呼んでも現れる気配はない。

でも、コインでこの場所に來たのだからこの周辺に必ずフラウロスさんがいるはずだ。

だいじょうぶ、探し物は得意だから。

もうずっと昔のことに感じるが、探索者として毎日街中を駆け回っていた頃、自分の仕事は違和感を見つけ出すことだった。

感覚を研ぎ澄ます。

視野を広げて、耳を澄まして、肌で空気を感じる。
何か変わっているところはないか？

周囲を見渡してみる。天に向かって飛び出た黒い岩、赤い沼、ごつごつとした岩の転がる大地。

「……」

ふと目の前の赤い沼のようなものが感覚に触れた。

あなたの感覚を信じなさい。

ねえちゃんはよくそう言った。

気にかかったその沼をじっと見つめる。いつたい、何がおかしい？ 他と違うところはどこ？

「見つけた」

そう、泡が出ていない部分がある。

それはほんの一部分だけだけれど、周囲の様子から見て不自然なことは否めなかった。明らかに沼面が穏やかな場所は疑うのに十分だ。

どうして泡が出ていないのか——それはそこに、何かいるから。

「フラウロスさん、いるんでしょう？ そこに」

赤く泡をはじかせる沼に向かって言った。

「出てきて。おれ、あなたと契約したいんだ」

返事がない。

そこにいることは絶対間違いないのに。

返事くらいしてくれたっていいじゃん。

「おれ、大切なヒトを探しに行かなくちゃいけないんだ。でも、おれ一人の力じゃ足りない。アガレスさんの力も借りられなくて……」
左手の甲に埋め込まれたコインを隠すように握った。

「お願いだよ、フラウロスさん。せめて……出てきてよ」

「グラシヤ・ラボラス……」

沼面が揺らめいた。

まるで陽炎のように立ち上り、真っ赤な塊がぐにやりと沼から飛

び出してきた。

その瞬間に高温の熱風が吹き荒れた。

「うわっ……」

思わず目を閉じる。

おそろおそろ開くと、目の前にはオレンジ色に黒の斑点を打った巨大な豹がこちらを睨んでいた。

「フラウロスさんですか？」

アガレスさんに会った時に受けた感じより、むしろラースを目にした時の畏怖に近かった。

震えそうな声を抑えて腹から搾り出した。

「はじめまして、グリモワール国のレメゲトンのラック・グリフィスと言います」

こんなに礼儀正しく挨拶をできたのは初めてかもしれない。

これならねえちゃんに100点をもらえるだろう。

最後に深くお辞儀をして顔を上げると、思ったより近くにフラウロスさんの毛並みがあって驚いた。その体はまるで熱を発しているようだった。直視すると目が焼けそうだった。

「黄金獅子の末裔」

がらがらにしゃがれた声は皮膚の感じる暑さと裏腹に背筋に冷たいものを流し込んだ。

「何故 ラボラス」

その声のトーンは驚きを包有していた。

「ラースと知り合いなの……？」

恐る恐る聞くと、灼熱の毛並みと妖炎の瞳を持つ獣は天を仰いだ。

「名の交換 まさか」

まるで世界の終わりがきたかのような絶望的な声に思わず身震いした。

だめだ、ここでひいちゃだめだ。おれはフラウロスさんと契約してちゃんと無事に帰るんだ。アレイさんと約束したんだから。そして、二人でねえちゃんを探しに行くんだ！

「おれはラースと契約した。この左手はラースがくれたんだ。名前も教えてもらった。すごく綺麗な名前だ。これは……契約の証だ」

コインの埋まった左手甲を見せ付けるように突き出した。

「フラウロスさん、力を貸して。おれは大切な人を探しに行かなくちゃいけないんだ。そのためにはアガレスさんだけじゃだめなんだ！」

「老師父 いけ好かんが あれは強い」

「強いけど……天使さんの前じゃアガレスさんを召還できないんだ、おれは」

「天使」

「そうなんだ、今度の敵は天使さんなんだ」

銀髪のヒトの面影を振り切るように頭をぶんぶんとうった。

刹那、目の前にいる獣から発せられる気配が一変した。

「カマエル」

その響きは地獄の底から這い上がってきた憎しみの色をしていた。暑さとは違う汗が全身から噴出した。心臓の脈動が早まっている。息をするのがうまくいかなくて、呼吸が荒くなる。

必死で落ち着こうとしたがうまくいかない。

「す、少し違うんだ、カマエルさんじゃなくて、ね、えっと……名前前は……」

つつかえつつかえ言葉を発した。

「ミ、ミカエル……」

地獄の業火を宿した瞳がこちらに向けられた瞬間に心臓が止まるかと思った。

が、フラウロスさんは少し発する熱気を弱めた。

治まったのではなく、外に向けて発していた怒りを内面に凝縮させたようであることに恐ろしさが増した。

内に燃え盛る炎を秘めた灼熱の獣は一言だけ、言った。

「契約を許す」

「？」

何で？

いったいどうして許してくれたのか全く分からなかった。

アガレスさんの時のようになぞなぞに答えられたわけでも、アレイさんの言うように力で屈服させたわけでも、クローセルさんがねえちゃんを気に入っているみたいになったわけでもない。

「何故……？ どうしておれと契約してくれるの？」

「いつか会う カマエル 倒す」

「？」

アガレスさんはかえってくる言葉が多すぎるけど、フラウロスさんはちよつと少なすぎるよ。

でもどうやらカマエルさんという天使さんがいることと、フラウロスさんがその天使さんに会いたいんじゃないかということだけがわかった。

「カマエルさんに会いたいの？」

「カマエル 倒す」

「……」

やっぱりフラウロスさんはカマエルさんと会いたいんだ。でも、

それは倒したいから――

銀髪のアヒトが憎しみをこめた瞳でこちらを見ていた表情を思い出してずきりと胸が痛んだ。あのアヒトは自分を殺したくて仕方がないらしい。

いったいどうしてなんだろう？

いや、だめだ、こんなことを考えている場合じゃない。

「フラウロスさん、契約しよう」

腰に差していた小太刀を抜いて、軽く右腕を傷つけた。

そしてずっと右腕を差し出すと、灼熱の獣が近づいてきた。

暑い空気が全身を襲った。同時に――すさまじい恐怖も。逃げそうになる足を必死で留めた。差し出した右手のこぶしをぐっと握る。右腕の傷口に舌が這う。

「熱っ……」

痛みとは違う感覚が駆け抜けた。銀髪の人頭に傷を抉られた時の感覚にも似ているが、こちらはまるで腕が焼け落ちそうになる感覚だった。そう、むしろラースに左腕を食いちぎられたときのようだ。しばらくして満足したのかフラウロスさんは自分と少し距離を置いた。

「美味」

獣は舌をぺろりと出して鼻先をなめた。

右腕の切傷は少し焦げたように黒く変色していた。

「左腕一本 なるほど」

天からコインが降ってくる。

契約完了の証だ。

「ありがとう、フラウロスさん」

「カマエル 倒す」

「分かっている。カマエルさんに会ったらすぐフラウロスさんを召還するね。それでいい？」

「許す」

「ミカエルさんと戦う時も呼んでいい？」

「許す」

「ありがとう」

今回ここに来てから初めて笑ったかもしれない。

フラウロスさんは何も返事してくれなくて、目の前をまた暗黒の霧が覆った。

SECT・12 サン＝ミュレク＝グリモワール

「遅かったな、くそガキ」

最初に出迎えてくれたのはアレイさんのイジワルな台詞だった。むっとして眉を寄せると、さらに追いかけてきた。

「それでセフィラを相手にしようなんて10年早い」

「何を言う、お主も帰ったところだろう」

アレイさんの隣にいたじい様がため息混じりに呟いた。

「じい様、ただいま！」

「怪我はないか？」

「うん、だいじょうぶ！」

にこつと笑ったけれど、アレイさんが険しい顔で近寄ってきた。

「腕！」

「え？」

「見せてみる、右腕だ」

しぶしぶ右腕を差し出すと、アレイさんは眉を吊り上げた。

小太刀で切った傷をフラウロスさんが舐めた部分は黒く変色して炭のようになっていた。血は止まっているしもう痛みもない。

「やっぱりだ。何が大丈夫、だ！」

「だいじょうぶだもん。もう痛くないもん」

「当たり前だ、細胞が焼けて死んでいるからな！」

アレイさんはむすつとした表情でどこからか布を取り出すと、無造作に腕に巻きつけた。

「医務室で見てもらえ。午後には出発する」

その一言ではつとした。

「待って！今いつなの？どれだけたってるの？」

「……丸一日だ。時間が惜しい、早くしろ」

「わかった」

じい様に連れられて医務室でお医者さんに診てもらった。

傷は見た目ほどたいしたことはなく、すぐにかさぶたができて治るでしょう、と言ってくれた。

念のため塗り薬をもらって包帯を巻いてもらった。お薬は小さなビンに入っていて、それには見覚えがあった。

そう、アレイさんとお揃いだった。

だからアレイさんがさつき巻いてくれた布にその小瓶を包んでそっと胸元にしまった。

出発準備のために一度ねえちゃんのお屋敷に戻らなくてはいけない。アレイさんとは昼食後にプルガトリオ・ゲートで落ち合う約束になっている。

とにかく急いで歩いていた。

しかし、いつまでたっても城から出られる気配がない。

「おかしいなあ……」

あんまり認めたくはないのだけれど。

どうやら初めて城に来た時から微かによぎっていた不安が現実となってしまったようだ。

「迷子だねえ」

一刻も早くねえちゃんを探しに行きたいのだけれど。

どうしてこうなってしまったんだろう？

「やっぱり最初の角を左に曲がったのがまずかったのかなあ」

とはいえもうもとの部屋にだって戻れない。

「困ったなあ」

「どうしたの？」

「うん、実はおれ迷子で……」

え？今の誰？

はっとして後ろを振り返る。

そこに立っていたのは……

「ねえちゃ……ん？」

思い切り首を傾げてしまった。

ねえちゃんによく似た顔の女性だった。猫のような目が印象的な美女だ、が妖艶な雰囲気はなく悪女というイメージも伝わってこなかった。

似たようなストレートのブロンドだけれど肩までしかない。猫のような目は一緒だけれど、瞳の色は灰色だ。何より、体型が違いすぎる。

細身の黒いパンツにシンプルな灰色の五分袖シャツ。そのどこにも胸が見当たらなかった。

高くもなく低くもなく、とても聞きやすい高さの声でその女性は自分に問いた。

「君は誰？ どこに行きたいの？」

「えっと、おれはラック・グリフィス。できればこの城から出たいんだけど」

「ああ、君が新しいレメゲトンだったんだ」

「おまえ、誰だ？」

まるでねえちゃんの首から下部分だけを取り替えたようなその女性にはこりと笑った。

笑った顔に邪気がない——これもねえちゃんと大きく違うところだ。

「僕はサン・ミレク・グリモワール。現国王ゲーティア・ゼデキヤ・グリモワールの息子だよ」

「ああ、あのおじちゃんの……え、息子？」

首を傾げると、その女性——だと思っていた人物は困ったようにはにかんだ。

「よく女と間違われる。とくに、ファウスト女伯爵に似ていると言われることが多いかな」

「うん、そうなんだよ！ ねえちゃんにそっくりなんだ！」

受ける印象は全く違うけれど、顔だけなら本当にそのままだ。身長もきつと一緒にいだろう。

要するにねえちゃんをそのまま男にしたらこんな風になるんだろ
う。

「えと、サン……で、いいのかな？」

「うん、いいよ」

「出口教えてくれないかな。実は急いでるんだ」

「ファウスト女伯爵の搜索だね、父上から聞いている。連れて行ってあげるよ。こっち！」

サンはにこりと笑って指差した。

そうして二人並んで歩き出した。サンはアレイさんよりずっと背
が低くて見上げなくてもいいのがとてもよかった。

「僕はファウスト女伯爵とは従姉弟同士だから、血縁関係は近いよ」

「へえ、じゃヨハンも？」

「うん、ヨハンとは年が近いからよく一緒に遊んだな」

「サンはいくつなの？」

「今年で18歳。もうちょっとしっかりしろって言われるんだけど
……なかなか」

ねえちゃんと同じ顔が困ったように微笑むのはとても新鮮だった。

「んじゃあきつとおれと同じくらいだね」

「そう言えば君は3年以上前の記憶がないんだったね」

「ん、まあ、でもなくても困らないよ。むしろそれでねえちゃんに
会えたんだからおれはすごく嬉しい」

「そうか。君はすごく素直なんだね。自分が今幸せだって思えるの
はとてもすばらしいことだと思うよ。そんな風に考えられる人は素
敵だと思う」

「……アレイさんは阿呆っていうけどね」

「アレイさんって言うとかロウリー伯爵だね」

「うん。すごく綺麗なのに、いつもすごくイジワルでシツレイなこ
とばかり言うんだ」

「そうなの？ぜんぜん想像つかないや」

サンは驚いたように目を丸くした。

そうすると少しだけヨハンに似る。

「ほんとだよ！いつもいつもヒトのこと馬鹿にして……」

唇を尖らせると、サンはくすくす笑った。

「かわいいな、ラックは」

「え？」

「本当に自分に正直なんだね。表情もくるくる変わって……すごく、かわいい」

ねえちゃんと同じ顔が優しげに微笑んだ。

ちよつとドキドキした。

アレイさんのお姉さん、ダイアナさんやその夫のフォーチュン侯爵にも同じように言われたが、こんな風にドキドキすることはなかった。

「あ、ありがとう」

ちよつと気恥ずかしくなってサンから視線を逸らした。

サンはふふ、と軽やかに笑った。

なんだかヘンだ。ほっぺがすごく熱い。

「ここを真直ぐ行ったら衛兵さんがいるから、その扉を出たら外はすぐだよ」

「ありがとう！」

にこりと笑うと、サンも微笑んだ。

アレイさんは笑うことなんてないから、そうやって微笑み返してくれただけでもすごく嬉しかった。

「ねえ、サン」

「なに？」

「また会いに行ってもいい？」

「うん、ラックならいつでもおいで。待ってるよ」

嬉しい。

名残惜しく手を振りながら城を後にした。

SECT・13 始まりの丘にて

ねえちゃんのお屋敷で昼食をとり、アイリスとリコリスに手伝わしてもらって急いで準備をしてプルガトリオ・ゲートに向かったけれど、到着したときにはすでにアレイさんがいた。

一頭引きの小さな馬車が近くに止まっていた。馬車自体は飾りもなくとても簡素なものだったが、引いている馬はとても立派な体躯をしている。毛並みは茶色だが鬣だけが漆黒だった。

アレイさんは不機嫌そうな顔でその馬の隣に立っていた。

「遅いぞくそガキ」

「ごめん、迷子になっちゃって」

「どうしたらこんな狭い世界で迷子になれるんだ」

「ジユデツカ城は広すぎるよ！」

むっとして言い返すと、アレイさんはため息で答えた。

「とにかく行くぞ」

「もう！」

ぷうつと膨れたけれど全く通じない。

「早く乗れ」

言われてしぶしぶ中に入ったが、荷物を置いてぼつんと一人で座ると途端に寂しくなった。4人がけは少し広すぎる。

アレイさんが馬の手綱をとって馬車は走り出したけれど、一人で車内にいるというのはこの上ない苦痛だった。

前面についている窓を開けてアレイさんに話しかけた。

「ねえアレイさん」

「何だ？」

「そっち行つていい？」

「中にいる」

「やだよ寂しいもん」

そう言ってから天井にある木枠の窓を開けた。がたがたと、という車輪の音が大きくなる。

風に目を細めながらひよい、と屋根に出た。馬車は結構な速度で坂道を下っている。眼下には放射状に伸びる城下町の幾何学模様が広がっていた。

そのまま屋根伝いに馬車の前方まで来ると、ひよい、とアレイさんの隣に飛び降りた。

「！」

アレイさんは驚いたけれど、馬車は走り続けた。

中と違ってここは車輪の音や馬の足音がうるさい。談笑するには向いていないかもしれない。とはいえ、目の前にはもう城下町の市場が迫っている。

アレイさんは少し馬車の速度を緩めた。

「……危険な真似はよせ。」

「だいじょうぶだよ、このくらい」

でも、飛び降りた衝撃が胸元にしまっておいたはずの小瓶が転がり落ちた。

すんでのところでキャッチしてまた大事にしまふ。

「腕……大丈夫なのか？」

「うん。すぐ治るってお医者さんが言ってた」

包帯を巻いた右腕は動かすのに全く支障がない。先日左腕を失いかけたことに比べると全くたいしたことのない傷だった。

それでも左手甲に埋め込まれたラーズのコインをあまり視界に入れたくなくて、いつも箆手を付けるようにしていた。

滅びのコインを治めるためのお守りではないけれど、マルコシアスさんにもらった羽根が箆手の裏についている——先ほどリコリスが縫い付けてくれたものだ。

右の手首にはアガレスさんとフラウロスさんのコイン。

この時点で自分は4人の悪魔さんの印を持っていることになる。

気がつくと馬車は街のメインストリートに差し掛かっていて、周囲を歩くヒトたちや馬車も増えていた。午後になって市は一段楽しんでいるらしく、店をたたむ最中の露天商もちらほら見られた。ほんの数日前にアレイさんと二人で買い物に来た時に見たショーウィンドウのディスプレイがほんの少しだけ変わったようだった。

結局あの買い物で手に入れたのは腰に差した小太刀一つだったけれど、少しだけアレイさんに近づけた気がしたんだ。

「ねえ、アレイさん。これからどこに向かうの？」

「……カトランジエの街だ」

「え？」

「ねえさんが飛ぶとすれば知っている場所だろう。それを考えるとカトランジエの街の周辺に飛んだ可能性は高い」

街の景色を思い出して一瞬肩の力が抜けた。

灰色の石畳や街のヒトたちを思い出して心のどこかに明かりが灯ったように温かくなった。

「くそじじいの占いで東と出ている。アリギエリ女爵はカトランジエの街よりさらに東、セフィロトとの国境付近に搜索に出ている。」

「いまだ連絡はない……いや、まだ2日だ。到着もしていないだろう」「ねえちゃんが自分で王都に帰ってきたりするかもしれないよ」

それは一縷の望みだった。

何もなかったかのように明日にでもねえちゃんが帰ってくることを夢見ていた。

「それが、できないらしい」

「え？」

「原因は分からないが、『呪縛』の相がでている。どうやら動けない状態にあるらしい」

「動けない……？」

どくり、と一つ心臓が脈打った。

深刻な顔をして黙り込んだ顔をちらりと見て、躊躇いながらアレイさんは言った。

「だが死の暗示は出ていない。安心しろ」

死、という言葉が重々しく心にのしかかった。

「でも……！」

「だから、迎えに行くんだろう？」

紫の瞳は真直ぐに前を見つめていた。

「ねえさんは生きている。だが、動けない状態にいる。だから迎えに行くんだ。違うか？」

どうしてだろう。アレイさんがそう言うのだいじょうぶな気がするんだ。

確かにそうなんだと納得してしまうんだ。

「うん、そうだね」

アレイさんと同じように真直ぐ前を見つめてみた。

メインストリートを抜け、始まりの丘が目の前に迫っていた。

ここは始まりの地だ。王都ユダに到着して初めて街全体を見渡せる場所、そして旅立つ者が最後の景色を目に焼き付ける場所。

だが、王都を振り返ることはしなかった。

ただ真直ぐに前だけを見つめて、ねえちゃんを探し出すことだけを心に誓った。

SECT・14 ゼル

カトランジエの街までの道のりは果てしなく遠かった。

来るときはねえちゃんとアレイさんがかわるがわる昔話をしてくれたから退屈も半分だったのだが、今回は焦る気持ちも加速してどうにも落ち着かない。

その気持ちを分かってくれたのかそれともアレイさん自身もそうなのか、ほとんど休まず目的地を目指した。

宿も取らず深夜から早朝にかけて馬を休める休憩を取る程度だ。

2日目の昼にはカトランジエの街が目の前まで迫っていた。

「馬が……そろそろ限界だな」

アレイさんはそう言っていたん馬車を止めた。

ほとんど休まぬ強行軍だ。そろそろ無理がきてもおかしくなかったのだけれど、まさか目前にして動けなくなることはアレイさんも予想していなかったみたいだ。

「日暮れまでには到着する予定だったが、どうやら無理だな」

「そう」

道の端によつて馬を開放した。

荒い息遣いが伝わってきて、思わず馬の頬を撫でた。

「ありがとう。がんばってくれて、ありがとう」

でも、これからいっただうしたらいいんだろう。

ぼんやりと草原の中に続く一本道を見つめた。

見慣れた山が近づいている。カトランジエの街からそう遠くないところにあるラッセル山だ。2年ほど前に一度だけねえちゃんに連れて行ってもらったことがある。

あの山の天辺からは町全体と、それから今朝出発した隣の町まで見渡せる。

あの時も広がる草原を見て、真直ぐに続く道を見て、あまりの街

の小ささに呆然となった記憶がある。

「歩くには少し遠いな」

アレイさんは目を細めて道の先を見た。

「でも、行こうよ。ねえちゃん、街にいるかもしれないんだよ？」

もうすぐそこまで街は迫っているというのに。

身動きの取れないねえちゃんがあそこにいるかもしれないというのに、こんなところで足踏みをしているわけにはいかない。

「馬を置いていくわけにもいくまい。明日になってしまつかもしれないが、少し休ませてから進むべきだ」

「そうだけど……」

「ねえさんがあの街にいるという確証はないんだ。慌てても仕方がないだろう」

「……」

ぜんぜん納得できなかったけれど、ここまでずっとがんばってくれたお馬さんがとても疲れた顔をしていたのと、アレイさんは文句を言っても聞くヒトじゃないことが分かっていたので口をつぐんだ。

半分夏の光を含んだ日差しが照りつけている。真つ青な空を白い雲が流れていった。

どれだけ時間が経っているのだろう。日が少しずつ西に傾き始めた。西は王都の方角、反対側にはラッセル山と未だ見えぬカトランジェの街。

交互に見て、あまりの自分の無力さに力が抜ける。

そんな様子を見取ったのか、アレイさんがぼつりと話し出した。

「山の向こうは草原だ。それを超えると東の都トロメオ・イスコキユートスがある。北の都カイン・イスコキユートス、南の都アンテノール・イスコキユートスと並ぶ大きな都だ」

「王都は西の都なの？」

「そうだ。初代国王ユダの名を戴いたグリモワール王国の政治の中心にあたるのが王都ユダ・イスコキュートス。今回アリギエリ女爵が向かったのは東の都トロメオのさらに東、セフィロト国との国境付近だ」

「確か、炎妖玉騎士団が駐留するカーバンクルがあるんだよね？」

「ねえちゃんがいってたか言っていたことを思い出してそう答えると、アレイさんは驚いたような顔をした。」

その意味が分からず首を傾げたがアレイさんは答えてくれなかった。

仕方がないので続けて質問した。

「アレイさんは炎妖玉騎士団に所属してるんだよね？」

「そうだ。だが、今は騎士でなくレメゲトンとして所属している」

「……何か違うの？」

「常に騎士団の元にいる必要がなくなる。必要となったときのみ騎士団と行動を共にするが、普段は王の勅命を受けて別の任務についていることが多い。訓練にも参加せず、はっきり所属しているとは言えないな」

「おれもそのうち漆黒星騎士団に配属されるってねえちゃんが言ってたよ」

「おそらくその予定だろう。レメゲトンはいずれかの騎士団に所属することになっている。ゼデキヤ王のことだ、ねえさんと王都にとどまれる道を選択なさるはずだ。となると王都に在住するのはねえさんが属する輝光石騎士団の他は漆黒星騎士団しかないのだからな」

「漆黒星騎士団はクラウドさんが団長さんだったよね」

「ああ、そうだ」

どこか悪魔のクロールセルさんに似た雰囲気シェイドの金髪と翡翠の瞳を思い出して思わず頬が緩んだ。

クラウドさんはとても綺麗で優しいヒトだ。しかも騎士団長さんなんだからきつととても強いんだろう。奥さんのダイアナさん、つまりアレイさんのお姉さんもとても優しくて美しいヒトだった。

あの二人の家の子供になれたら楽しい毎日を送れるはずだ。

考えたことがアレイさんに伝わってしまったのだろうか、紫の瞳があきれたようにこちらに向けられていた。

「阿呆面で笑うな。ガキのせいでこっちまで気が抜ける」

「またガキって言った!」

「ガキにガキといって何が悪い」

もう何度も何度も繰り返したような台詞にもう何度も吐いた台詞で答える。

そんなやりとりをここ3日で何度繰り返しただろう?

それでもどうしても言い返したくなってしまうのはとても不思議だと思う。

日を浴びて暑くなってきたので馬車の陰に入った。ラッセル山を眼前にしてまた焦りが募る。心臓の拍動が早まる。気持ちが急かす。

「……もう少し待ってもう一度出発しよう」

その様子を見かねたのかアレイさんはそう言った。

「うん、わかった」

頷いて、馬車の壁に体を持たれかける。

アレイさんも影に入って同じように馬車に寄りかかった。眠るように目を閉じてじっとしている。

そうしているとまるで一枚の絵のような剣士の姿になった。端正な顔に黒髪がかかってそこはかとなく孤独を漂わせているのがどこか悲しみを感じさせた。

爽やかな風が吹き抜けて腰まであるストレートの黒髪をふわりと揺らした。

その姿に見入っていると、ふいに背後に気配を感じた。

はっとして振り向くと……

「あ、やっぱりラックじゃないか」

とてもよく知っている顔がそこにいた。

「ゼル!」

カトランジエの街の鍛冶屋のゼルだった。

大きな荷台を牛2頭に引かせてのんびりと道を行っていたようだ。カトランジエの街から離れていたのはたった半月ほどのことだったのにゼルの声も顔もみんな懐かしかった。

「どうしたんだよ、こんなところで！ 最近見なかったしさ」

「ちよっとお馬さんが疲れちゃって……ゼルは？」

「隣町に納品してきた帰りさ」

くりくりとした目と鼻のあたりに散っているそばかすで子供っぽく見られがちだが、ゼルはすでに立派な鍛冶屋として働いている。そろそろ奥さんを貰う年頃だとマスターが言っていたのを覚えている。

ゼルはとび色の瞳を丸くして、それからこりと笑った。

「後ろ、乗せて行きなよ。馬車は無理かもしれないけど馬と人は乗るだろう？」

SECT・15 カトランジェ

ゼルの荷台に馬を乗せて、それから自分とアレイさんも乗り込んだ。

アレイさんはあまり喋らず、二台の後ろのほうに座り込んで後ろを向いてしまった。自分はといえば、荷台の前面に座るゼルのほうに身を乗り出すようにして乗り込んだ。

「ミーナさんの酒場も店じまいしたらしいな。街のオヤジどもが狂乱してたぜ?」

「そうだよ、ねえちゃんと一緒に王都に行ったんだもん」

「王都に? ……ま、いいや。」

ゼルはなんだかいろいろ聞きたそうだったけれど、後にしようと思ったのかそれよりもつと気になっていたのか、声を潜めて聞いた。「あの、後ろの人誰なんだ? すげえ綺麗な人だな。顔からして男だろ? 格好を見る限りかなり偉そうだけど……」

「アレイさんだよ。うん、なんか偉い人みたい。騎士で伯爵でレメゲトンだし」

「レメゲトン?!」

ゼルは大声を上げた。

が、すぐに声を潜めた。

「本当なのか?! 何だってお前そんな偉い人と一緒にいるんだよ!」

「だっておれもレメゲトンになったもん」

「はあああ?!」

ゼルは思い切り眉を寄せた。

「何言ってるんだ、お前?!」

小声になるのも忘れて大声を上げた。

アレイさんはちらりとこちらを見ただけですぐに視線を後ろに戻した。

「んーなんかおれもよくわかんない」

「だろうな。お前バカだもんな」

「うん」

あれ、おかしいな。同じ事をアレイさんに言われるとすぐに言い返してしまうのに、なんでゼルに言われてもすんなり受け入れてしまっただろう？

とても不思議だ。

「お前に聞いてもしょうがねえや。街のどこまで行きたいんだ？」

「……アレイさん、どこ行けばいい？」

振り返って聞くとアレイさんは静かなバリトンで答えてくれた。

「とりあえずねえさんの店に行く」

「でもあの店はいま鍵がかかってますよ、綺麗なお兄さん」

「鍵はある」

アレイさんは振り向きもせずには答えた。

愛想がないのはいつものことだったけれど、ゼルは困ったように自分を見た。

「怖そうな人だね」

「そうでもないんだよ？」

でも確かに初めて会った時はアレイさんの闇色マントが怖かった気がする。

あれから半月しか経っていないのに。

懐かしいカトランジェの街が目の前に迫っていた。夕日が差して真っ赤に染まった家並みはとても暖かった。

王都を見た後だからなのかは分からないけれど、カトランジェの街はとても小さくて、道もとても細くてびっくりした。

いつも走り回っていたベージュの石畳はこんなに小さかっただろうか。大きく見えた宿屋の建物はこんなに低かっただろうか。道の傍の花壇はこんなに花が少なかっただろうか……

「ここでいいかな？」

ゼルはねえちゃんのお店の前で降ろしてくれた。

「また何かあったら店に来な、ラック。手伝えることがあったらいくらでも手を貸すから」

「ありがとう、ゼル」

にこつと笑って見送った。

後姿が見えなくなってからねえちゃんの店に入った。

どうやらここは国の管轄になるらしくてアレイさんは王都からこの店の鍵を預かってきていた。

かちりという音がして、毎日飛び込んでいた店のドアがきしみながら開く。くすんだ茶色のテーブル、薄汚れたカウンター。何も変わらないのに……ねえちゃんがない。

腰まであるストレートのブロンドと気まぐれ猫みたいな金の瞳を思い出して胸がきゅつと締め付けられた。

あの日、銀髪のヒトに会った後ずっと眠っていた部屋もそのままだった。壁に掛けられた絵は少しかくすんで見えた。

ぼんやりと見飽きるくらいによく見た天井を見つめていると、アレイさんのバリトンが響いた。

「感傷に浸っている暇はない。すぐに出るぞ」

「うん」

切なくなってしまった気持ちを脱ぎ捨てて部屋を出る。

店に戻るとアレイさんはテーブルに地図を広げていた。

「地図の見方は分かるか？」

「うん、一応」

「ここがこの街、これがラッセル山だ。俺たちの搜索範囲は山全体とこの森、それから隣町までの区間だ」

アレイさんが地図を指差す。

森、と言ったのはここから北にあるジャスパグの街へとつづく道が突き抜けるクラインの森だった。銀髪のヒトが自分を連れ去った教会があるのはこの森の奥深くだった。

東はラッセル山、西は隣町のトロツカ、北はジャスパグ、南はカトランジェ。

広範囲にわたる探査地域だった。

「まずは聞き込みからはじめる。お前はこの町の出身なのだから情報網は広いだろう。そろそろ日が落ちるからすぐにこのあたりの酒場で情報収集する。明日からは実際に外に出て探索だ」

「分かった」

「この辺りに情報の手に入れられそうな酒場はあるか？」

「んとな、実はねえちゃんの店が一番だったの」

「……他は？」

「んー、マスターの弟さんが情報屋をやってるって言ってた気がする」

手がかりは何もなかった。

ねえちゃんが知っている所だろうっていうこととじい様が占って出した東という情報を頼りに来たけれど。

不安だ。

ねえちゃんはいったい今どこにいるんだろう。どうして動けないんだろう。

銀髪のヒトはどうなったんだろう。あのヒトは何で突然王都に現れたんだろう……？

「おいガキ」

「なに？」

見上げるとアレイさんは見たことのないカードを手に見ていた。

コインに描かれた悪魔の紋章に酷似した柄で、表には様々なシンボルが描かれているものだ。

「カードを使った簡単な占いを教えてやる」

「ほんと？」

地図を片付けたテーブルに20枚ほどのカードが並べられた。

「これはタロットと呼ばれるカードを使った占いを俺がいくらかア

レンジしたものだ」

カードは全部で21種類。月や星、太陽から王様や司祭に至るまで様々なカードが並べられた。

アレイさんはいったん広げたそのカードを左手で全て集めなおした。

「手順に従ってカードを並べる。そして、手札の意味するところを読む。ただ、それだけだ」

慣れた手つきでカードをシャッフルし、十字に配列するように5枚のカードを並べ、最後に真ん中のカードに一枚重ねた。

計6枚のカードをアレイさんは慎重にめくっていった。

「今知りたいのはねえさんの行方。それをカードに尋ねるんだ。十字の中央は現在の状況を表す」

中央のカードは足を縛られて逆さに吊るされた男のヒトの絵だった。

「このカードは『束縛』を意味する。くそじじいの占いの結果と一緒だ。次は健在意識と潜在意識が十字の縦を占めている」

めくられたカードは大きな塔が天を指す絵と、恋人の図だった。

「塔は『傲慢』を表す。恋人の逆位置は……戦の、前触れだ。顕在的には誰かの傲慢な行動に見えて、その裏には誰かの思念で戦が導かれている」

アレイさんの表情が強張った。

言っていることは難しすぎてよく分からなかったけれど、あまりいいことではないように思えた。

「十字の横は過去と未来だ。まず過去から……」

カードは愛らしい子供の絵だった。

「愚者は『自由』を表している。次は未来だが……」

アレイさんの手が止まった。

何のカードかは分からなかったけれど、黒々とした背景に浮かんだ大きな鎌はとてみいいことを表しているとは思えなかった。

「死神……？」

ふと思いついた名前を言うと、アレイさんは怖い顔をして頷いた。
「このままでは、『死』が迫っている」

「！」

がたん、と大きな音を立てて思わず立ち上がっていた。

心臓がばくばくいつている。

アレイさんは慎重な手つきで最後のカードをめくった。アレイさんが最初に現在を意味する、と言った束縛のカードの上に置かれたカードだった。

そこに描かれていたのは、黒い膜翼に黒い角、鋭い目つきの悪魔の姿。

「これは妨害を示す。悪魔だが……これは逆位置だ」

「悪魔の逆……天使？」

銀髪のヒトが目の前に浮かぶ。荘厳な御使いを背後に従えた姿はまぶたの裏に焼きついて離れない。

アレイさんは妨害と言った。あのヒトたちがねえちゃんを動けなくして、死に近づけているのか？

「これが最後だ」

そういつてアレイさんは手札の一番下のカードをめくった。

「神官のカード。神官は医療や宗教を表すカードだ。これが今回一番知りたい事への答えになる」

「姉ちゃんがいる場所のことだね。医療……病院とか？」

「一概には言えない。カードの意味を読み解くのは難しい」

アレイさんはカードを手元を集めた。

「占いはレメゲトンに必須だ。じじいやアリギエリ女爵、メイザース侯爵は占星術を使い、俺とねえさんはこのカードを使う。お前もカードを使った占いを覚えるといいだろう」

とんとん、とカードをそろえたアレイさんは大事そうにそのカードを布にくるみ、胸元にしまった。

「さあ、そろそろ頃合いだ。街に出て情報を集めるぞ」

「わかった」

カードの占いの結果はとても難しいものだったけれど、アレイさんには何かが分かったようだった。

厳しい表情から読み取れるその結果はとてもいい結果とはいえないもので、それが不安をさらに助長した。

SECT・16 ミーナの酒場

その時、入り口の扉が開いた。

「?!」

はつとして振り向くと、そこに立っていたのは鍛冶屋のゼルだった。

「どしたの? ゼル」

きょとんと首を傾げると、ゼルは困ったように笑った。

「ラックが帰って来たってちよつと話したら……親父たちが……」
とても言いづらそうにもごもごと口をつぐんだ。

いったいどうしたんだらうと見ていると、その理由はすぐに分かった。

「ラック! 久しぶりだな!」

「あ、マスター」

くるりんと空を指すひげとたゆんと揺れるおなか——街のカフェのマスターだった。

その後ろからもぞろぞろとたくさんの人が入ってくる。

ゼルの親父さんもいたし、カフェのマスターの弟さんもいた。隣の工場で働く従業員の人たちもいて、すぐに店はいっぱいになってしまった。

どこかで見たような面子だった。

そう、ねえちゃんの店の常連さんたちだ。ほんの一ヶ月前までは毎日のように夜中ねえちゃんの開く店にやってきていた、よく知る人たちばかりだった。

何度か店の手伝いをしていたからみんな顔なじみだ。

その人たちは店内を見渡すと、がっかりしたように呟いた。

「なんだ、ミーナさんはいないのか」

「ラックと一緒にじゃないのか?」

「だからミーナさんはいないって言っただろ、親父!」

ゼルがそばかすの散った顔を赤くして叫ぶ。

「ごめん、なんか勝手に集まっちゃって……俺は止めたんだよ！」
すまなそうに言いつつ、ぺこぺこと謝るゼルを見ていて、なんだかほっとした。よく知っている街に戻ってきた実感がわいてきた。

この街の人たちはとても温かい。

カフェのマスターはアレイさんを指差して言った。

「なあ、その綺麗な兄ちゃんは？」

「ラックと一緒に来た人だよ。王都からきたんだから、偉い人なんじゃないのかな」

アレイさんは無表情のままぼそりと言った。

「その……この酒場の主の親類だ」

「ああ、そうなのか」

アレイさんがねえちゃんと少なからず親類関係にあることは以前に聞いていた。

でもその説明は少し足りないように感じたが、アレイさんはいつも言葉少なだからこんなものかな、と思った。自分がへんなことを言ってアレイさんに怒られるのも嫌だし。

すると隣街の工場で働く従業員の一人が言った。

「で、また店をやってくれるのかい？」

その言葉に、アレイさんは黙り込んでしまった。

「ラック！ こっちにもビール！」

「はい」

一体どうしてこんなことになったんだろう。

今自分は昔のようにバンダナで髪を括ってエプロンをつけ、店の中を忙しく歩き回っている。

アレイさんはいつもねえちゃんがいた場所に収まって料理を作ったりカクテルを作ったりしていた。その姿がなぜかとても自然に見えるてびつくりした。

「おまちどおさま」

ゼルと隣に並ぶその親父さんの前にビールを並べると、親父さんが声を潜めて聞いた。

「いつたいあの綺麗な兄さんは何者だい？ 王都からきたと言うが

……もしかして貴族とか言うんじゃないだろうな。」

「そうだよ。アレイさんはレメゲトンだって言ってるじゃん」

眉を寄せてそう応えようと、親父さんははっはっは、と一笑に伏した。

「そんな偉い人がこんな片田舎に来るはずないだろう。それより……」

……

「なあに？」

「ミーナさんの夫とか言うんじゃないだろうな？」

「それは違うよー」

思わず笑ってしまった。確かにねえちゃんとアレイさんは仲良しだけど、夫婦じゃない。それこそ姉と弟のような関係だ。自分は3年以上前のねえちゃんを知らないし出会う前のアレイさんを知らないけれど、2人がずっと仲良しだったんだろうって事くらいは予想がついた。

貴族とかレメゲトンとか王国がどうか、はっきり言っていまだにあんまりよく分からないけれどねえちゃんやアレイさん、それにじい様がいる世界は自分にとって新鮮だった。

本当はもつというんなことを知らなくちゃいけないだろう。自分ねえちゃんたちが今ですんでいて自分がこれから飛び込むうとしている世界の『当たり前』を知らない。それは知りたくもあり、知ることが少し怖くもあった。

「ねえラック」

普段はこの店に顔を出したことなどなかったゼルがおずおずと聞いた。

なれない酒で酔いの回りも早いのか、まぶたが下りてきている。いつもくりくりと大きな眼が半分にまで落ちていた。

「さつき会ったときから思ってたんだけどさ」

「なあに？」

「お前髪長かったんだな」

「そつだよ。いつもバンドナでわかんなかっただろうけど」

「もしかしてさ、お前……」

首を傾げると、ゼルは目を逸らすようにしてポツリと聞いた。

「女なのか？」

「そつだよ」

知らなかったの、と言おうとしていつかのねえちゃんの台詞がよみがえる——『街のみんなはあなたのこと男の子だと思ってるわよ？』

ねえちゃんのことを思い出して、心臓がどくりと脈打った。

どこにいるのか。どうして動けないのか。死が迫って——

足元が崩れ落ちそうな感覚に陥りそうになって思わずアレイさんのほうを見る。

紫の瞳が見つめ返してくれて、少しだけ落ち着くことができた。

ゼルはうめくように呟いた。

「何だよ、全く……！」

「別に隠してなかったんだよ。ゼルが気づかなかったただけじゃん」

「なんだ坊主、お前気づいてなかったのか」

カフェのマスターが隣のテーブルから乱入した。

「だがしばらく見ないうちにやたらと女らしくなった気がするな……」

…恋でもしたのか？」

マスターがにこにここと笑いながら聞く。

ふるふると首を横に振ると、ゼルの親父さんがにやりと笑って言う。

「んじゃうちの嫁に来ないか？　ゼルももういい年頃だ」

「親父っ！」

ゼルが赤い顔をして一喝した。

そんな息子に親父さんはにやにやとしながら言う。

「ラックなら美人だし、まあちょっとバカだがよく働く。しかもミ
ーナさんとお近づきになれるんだぜ？」

「だからって、ラックが嫌がるだろ！」

「別に嫌じゃないけど」

正直にそう言うと、カフェのマスターが盛大に笑った。

マスターの明るい笑い声が店内に響き渡る。

「でもおれにはまだやんなくちゃいけないことがあるんだ」

街にずっといられるのは嬉しい。ついこの間まではそう思っていた。でも、それは違うと気づいた。

おれが望んでいるのは街にいることじゃない。ねえちゃんと一緒にいることなんだ。

そう、今はねえちゃんを捜すこと——それだけ、唯一つだけを目指さねばならない。いつでも願うことは一つにしなくちゃいけないんだ。それはアレイさんが教えてくれたことだ。

「あ、そうだ。もしね、何か変わった事があつたら教えてほしいんだ」

「なんだ？ 探索者を続けてたのか？」

「うんとね、ちよつと違うけど……」

どこから説明したらいいものか迷っていると、マスターはひらひらと手を振った。

「ラックに難しい説明を求めたりしないよ。そうだな、何かあったか？」

「いや、特に何もなかったと思うが……」

「どんな小さいことでもいいんだ。少しでも、いつもと違うところあつたら思い出して！」

身を乗り出すようにそう言うと、カフェのマスターはうーん、と首をひねった。

「ああ、そう言えば見慣れない二人組みが来てたな。旅人だと思っ
が、それにしちゃあまり旅に向かない格好をしてたんでよく覚えて
る」

「どんなヒト？」

「お前くらいの女の子と、ちょうどあの綺麗な兄さんと同じくらいの年の男だったよ。女のほうがやたらひらひらした服で、男のほうもこれから舞踏会にでも行くような格好だった」

「ふーん。どこに行っただかわかる？」

「いや、店を出た後はちよつと分らない」

「そうかあ」

二人組といつても銀髪のヒトじゃないらしい。

「そうそう、マティさんのところに赤ちゃんが生まれたよ」

「ほんと？おめでとう言いに行かなくちゃ！」

「うちの井戸の水が少し減った気がするな」

「街のガラスがここ数日減ったかな」

「そうそう、ゴミが荒らされなくて助かってるよ」

「本屋の一人息子とサラが婚約したよ」

みな口々に気づいたことを述べてくれる。

ねえちゃんはこのやうな情報を手に入れていた。それは些細な情報でも、全てをつなげると大きな何かが見えるのだといつも言っていた。

じぶんにそれができるかはわからない。

それでもいつもやっていたようにメモ帳に全てを書き留めていったのだった。

SECT・17 レグナの住処

お客さんがみんな帰った後、カウンターの向こうでねえちゃんがやっていたように食器を洗うアレイさんを見て、思わず微笑んでしまった。

ねえちゃんと一緒にいたときのようで落ち着いた。

「アレイさんは何でもできるんだね！」

前に一度言ったような台詞をもう一度繰り返す。

「でも、家ではコックさんが作ってくれてたよね。どこで料理習ったの？」

「騎士団にいた頃の経験で料理は一通りできる。あの場では貴族も平民も何もない、ただ騎士という立場を与えられた剣士が多くいるだけだ。王都に在住する漆黒星騎士団や輝光石騎士団と違って、炎^ガ妖玉騎士団は偏狭の地カーバンクルに派遣された国境騎士団だ。炊事や洗濯はある程度自分たちで行わなくてはならない」

「へえー」

「そのうちお前も学ぶといい。レメゲトン一人で任務に向かうことのほうが多い。身の回りのことはそれなりにできたほうがいいだろう」

「うん、自分のことはできるよ。2年くらいは一人暮らしたかったから」

最初の1年のことはあまり覚えていないが、探索者に任命されてから2年間はアパートの大家さんに助けてもらいながらなんとか一人で生活していた。

ねえちゃんは夜に店をやっていて昼間は眠っている生活だったし、何より自分の年では独り立ちすべきだとねえちゃんが考えての事だった。自分の正確な年齢は分からないが、どうやら18か19くらいであろうとねえちゃんは言っていた。

「ならいい。他に学ぶべきことも多くある」

その言葉で、少し引つかかるところがあった。

王都を出発してからずっとなんとなく不自然に思っていたことだ。
「もしかして、アレイさんおれにたくさんのことを教えようとしてくれる？」

アレイさんの手が止まった。

カードの占いの時もそうだった。唐突とも思えるタイミングでアレイさんはレメゲトンに必要なスキルを伝え始めた。

特に自分がねえちゃんのことを考えて気分が沈みがちな時に。

答えないアレイさんにイエスの返答を見る。

やっぱりそうだったのか。

嬉しくて紫の瞳に微笑む。

「んじゃ、いっぱい教えて。おれは知らない事だらけだ。今日だって情報を集めたけどそれを分析するだけの賢さが足りないよ。いつもねえちゃんに任せつきりだったから」

でも、それじゃいけないって最近やっと分かり始めた。

新しい世界を知ったから。大切なヒトを守るためには強くならんくちやいけないって分かったから――

「おれ、強くなりたいんだ。ねえちゃんやアレイさんみたいにいろんな事できるようになりたい。たくさんの事を知ってるヒトになりたいよ」

この間はたまたまラースの力を借りる事ができて二人を助けられたけど、次がそういかないのは分かっている。

現に今、地道に手がかりを求めて情報収集することから始めなくてはならない状況だ。その手法すらもアレイさんが提案したものだ。街で一番情報が集まるのがねえちゃんの店だったから、その店を開ければまた情報が入るかもしれない、と。

自分は何もできない。ねえちゃんを捜すと豪語して王都を飛び出したくせに、全く何の役にも立っていない。

「お願いだよ、アレイさん。おれにいろんなこと教えて！」

真直ぐに紫の瞳を見つめた。

アレイさんは何も答えてくれなかったけれど、また食器を洗い始めた。

そのかしゅかしゅという皿の重なる音の合間に、アレイさんはぽつりと言った。

「時間が惜しい。お前が聞いた情報を今ここで全部話せ。夜が明けたらその情報をもとに出発する」

「……うん！」

アレイさんはいろいろ何か言いたそうだったが、全部心の中に閉まってしまったようだ。

自分がメモ帳の内容を読み上げる間ずっと黙っていた。

メモの内容を全部言い終わると、ちょうどアレイさんも洗いものを終えて水を止めた。

店の中に静寂が返り咲いた。

「旅人らしからぬ二人組……か」

アレイさんのバリトンがやけに響いた。

「うん。でも銀髪のコトじゃないよ」

「だが異質な人間だということは否めない。何か関係があるかもしれない」

紫の目を細めて、じっと考え込むような表情をしたアレイさんは、静かに言葉をつむぎだした。

「一人だけなんだが、何日か前に森のほうで何かが壊れるような音を聞いた者がいた。レグナの住処と呼ばれる場所らしいが、何か知っているか？」

「！」

森というとジャスパグへ向かう途中のクラインの森だ。道があるところはそうでもないが、一歩踏み込めばうつそうとした木々が行く手を阻む深い森が待っている。

特にその東部にはなぜか街のコトたちが避ける地域があった。

レグナの住処と呼ばれるその場所は特に深い森で、一度入ると抜

け出すのは困難といわれていた。

それを言うと、アレイさんは驚いた顔をした。

「お前が一度セフィラに連れ去られた場所だ」

連れ去られた場所といえば一つしかない。

森の中にポツリと浮かぶ孤島のようなあの教会だ。

「教会……？」

何か歯車がかちりと音を立ててぴったりはまり込んだ。

当たり前すぎて気づかない場所だった。街のヒトたちが近寄らない、銀髪の子供たちの拠点——少し考えてみればわかることだ。

あまりに条件に合いすぎて怖いほどに、しかもいとも簡単に見つかってしまった。

そこにねえちゃんがいるかもしれない。

「夜明けまで間があるな」

アレイさんは店の掛け時計を見た。

「今すぐ行くぞ、ガキ。すぐ支度しろ！」

「分かった！」

すぐに動きやすい格好になり、腰に小太刀を差した。まだほとんど剣技は習っていない状態だったが、ないよりは戦える。

ねえちゃんがいるかもしれない。

そして、あの銀髪の子供たちもいるかもしれない。

心臓の鼓動が早くなる。

昼から休んで回復した馬に二人で乗って森への道を急ぐ。

「あのね、アレイさん。思い出した事があるんだ」

「何だ？」

「教会にね、飾ってあった白い像があるんだ」

「それがどうした」

「よく考えてみるとクローセルさんにそっくりで……もしかして、あれ、天使の像だったんじゃないかな……？」

「！」

ダビデ王が悪魔と契約を結んで以来、グリモワール王国では悪魔崇拝が基本だ。

ずいぶん昔には天使を崇拝したヒトたちを虐殺したという記録も残っているくらいなのだ。現在さすがに取り締まりは行われていないが、天使を崇拝するヒトたちが世間的にあまり認められていないのは今でも変わっていない。

そんな話をねえちゃんがいつだったかしてくれた。

銀髪の子に教会へ連れ去られた時には全く知らなかった事だ。

「レグナ……古代語の綴りではL - E - G - N - Aとなる」

「おれ古代語はあまり知らないんだ。」

ずっと昔、グリモワール王国が成立する以前はアルファベットと呼ばれる文字が流通していた。自分の名前、ラックもL - U - C - Kという『幸運』を意味する古代語からとったと聞いた。

今でも言葉の端々に残っているというが、すでにどれが古代語でどれが現代語かという区別はつかない。名前や地名にはまだまだ多く古代語が残されているが、意味はほとんど知らなかった。

「綴りを逆にすると、A - N - G - E - Lとなる。エンジェル、つまり古代語で天使の意味だ」

「！」

なぜそんな名前があの子の一部に使われているんだろう。

「おそらく昔、虐殺された天使崇拝の村か何かがあったのだろう。」

「おそらく教会はその名残だ」

「でも、そんな何百年も前の建物には見えなかったよ……？」

不安になって聞くと、アレイさんは口をつぐんでしまった。

「お願いだよ、教えてよ。おれもいろんな事を知りたいんだ！」

紫の瞳を見上げてそう叫ぶと、アレイさんは硬い表情で口を開いた。

「これはあくまで噂だが……とある貴族はつい最近まで天使崇拝を硬く禁じ、それを破った者たちを厳しく罰していたといわれている。」

国が認めているものを貴族が単独で禁じたとは考えたくないが、あ
るいは……」

「そんなひどいことをするなんて！」

悪魔さんじゃなくて天使さんを信じていただけじゃないか。

そののどが悪いんだ！

「国には明るい部分と暗い部分がある。今からお前はそれを少しず
つ学んでいくことになるんだろう。お前はまだ明るいほうにしか目
を向けていない」

アレイさんは苦しい表情で呟いた。

「だが、目を背けるな。事実を見て、自分の価値観で判断するんだ。
そのために多くの情報を手に入れる。経験を重ねろ。きっといつか
それは実になるはずだ」

「わかった」

アレイさんの言葉はいつも真直ぐだ。それはきつとアレイさん自
身の心が真直ぐだからだろう。

こうやって自分の行く先を示してくれるアレイさんがすごく好き
だ。カトランジェの街を離れて『一つだけ』を選んだ時も、今回も
つと強くなると決めた時も、アレイさんはいつだって道を示してく
れる。

「ありがとう、アレイさん」

「何がだ」

「いつもおれが迷わないように助けてくれるから」

にこりと笑ってそう言うのと、アレイさんはいつもの表情に戻って
しまった。

「ガキを助けたつもりはない」

「あ、またガキって言った！」

「その阿呆面をやめろ。気が抜ける」

「むーっ！」

せっかくありがとうを伝えようと思ったのに！
さらに言い返そうとしたが、突然馬が止まった。

「ここからは静かに、慎重に行くぞ」

森の向こうに教会が見え隠れしていた。

夜の闇の中、月光でかろうじて見えるその姿はとてもまがまがしくて、背筋がぞくぞくした。

それでもねえちゃんがそこにいると信じてゆっくりと歩を進めた。

SECT・18 邂逅の十字架

森の中は息遣いすらうるさく感じるくらいの静寂に包まれていた。自分の体が葉に当たってしまっただけでもびくりとしてしまう。

月明かりが照らす教会前の広場には何の動きもなく、当然教会周辺も静まり返っていた。

声を出すのとはばかれて、ただ黙々とアレイさんの後に続いた。どきどきしている心臓の音まで聞こえてしまいそうで、余計に脈拍があがった。

「ここで少し待っている」

広場の目前まで来たとき、アレイさんが小さな声でそう言った。

あっと思うまもなく闇色のマントが翻ってアレイさんは教会の壁近くまで一気に駆け抜けていた。

「きゃあ、本当にきちゃったわ!」

その場にソプラノの声が響いた。

森の雰囲気全てをぶち壊すようなその声に、アレイさんも思わず立ち止まって辺りを見渡す。

「でもあなたすごいね。森から出てくるまであたしぜんぜん気づかなかったわ!」

その声の主は耳に響くきゃらきゃらした声で高らかに笑った。

はっとして教会を見上げた。

その屋根の上、青白い月光を浴びた十字架に人影が腰掛けている。

「セフィラか」

アレイさんは教会から距離をとって広場の中央に出た。

十字架の上にいるそのヒトは、自分と同じか少し若いくらいの女の子だった。

カールした黒髪を高い位置で二つに縛っている。こぼれそうに大きなブルーの瞳と愛らしいばら色の唇が印象的だ。カフェのマスク

「はひらひらした服と言っていたがまさにその通りで、胸元と裾に白いレースがふんだんに使われた胸元が編み上げの黒基調のワンピースで、腰の辺りには大きなリボンが左右に二つついていた。さらに足元は膝の上まであるレースつきの黒いソックス、靴は貴族の幼い少女が履く様な黒皮の先が丸いタイプの靴だった。」

白い肌と白い手袋、それと白のレースだけが闇に浮いていた。

まるでそこだけ世界が違うように、十字架とその黒い服の少女がぴったりと似合っていて思わずゾクリとした。

服装や容姿と相まって、作られた人形が動いているような不気味さをかもし出した。

「ふふ、綺麗なお兄さん。あなたが噂に聞くクロウリー伯爵ね。マルコシアスとサブノックを使う戦闘に特化したレメゲトン」

アレイさんは表情を変えなかった。

ただいつでも戦闘に入れるよう剣の柄に手を掛けた。

「あの子はいないの？ ティファレットの双子がご執心のかわいい女の子は」

思わず叫びそうになってとどまった。

きつと見つからないほうがいい。見つかってしまえば、戦闘になったときアレイさんの迷惑になる。

「何のことだ」

アレイさんは冷たく言い放った。

「いやいや、そこにいるようだよ、お嬢」

「あら、本当？」

十字架の横ラインに座る、黒服の人形のような少女の背後から現れたのは、これまた漆黒の燕尾服を纏った男性だった。

シルクハットに燕尾服、遠目にはよく見えないが片眼の眼鏡をつけているようだ。このヒトも闇夜に白い手袋が目立っていて、そこだけ浮いているように見えた。細身のシルエットが十字架に座る少女の反対側に軽く体重を預けている。

人形とそれを操る手品師マジシャンの構図はまるで一枚の絵のように完成さ

れていた。

「ぜひ見てみたいわあ。あの子達があんなに執着する相手ですもの」
見つかっている。

背筋がひやりと撫でられた感じがした。

何かが違う。この二人は、銀髪のヒトたちとは何かが違っている――銀髪のヒトたちに命を狙われても怖くなかったのに、まったく殺気を放っていないこのヒトたちのほうが何倍も怖い。

でも、見つかった以上隠れているのは無駄だ。相手も姿を見せている今見通しがよく動きやすい広場に出たほうがよっぽど効率的だろう。

そう思っただ森を離れ、ゆっくりとアレイさんのほうに歩いていった。

「きゃあ！ かわいいわ！ 見て見て、ゲブラー！」

「お嬢、はしやぎすぎだ……それに僕としては彼女より隣にいる黒髪の彼のほうがよっぽど好みなんだが？」

「男の癖に、変態！」

「お嬢だつて人の事は言えないだろう？」

アレイさんは屋根の上の二人から隠すように自分を背に匿った。

「あら、あたしは綺麗な女の子が好きなだけよ？ふふ、あの美人なレメゲトンのお姉さんもね」

「！」

黒いお人形さんの台詞に、思わず息を呑んだ。

「ねえちゃん……ねえちゃんはどこ？」

「声もかわいいわあ！あの二人にあげる前にあたしが貰っていいかしら？」

「そんなことをすれば彼らが怒るだろうよ。それは少し困った事態を招く」

「ねえちゃんはどこなの？！」

「ふふ、残念ね、ここにはいないわ。だつてあたしたちあなたを見に来ただけですもの。しかもこんな夜中、天使も召還できないのに

戦うのはごめんだわ」

黒いお人形さんは楽しそうに微笑んだ。

「ぜったいレメゲトンはこの教会に来るはずだ、なんて、さすがティファレトよね。頭に血が上ってさえいなければ確実にトップになれるのに……二人に分かれているばかりに、かわいそうな子たち」

「そうだね」

緊迫した空気が張り詰めていて、少しでも身動きしたら皮膚が切れそうだった。

アレイさんの隣で、息を殺すように教会の屋根を見つめていた。

「どうせまた戦場で会えるわ、それまではサヨナラね」

残念そうに言った黒いお人形さんに、アレイさんが厳しい声で追求した。

「目的は一体なんだ。ティファレトが白昼堂々敵の王都に乗り込むなど、言語道断。その場で戦争でも引き起こすつもりだったのか？

！」

「あれは、ちょっとした手違い。ごめんね！」

「まあ、ネブカドネツアル王はこの好機を逃すまいとするだろうがね」

「でもそれであの美人のお姉さんが釣れたんだからよかったじゃない？」

「そうとも言えるな」

マシヤン
手品師は軽く微笑むと、シルクハットをとった。

はらり、と肩より長い黒髪が零れ落ちる。

「戻ろつか、お嬢。もう満足だろう？」

「本当はもう少し相手したいのだけど仕方ないわね」

「待って！ねえちゃんは……！」

その言葉は届かなかった。

マシヤン
手品師がシルクハットを一振りすると、二人の姿はその場から消えさっていた。

その後教会の中を搜索したが、何の手がかりを見つけることもできなかった。

そのうち夜が明けてきて教会の天窓から虹色の光が差し込んだ。ステンドグラスは天使を象った肖像画のような図柄だった。

正面にある白い像も改めて見ると翼を6枚持つ天使の形で、その姿は銀髪の一トが召還したミカエルという天使さんにとてもよく似ていた。

「やはりここは天使崇拜の人々が集う教会だったのだろう。それにしても、この様子ではまだ20年ほどしかたっていないようだ」

「迫害されたのがつい最近だって言うことなのかな」

「……一概にそうとは言えないが、可能性は高いだろう。」

その話を聞いていると、胸が締め付けられるように痛む。

しかも、ねえちゃんはこのにいなかった。搜索は一からやり直して、しかもねえちゃんがセフィラの手に落ちていることまで分かった。

ねえちゃんが危ないのに、どこにいるか分からないなんて……！

「大丈夫だ。セフィラもそう遠くへは移動できまい。ということはこの辺りにいるはずだ。アリギエリ女爵と王都のくそじじいたちにセフィラが出たことについて連絡を送る。とりあえず街に戻ろう」

頭の中はねえちゃんのことについていっぱいだった。

死神のカードが頭をよぎる。そんなはずはない、と頭を振ったがその不安は消えなかった。

SECT・19 夕陽の再会

ねえちゃんの店に戻ってすぐベッドに倒れこむようにして眠ってしまった。

当たり前だ、結局明け方までずっと動きっぱなしだったのだから。夢も見ない深い眠りから覚めたのは、アレイさんが起こしてくれたからだ。もう外では太陽が西に傾き始めたらしい。

「寝すぎだ、ガキ」

「んあ、ごめん」

目をこすりながら起き上がって服を着替えた。

店のほうに出てみると、すでに店内は掃除が終わっていた。どうやら眠りこけている間にアレイさんが全部やってくれたらしい。

「そろそろ店の準備をする。今日も店を閉めたら外に出ることにするぞ」

「はあい」

大きく伸びをして軽く体をひねる。ついでに体操してストレッチ。テーブル一つ一つにおいてあるランプに明かりを入れていく。暗かった店内に薄明かりが灯っていく。それが終わったら次は壁にかかっている明かり。

全部点け終わったらテーブルクロスを掛けて、花瓶を一つ一つ置いていった。

一日の探索が終わって夕方頃に店に入ると、ねえちゃんはいつもそうしていた。メモ帳を見ながら報告する自分の横で忙しく働いていた。

報告が終わるとそれを手伝ったし、その後何時間かは店の手伝いもしていた。

それがほんの一ヶ月前までの日常だった。

「後で倉庫からいくらか酒を補充しておいてくれ」

「はあい」

こうやってアレイさんと二人で開店準備をしているのはとても不思議な感じがした。

ねえちゃんに危機が迫っていて、新しい敵が二人この付近にいると分かったいまこんな悠長なことをしている場合ではないのだが、なぜかとても穏やかな気分になれた。

銀髪のヒトの事だとか昨日初めて会った二人のこととか天使崇拝の教会のことも全部、いまの自分には難しすぎるから、少し忘れたかったのかもしれない。もっとたくさんのことを教えてっていったのに、情報すべてを処理できるような要領が自分にはまだ備わっていないようだ。

倉庫は地下にある店のさらに下にある。

奥の階段を下りて、かび臭い匂いのする扉を開けるとそこにはたくさんの瓶が所狭しと並んでいた。その中からアレイさんに言われた分のお酒を箱に入れて抱えて、階段を上った。

「持ってきたよー」

「後は店が閉まる前に果物屋で適当にフルーツを買ってきておいてくれ」

「ほんと？ 桃買っていい？」

「……好きにしろ。」

アレイさんはため息で自分を送り出した。

夕日が眩しい灰色の石畳を軽いステップで駆け抜ける。メインストリートにでたら、真直ぐに果物屋さんを目指した。

「こんにちは！」

果物屋のカナナに声を掛ける。

色とりどりの果物が並んだ棚の間から腰を上げたのは、自分より年下の少女だった。

「あ、ラック。久しぶり！」

よく焼けた小麦色の肌にはじけるような笑顔が愛らしい看板娘の

カンナは、去年学校を卒業してからずっと家業を手伝っていた。

「ミーナさんのお店が開いたって、父さんが大喜びよ。母さんは困ってるわ」

「カンナも来たら？ ジュースもあるし、アレイさんは料理上手だよ？」

「アレイさん？」

「おれと一緒に来たねえちゃんの親戚のヒト」

「ああ、父さんがすごく綺麗な男の人だって言ってたわ。うん、少し興味あるかも」

「待ってるよ！」

カンナが夕日を横顔に浴びて微笑み返してくれた。

ふとその顔に影が降りた。

それにつられて夕日のほうを見ると、細長い人影が夕日を遮っていた。

「いらっしやいませ。何にしますか？」

カンナがにこやかに応対する。逆光でそのヒトの顔は全く見えない。ただ細身の男性のシルエットだということだけがわかった。

男性はカンナではなく自分のほうを見て、ひどく嬉しそうに微笑んだ——気がした。

「見つけたよ、お嬢」

「！」

その声には聞き覚えがあった。

一瞬で冷や汗が全身から吹き出た。

思わずカンナをかばって身構えた。念のため店を出るときに腰に小太刀を差しておいてよかった。丸腰でないだけでも気分がだいぶ違う。

「何、この人誰？ 知り合いなの、ラック」

「ごめん、これ敵なんだ」

しかも、おそらくは自分が全く齒がたたないであろう強敵だ。
自分ひとりじゃどうすることもできない……アレいさんに知らせなくちゃ。

「カンナ、お願いがあるんだけど」

「何？」

「アレいさん、呼んできてくれる？」

「いいけど……大丈夫なの？」

「おれはだいじょうぶ。お願い、カンナ。できるだけ急いで！」

「わ、わかったわ」

自分がこれまでになく切羽詰った表情をしているのがよかったのか、カンナは理由も聞かずに駆け出した。

「わざわざ呼んできてくれるなんて嬉しいなあ」

細長いシルエットから嬉しそうな声が響く。

「でも、うちもお嬢が来るまでちよつとかかるんだよね」

シルエットの一点が微かに煌いた。

考えるより先に体が動いていた。

コインの埋め込まれた左手は、カンナに向かって放たれたナイフを叩き落していた。コインとナイフがぶつかって、軽い金属音がした。

「へえ、いい目をしているね」

「カンナに手を出すな！」

シルエットに向かって叫んだ。

その声を聞きつけたのか、商店街の人たちが次々に店から顔を出した。

「どうしたんだ、ラック？」

「何かあったのか？」

「おやおや、君は人気者だね」

マジン

手品師はにやりと笑った。夕日は山にかかっていて、少しずつシルエットが薄れている。燕尾服にシルクハットと片眼鏡。昨日見た姿と全く同じだ。

「おい、ラック。何を騒いでるんだ？」

奥からカンナの父さんと母さんも顔を出している。

だめだ。危ない。きつとこの手品師は躊躇いなく傷つけるヒトだ。
でも、こんな全部の方向を守る術を自分は持っていない。

「きゃあ、見いつけたっ！」

ソプラノの声がして、手品師^{マジシャン}の隣に黒いお人形さんが降ってきた。
今日はピンク色のステッキを手に行っている。それをくるくる、と
回してぴつと自分の鼻先に突きつけた。

「まだ日があるわ。今日は……逃がさないわよ」

二人がそろってしまった。

街のみんなは好奇心から自分たち3人を取り巻き始めている。こ
の二人はとても危険だと言うのに！

街のみんなを守りながら戦える？

答えは否だ。

自分はねえちゃんやアレイさんのように強くない。マルコシアス
さんみたいな剣技も持っていないし、クローセルさんみたいに水を
操れるわけでもない。

汗が頬を伝って顎から雫になって落ちた。

もう手段は残されていない。

お願い、助けて。

「アガレスさん！」

その瞬間、夕日に染まるカトランジェのメインストリートに悪魔
を召還する魔方陣が閃いた。

SECT・20 レメゲトン

実戦の場にアガレスさん呼び出すのは初めてだった。

肩に金目の鷹を止まらせた老紳士は、手入れの行き届いた茶色の外套を羽織り、ごつい皮の黒ブーツで地面に降り立った。頭髪は白くひげも蓄えていたが、その全身から放たれる闘気はとても老人のものではなかった。

「セフィラか 久しいな」

目が見えなくてもやっぱり分かるらしい。

アガレスさんは唇の端で微笑んだ。その仕草には高貴さと共に余裕が感じられた。

自分たちを取り巻いている街のヒトたちが驚いているのが分かる。声も出せず、突如現れたアガレスさんの姿に呆然となっているヒトが多かった。

絶対に街のヒトたちを傷つけさせるわけにはいかない——強い気持ちでアガレスさんを見上げた。

「来てくれてありがとう、アガレスさん。街のヒトたちを避難させたいんだ。少しでもいいからあの二人を足止めしてもらえないかな」

「承知した」

アガレスさんは大きく手を広げた。

次の瞬間！

「きゃっ！」

「おおっと」

マシヤン

手品師と黒いお人形さんの体が宙に跳ね上がった。

その部分の地面だけが不自然に歪んでいる。まるで波打つようにうねって、二人の体を放り出したのだった。

地面にぶつかってもその体はもう一度跳ね上がる。

第2番目のコインの悪魔アガレスは地震を起こすことができる――

―王様は確かにそう言っていた。しかもあの二人の足元だけに地震が起こっている。

「なんだ、これは?!」

「地面が動いて……」

「いまのうちに早くみんな家に入って!」

必死に叫んだ。

きつと長くは持たない。いまのうちに街のヒトたちを避難させないと……

「危ないんだ。この二人はすごく強い敵なんだ。早く逃げて!」

「ラック、そのヒトは……」

「悪魔?!」

「何故お前が!」

口々に驚きの声を上げている街のヒトたちは、一向に減る気配がない。

「お願いだから逃げてよ!」

「それならラック、お前も……」

「おれは」

逃げるわけにいかないんだ……おれの持っている全部の力を出したってこの二人には勝てないかもしれないけど。

「おれは逃げるわけにいかないんだ……みんなを守らなくちゃいけないから。」

そして、この二人に勝ってねえちゃんの居場所を聞き出さなくちゃならない。

「何でお前がそんなことしなくちゃいけないんだよ、危ないならお前も逃げろよ!」

ゼルが叫んだ。

どうしておれは街のみんなを守りたいかって?

そんなのみんなが好きだからに決まってるじゃないか!

「おれは逃げない。逃げちゃいけないんだ」

じゃあ、どうして守らなくちゃいけないかって?

それは……

「おれがレメゲトンだから！」

そう。きつとレメゲトンってそういうものなんだ。国のヒトたちを、大好きなヒトたちを守る仕事——それがレメゲトン。コインの悪魔と契約を交わし、その力でもってすべての敵を打ち払う存在。

街のみんなを守るのも、ねえちゃんを探し出すのも全部一緒だ。

強くなるのも、みんなを守るためだ。賢くなるのも知識を増やすのも全部、大切なヒトをいろんな災厄から守るためなんだ。

大切なヒトを守ること。

それが新しい世界でのおれの役目なんだろう。

腰に差した小太刀を抜き放った。

「レメゲトン?!」

「お前が?!」

街のヒトたちの驚いた声が耳に届く。

「そうだよ。王様にコインを貰った。悪魔さんとも契約した。おれはもう『探索者』のラックじゃないんだ」

小さな街の中で駆け回っていた毎日はとても幸せだった。何も考えず、ただそこにあるものだけを見てねえちゃんに報告するだけの毎日は単調でも安定していた。

でも、新しい世界ではそうはいかない。自分の力を伸ばして、自らの手で生み出していけなくちゃいけないんだ——それはとても難しく、でも本当に自分が心から望んでいる事だった。

この街を離れてからずっとずっと引きずっていた望郷の思いをここで断ち切れる気がした。奥底のほうで迷っていた心を完全に叩きだせる気がした。今まで住んでいた世界から、もっと広くて深い世界へと完全に飛び込んだ。

「おれはラック・グリフィス。グリモワール王国のレメゲトンだ！」
その瞬間、アガレスさんの姿が霞むように消え去った。

「もう……こんなことであしたたちを止められるとも思っただの?」

「しかも何だか楽しそうなこと叫んでいたようだけれど……僕らが
そううまくいかせるとでも？」

二人とも余裕の笑みを浮かべてふわり、と地面に降り立った。

地震の影響かそのあたりの石畳が大きくめくれ上がっている。石
の破片もそこらじゅうに散らかっており、如何に凄まじい力が二人
にかかっていたかを物語っていた。

それなのに二人とも全く何のダメージもなかったかのように立っ
ていた。

「ふふ、ハニエル、久しぶりに暴れちゃってもいいかもよ？」

黒いお人形さんは自らの背後に浮かぶ愛らしい天使に微笑みかけ
た。

こちらもあるで人形のように愛らしい天使さんだった。蒼の髪が
肩の辺りで揺れていて、その色に彩られた白い肌には頬に淡く桃色
が差している。ガラスのように透き通った銀の瞳と同じ色の壊れそ
うに繊細な翼を背に湛えていた。

だが、その手に握られているのは紛れもなく殺傷能力のある弓矢
だ。

天使の前で墮天の悪魔は姿を保つことができない。

その伝承のとおりアガレスさんはおそらく魔界へと帰ってしまっ
た。

「かわいそうね、あなた。あなたの悪魔さんは帰っちゃったみたい
よ？」

「分かってる」

天使さんに会ったのが初めてというわけじゃない。銀髪のヒトがミ
カエルという天使さんを召還した時もアガレスさんは呼びかけに応
えてくれなかった。

「でもまだまだ持っているようなね、悪魔の印。ちよつと持ちすぎじ
やないかしら？」

「彼女が全部使えるとは限らないよ、お嬢」

「そうねえ、少し試してみてもいい？ ゲブラ」

「かまわないが、双子には気づかれないうようにしたほうがいい」
「分かってるわよ！」

やっと街のヒトたちは不穏な空気を読んで少しずつ散り始めた。
それを横目に確認して小太刀を握る手に力をこめながら、手品師^{マジシャン}と黒いお人形さんを睨みつける。

「そんな怖い顔しないで！　かわいい顔が台無しになっちゃうわ、もったいない！」

黒いお人形さんはくすくすと笑った。

まるでおれの力なんて歯牙にもかからないといった態度だ。

実際そうなんだから仕方がない。でも、どうしてもこの二人からねえちゃんの居場所を聞きださなくちゃいけない。

「ねえちゃんはどこなの？　返して」

「そんなの教えるわけがないでしょう？　彼女は大切な持ち駒よ」

「んじゃ力ずくで聞き出してやる」

「まあ！」

黒いお人形さんは驚いたように口に手を当てた。

「そんなこと、本当にできると思っているのかしら。本当にかわいくて仕方ないわ！」

「やってみるさ！」

「ゲブラ、少し待っててくれる？」

「ああいいよ。」

^{マジシャン}手品師は手を組んでその場に釘付けた。

黒いお人形さんのほうはピンク色のステッキをぴつと軽く振って構えた。まさか小太刀とステッキで勝負しようとしても言うのだろうか？

だが、飛び道具ではないのなら好都合だ。こちらを止めてしまえば周りのヒトに危害が及ぶことはない。

取り巻いていたヒトが全員避難するにはもう少しだけかかるだろう。その間この二人の矛先をこちらに向けておかなくてはいけない。こんな風に周りを見ながらも、さっきから実は内心とても驚いて

いた。

自分は……これほど頭を使っているいろいろなことを考えられたのか、と。普段なら絶対にしないような状況判断と我慢が自分の中に眠っていたことに驚愕とも言える感情を抱いていた。まるで自分の中に別の誰かがいて、感情で動くのではなく状況を把握して最善を尽くせるよう指示を出してくれているみたいに冷静だった。

いつもならもっとこの二人を問い詰めていただろうし、周りに街のヒトがいようといまいと関係なく戦闘を始めてしまっていたかもしれない。

それが今日はなぜか違っていた。

でも、この感覚には覚えがあった。

初めて銀髪のヒトに会って、一人で教会に放り出された朝のこと——自分で驚くくらい冷静で、回復すべきだと判断を下したこと。

そして、地下の牢獄で銀髪のヒトたちがねえちゃんとアレイさんを倒してしまった時のこと——熱を持ったコインから自分自身がリースとすでに契約していたのを見抜いたこと。

あの時と同じ感覚が全身を駆け巡っていた。

「ねえ、それよりまずは名前教えてよ。おれはラック。おまえは？」
自分に見てみたら当たり前の事を聞いたのに、二人とも目を丸くした。

「ますます変な子！　いいわ、教えてあげる」

天使さんを頭上に抱いた黒いお人形さんは胸に手を当てて宣言した。

「あたしはネツアクよ。それから、こっちの細いのはゲブラ。それからこれはあたしの天使のハニエル。かわいいでしょ！」

「うん、すごくかわいい」

正直にそう述べた。

蒼く透き通った髪も銀の瞳も壊れそうに華奢な翼もとても美しかったし、手にした弓矢もあまり強いものでなく、細腕にちょうどい

いサイズだった。見に纏った空色の服もとてもよく似合っていた。
「でしょ！」

ネツアクと名乗った黒いお人形さんのような少女は嬉しそうに微笑んだ。

「でも、ハニエルは見かけによらず強いなの？」

「そうなの？」

「ええ、あたしと一緒に」

「！」

次の瞬間には目の前にピンクの杖が迫っていた。

思わず小太刀で横に薙ぐ。凄まじい負荷が腕にかかって思わず顔をしかめた。とても自分とそう変わらない華奢な少女が打ち込んできたとは思えない重さだ。

だが、そうやって考える暇もなく次々打ち込みが来る。その打ち込みを力任せに振り切ろうとするが、そんなに甘くない。

真上から振り下ろされた杖を剣を横にして支えた。ぐぐつと圧力が両足にかかる。

「悪魔を召還せずにとこまで耐える気かしら？ それとも、墮天のコインしか持っていないというの……？」

無理だ。力の差がありすぎる。これは天使の加護があるからなのか？

このままでは成す術なくやられてしまう！

「フ、フラウロスさん！」

もう一つの魔方陣が発動した。

SECT・21 フラウロスとカマエル

その瞬間自分の目の前に炎の壁が立ち塞がる。

「きゃっ！」

ネツアクの悲鳴がして、両手にかかっていた負荷が一気に消滅した。

「ありがとう、フラウロスさん」

自分の横に現れたオレンジの豹に礼を言う。

フラウロスさんがいる右側半分の顔が熱くなった。

妖炎の瞳と灼熱の毛並みを持つこの獣は、絶えず熱を発している。地獄の業火を自在に操るといふ恐ろしい悪魔だった。

うまく従ってくれるか全く自信がなかった。

「あのヒトを動けなくしたいんだ。あんまり怪我させないで……で
きるかな？」

灼熱の獣はふいとそっぽを向いた。

「ハニエル 興味がない」

「ええっ？」

「奴は 弱い」

「まあ、失礼な悪魔ね！」

ネツアクは腰に手を当ててぴつとステッキをフラウロスさんに突きつけた。

その瞬間ステッキが凄まじい炎に包まれた。

「きゃあああ！」

「愚か者」

その炎はさらに勢いを強め、ネツアクを襲った。

頭上の天使ハニエルは慌てたように矢を一つネツアクの足元に向かって射る。

その矢からまるでガラスのようなヴェールが飛び出して、ネツアクを守るように包み込んだ。炎は遮断され、地面を豪快に焦がした

後消え去った。

「もうっ、何すんのよ!」

「まだ分からぬか」

フラウロスさんが一步にじり出たとき、ネツアクの前にも手品師
——ゲブラ、と名乗った男のヒトが歩み出た。

「お嬢、この場を僕に譲る気はないかな?」

「あるわけないでしょう!」

ネツアクは蒼い瞳でゲブラさんを睨みつけた。

「だから、クロウリー伯爵の相手をお願いすると言っているんですよ、僕は」

「!」

気づくと、隣に息を切らしたアレイさんが立っていた。

「それでいいかな、お嬢? 本当は僕だつてクロウリー伯爵の相手がしたいのだけれど我慢するんだ。それであいこだよ」

手品師のような風貌のゲブラさんは山にかかった夕陽を背にしてにこりと微笑んだ。

「次に会うのは戦場ではなかったのか?」

アレイさんの押し殺したようなバリトンが響く。

「こっちの都合もいろいろあるのよ! 王が欲を出すから! レメゲトン一人じゃ満足しないんだもの、王都を離れてる機会に二人くらい捕まえるしかないでしょう?!」

「……痛い目にあう前にファウスト女伯爵の身柄を引き渡す気はないのか?」

「ほんと、何を言ってるの? かわいいラックと同じようなこと言わないで頂戴!」

「っ!」

自分と同じ事を言った、と言われてアレイさんの顔が引きつった。そしてため息をついて頭に手を当てた。

「くそ、ガキと同じ事を言ってしまうとは……俺も落ちたものだ」

「何だよ！ シツレイだよ、アレイさん！」

「うるさい、くそガキ。街の景観をめちゃめちゃにしゃがって」
「うつ……」

言い返せなかった。

石畳はめくれ上がり、閑散とした道には焦げたあとがあちこちに残っている。

「怪我はないか？」

「あ、うん。おれは平気。街のヒトも、みんな逃げたよ」

そう言つとアレイさんはほつとしたような表情を見せた。

「それは心外だよ、レメゲトン。僕は関係のない人たちを傷つける気などさらさらない」

「さつきカンナを攻撃したじゃないか！」

「それは必要だからさ。それ以外僕らは人を傷つけたりしないよ。あの銀髪の子とは違う」

銀髪の子、彼らもこの近くまで来ているのだろうか。心臓が一つどくりと脈打った。

会いたい。会いたい。

あの銀の髪に触れて、銀色のオーラを感じたい。

「銀髪の子も来てるの？」

心臓がドキドキしている。

ねえちゃんを助けたいと思いと銀髪の子への思いと、目の前のヒトに勝たなくてはという思いで体がばらばらになってしまいくらいだ。いつたいたいだろうか？

「よかったね、ティファレト。女の子のほうも君にご執心のように。いいねえ、相思相愛で」

「もう、ラックはあたしのものよ！」

「そんなことを言っていると本当に双子が怒り出すよ？ とにかくここは僕に譲ってね、お嬢」

「……仕方ないわね」

ネツアクが諦めたようにアレイさんの前に立った。自分の前に立

ちはだかったのは細身のシルエットの^{マジシャン}手品師ゲブラ。

どうしたらいい。今最も優先すべきことは何だ？

「とにかく相手を倒せ。敵を目の前にした時に気を抜くな。俺はすぐにこつちを片付ける。それまで持ちこたえろ」

「……うん、わかった」

アレイさんの言うことはいつも明解だ。いつも目の前に『一つだけ』を残してくれる。

やるべき事が決まったら頭の中がすっきりした。

とにかくこのヒトを倒すだけ。そうしてからねえちゃんの居場所を聞けばいい。そのためには、フラウロスさんに力を借りなくてはいけない。

「お願い、フラウロスさん。あのヒトを動けなくしたいんだ。でも、殺さないで！」

「ただの人間 興味ない」

「このヒトもセフィラだよ。きっと天使さんを召還できると思う」

「カマエル以外 興味ない」

困ったなあ。

思ったとおりフラウロスさんを扱うのは並大抵ではなさそうだ。

「ふふ、苦労しているようだね」

「うるさいなあ！」

くすくす笑うゲブラさんをきくと睨むと、背後の夕陽が目刺さって思わず目を細めた。

日が沈むまでもうあと少し、それまで耐えればセフィラの天使は天界へと帰ってしまう。それは最近教えてもらったことだ。

「じゃあその悪魔にいいことを教えてあげよう」

片眼鏡の^{マジシャン}手品師はにこりと微笑んだ。

「僕はセフィラ第5番目ゲブラ……召還する天使の名はカマエル！」
「?!」

その瞬間、目の前が赤く染まった。

顔が熱い。

これは隣にいるフラウロスさんのせいだけじゃないだろう。

「カマエル」

地獄の底から響いた声は自分の隣にいる灼熱の獣が発したものだ。つた。

その声が向けられた先にいたのは、同じように妖炎の瞳と灼熱の毛並みを持つ獣——フラウロスさんを鏡に映したような姿を持つ豹の姿だった。

全く瓜二つの容姿を持つ獣が二体ならみ合う姿はひどく恐ろしく、思わず後ずさるのをとめられなかった。

発する熱で皮膚がちりちりと焦げている感覚がある。

とてもその二体を直視することはできなかった。

「コロス」

熱風の圧力が襲い掛かってきた。

灼熱の炎が辺りを包んだ。

考えるより先に体が動いていた。

一足飛びに数メートルもの距離を飛び退った。

「どうということだい、カマエル。説明してくれないか？」

同じようにはるか向こうまで距離をとったゲブラが熱を避けるようにシルクハットを深くかぶりなおしながら言った。

「これは二つに別たれた我が分身 いくつか互いのいずれかを滅ぼさねばならぬ相手」

声もフラウロスさんとそっくりだった。でも、ずっとわかりやすい文章を紡いだ。

「ふうん……古い文献で読んだ事がある。一部の天使は自らの片割れを悪魔に持つという。セフィラが使役する天使はほとんどがそうだとか」

「同じ魂が二つ存在する それはありえぬ事態」

フラウロスさんと同じ声で、同じ灼熱の毛並みと妖炎の瞳でそのカマエルという天使さんは吐き出すように言った。

憎らしさと共にどこか哀れみと悲しさを含んだその言葉に、なぜ
かきゅっと胸が締め付けられた。

SECT・22 暴走の序章

フラウロスさんは鋭い牙と爪でカメルさんに襲い掛かった。カメルさんもしなやかな体を生かしてそれを軽々と避ける。

お互いが同じ体と同じ力を持っている。

いつしか二体の獣は組み合って、地面を焼きながら転がっていた。

「フラウロスさん！」

「おや、他人の心配をしている余裕はあるのかな？」

「！」

しまった、氣をとられているうちに……！

反射的に抜刀して初太刀を受け止めた。

「やはりいい目をしている。反射神経も申し分ないようだ」

ゲブラさんは楽しそうに笑いながらいつの間にかどこから取り出したステッキを構えていた。

ネツアクと色違いで漆黒のそれは普通のステッキではないようだ。普通なら小太刀を受け止めた時点で真つ二つにされているはずだ。

いったん距離を置いてシルクハットの^{マジシャン}手品師と対峙した。

おそらく身体能力も戦闘経験も相手のほうが数段上だ。

自分が勝てる相手ではない。

でも、日没はもうすぐそこまで迫っている。だから自分がやるべきことは唯一つだ。

「もったいない。まだまだ磨けば光る素材だが、ここは我が祖国セフィロトのネブカドネツアル王の欲望を満足させるために捕まってもらうよ」

「そうはいかないよ。おれだって簡単に捕まってたまるもんか！」

日が沈むまでは負けない。

きつとそれが今のおれにできる『一つだけ』だ。

すぐそこでは灼熱の体を持つ悪魔と、妖炎の瞳を持つ天使が組み合って激しい戦闘が繰り広げられている。

肌はその熱で焼かれきつてもう感覚が残っていなかった。

でもまだ剣を握る力も体を支える力も残っている。

「おれは負けないよ。ねえちゃんを助けるまでは!」

「勇ましいな」

ゲブラさんは軽くステッキを振った。

すると、ステッキがなんと炎に包まれた。

「?!」

「君は悪魔の加護を得る術を知らないようだ。それでは僕に敵わないよ」

「加護?」

「呼び出した悪魔に戦わせるだけでなく、悪魔の能力を自分に移すこともできるはずだよ。そんなこと、教えてもらってないのかな?」

「……」

そうだ。

アレイさんは背後にマルコシアスさんを従えていた。銀髪のヒトもミカエルさんの加護を受けていた。

でもどうすれば加護を受けられるのか自分は知らない。

フラウロスさんは今必死でカマエルさんと戦っている。本人には聞けないし、もし加護を受けられたとしてもフラウロスさんが戦闘に使う力を少しだつて削いでしまうのは絶対に嫌だ。

「本当にもつたいないな。どうしてそんなにも知らない事が多いんだ? とてもレメゲトンとは思えないな」

「おれ……なりたてだから。」

それを言い訳にしくなかつたが、このままではレメゲトン全体が何も知らないように思われてしまう。それはとても嫌だった。

自分が弱いからといってアレイさんやじい様まで弱いと思われたら、それこそ剣技を教えてくれたマルコシアスさんや知識を与えてくれたねえちゃんに申し訳が立たない。

「発展途上か。なるほど、興味をそえられるわけだ。普段女の子に目を止めることなどないのだけれどね」

「男のヒトが好きなの？」

もしかしてこのヒトは女のヒトなんだろうか？どう見ても男なんだけれど。

首を傾げるとゲブラさんは困ったように笑った。

「……そう真直ぐな瞳で見られると少々後ろめたいな。僕は男だよ。でも、どちらかと言うと男のほうが好きだな」

「ふうん」

へんなの。

「そんな澄んだ目で見ないでくれないか。僕が汚れているような気がしてくるじゃないか」

「別に変なヒトだなと思うけど、だからって駄目だとかやめたほうがいいとかは思わないよ？」

「世間の目が冷たいのはどうしようもない事実だからね」

「世間とおれは関係ないよ」

思ったままを口に出しているはずなのに、ゲブラさんは帽子を抑えて天を仰いだ。

「ああもう何だか気がそがれるな、君だってずいぶん変わってるよ」

「どこが。男のヒトを好きになったことはまだないけど、女のヒトが好きって訳じゃないよ。ああ、でもねえちゃんは別格だけれど」

「本当に変わっているよ。自覚したほうがいい」

「ぜんぜん分かんないな。おれはおれだよ。それ以外の何者でもない」

小太刀をもう一度握りなおした。

離れたところでフラウロスさんが雄叫びを上げた。

「ねえちゃんを返してもらうよ。おれは世界で一番ねえちゃんが好きなんだ」

「仕方がないな」

ゲブラさんも炎を纏ったステッキを自分のほうに向けた。

ねえちゃんに習った短剣の使い方と基本の戦闘、それからマルコシアスさんとアレイさんに習った柔らかな剣の使い方——もう一度

思い出して、心を落ち着けた。

受け止めるんじゃなくて、攻撃の軌道を変えて受け流すんだ。炎を纏ったステッキが振り下ろされるのを見て、その軌道を読んだ。そして、その軌道に添えるようにして小太刀を下からなで上げた。

ほとんどぶつかり合う音もせずにステッキは体の横を通過していく。

軽く右腕に痛みが走ったのはステッキの炎がかすめたせいだろう。だが、戦闘中気に留めるほどの痛みではない。

普段ならすぐ攻撃に転じるところだが、下手に打って出て逆に怪我を負ってしまったては元も子もない。

受けるだけに徹しよう。

ゲブラさんと、その手に握られたステッキの動きに全神経を集中した。

横からの攻撃はステップで下がってかわし、時に小太刀で受け止めることでのりくらりと攻撃をかわしていった。

ほんの数時間のマルコシアスさんの稽古は思ったよりもずっと自分の体にしみこんでいたようだ。

「やるねえ。まだまだ荒削りだが、鍛えようによつてはかなりのものができそうだ」

「ありがとう」

少しだけ息が切れ始めた。

それに対してゲブラさんはまだまだ力を温存しているように見える。

「じゃあ少しだけ本気を見せてあげよう」

ゲブラさんが目を細めた。

来る。

目の前の敵に集中した。足を地面にしっかりと貼り付け、小太刀を握る手に力をこめた。

探索者として街を駆け回っていた頃そうだったように、周囲の景

色がすべて感覚に入り込んでくる。視覚も聴覚も触覚も体中が気配を感じるように鋭敏になる。

麻痺したと思っていた皮膚が感覚を取り戻した。

灼熱の圧力が様々な方向から襲ってくる。

そんな中でゲブラさんはひどくゆっくりとした動きでステッキを天頂に突き上げた。

次の瞬間、ゲブラさんの手首が返ってステッキの先がこちらを向いた——速い！

何が始まるかわからず、とにかくすぐに体を横にずらした。

気がつくと自分がたっていた場所から煙が立ち上っていて、石畳に黒く焦げたあとが残されていた。

「へえ、よく避けたね」

ステッキの炎が消えている。

「一歩遅かったら黒こげだったよ」

おそらくステッキにまわりついた炎をこちらに向かって高速で飛ばしたのだろう。

速くて見えなかった。

いや、もう一度気をつけていれば見る事ができるか……？

大きく息を吐いてもう一度構えた。

ゲブラさんはまるで本物の手品師^{マジシャン}のようにステッキを手の中から一瞬で消した。

「うわ、消えた！」

「ふふ、僕の本職は手品師だからね」

「うん、そうじゃないかと思ってたよ」

今度は白い手袋をはめた両手を上に向けた。

その上に青白い炎が浮かぶ。ぼんやりとしたそれは小さな人魂のように白い手袋^{マニキュア}の上で揺らめいた。

夕陽の紅と手品師の黒、白い手袋とその上に揺らめく蒼い炎……くつきりとした対比にはっと目を奪われた。

ところが、それは一瞬だけだった。

山の端にかかっていた真っ赤な太陽は王都の方角、西の方向に姿を消した。

その瞬間に、絡み合って転がりまわっていた二体の獣のうちの一体が溶けるように掻き消えた。

「タイムリミット、か」

ゲブラさんはふう、と息を吐いた。

突如相手を失ったフラウロスさんは、大きく吼えた。

その怒りの方向を見失った灼熱の獣は怒り狂って炎を吐いた。

凄まじいまでの高温を孕んだ炎の塊は真直ぐに民家の壁に向かって飛んだ。

「！」

レンガ造りとはいえ、一般の民家だ。凄まじいエネルギーを秘めた火の玉をぶつけられて無事なはずはない。

大きく抉り取られた壁は、真っ黒に焦げた傷跡を残した。

「やめて、フラウロスさん！」

必死で叫んだが聞いてもらえない。

さらに炎の玉をいくつも打ち出して街を破壊し始めた。

「おやおや、自分の悪魔を制御しきれていないのかい？ とんだレメゲトンだな」

ゲブラさんを見捨ててとにかくフラウロスさんのもとへ向かう。

今まで天使カマエルと戦闘を繰り返していた悪魔の体温は呼び出した時の比ではない。

まだ数メートル先にいるというのに皮膚が焦げる感覚が全身を襲った。

フラウロスさんの足元の石畳が焦げるのを通り越して融けていつてしまっている。

「止まって、もう日が沈んだからカマエルさんはここにいないんだ！」

必死で呼びかけると、フラウロスさんはこちらに反応した。

が、必死の声が届いたわけではなかった。

目の前に灼熱の炎の塊が迫っていた。

「！」

どうしようもなく立ち尽くした視界は真っ赤に燃える火の玉で埋め尽くされた。

やばい。

避けられない！

もうダメだと思った瞬間、目の前に炎とは違う光が閃いた。

SECT・23 加護

ふわりと何かに包まれた感じがした。

その感覚には覚えがあつた。

マルコシアスさんの羽根に触れたときの感覚だつた。柔らかくて優しくて心から安心できるような空気に包まれた。

閃いた光のものはラーズのコインを隠している左の籠手からだつた。

でもこの光はラーズのものとは全く違つていた。

光が自分を包むと同時にフラウロスさんから発せられている熱から開放された。

自分に迫つていた炎の玉は光に相殺されて消滅したようだ。

「……フラウロスさん」

ぐるる、と低くうなる獣に一步步近づいた。

光の加護のおかげで熱さが和らいだせいなのか、最初に出会った時ほどの恐怖はなくなっていた。

それでもこの灼熱の悪魔に手を伸ばすのが躊躇われたのは仕方がないだろう。

「もう、敵はいないんだ」

きつと戦うべき相手を見失つて混乱しているだけなのだ。

すつと右手を伸ばすと、一瞬フラウロスさんは警戒したが、にこりと微笑みかけるとおそろおそろ近寄つてきた。

こちらが怖がつていたら相手にもそれが伝わる。

大きな大きな猫だと思えばいい。しかも相手はとても混乱している。

だいじょうぶだよ。怖くないよ。

フラウロスさんの妖炎の瞳がこれまでにないくらいに近づいた。

地獄の業火を集めて作ったそれはやはり背筋を凍らせた。

でも、それを悟らせてはいけない。

「だいじょうぶ。もう、だいじょうぶ」

右手をゆっくりと差し出した。

獣は抵抗しなかった。

契約に行く時アレイさんがしてくれたみたいに、安心するように
って両手を首に回してぎゅうつと抱きしめた。

そうするとさすがに光の加護があっても皮膚が焦げる感覚があっ
た。

でも離す気はなかった。

「落ちていて、フラウロスさん」

ふさふさなのに焼けるように熱い毛並みが頬をくすぐった。
すると、フラウロスさんのしゃがれ声が耳をくすぐった。

その息もとても熱くて、思わず身震いした。

「離せ 娘」

その言葉に従って離すと、フラウロスさんはふん、と鼻をひとつ
鳴らした。

「帰る また 呼べ」

「うん、ありがとう、フラウロスさん」

笑おうとすると頬が突っ張った。

どうやらそれなりに火傷を負ってしまったようだ。

灼熱の獣の姿はその場から掻き消えて、太陽の薄明かりがほんの
少しだけ残る町並みに静寂が訪れた。

振り向くといつの間にかアレイさんが立っていた。

その肩には黒服のお人形さんが抱えられていて少しびっくりした。

「ネツアクは……？」

「気を失っているだけだ」

アレイさんはそう言うつと薄暗い通りに一人立つゲブラさんを睨み
つけた。

「ファウスト女伯爵の居場所はわかった。この女は解放するから、

連れてさつさとセフィロトに帰るんだな」

ぐったりとした少女をゲブラさんに投げ渡す。

細身のシルエットの手品師は軽々その体を受け取った。

「おやおや、見つかってしまったのですか」

「その女は口が軽い」

「ご忠告どうも。まあ、それは分っていた事ですが」

ゲブラさんはシルクハットをとった。

肩までの黒髪がさらりと落ちた。

「それではごきげんよう。次こそは戦場でお会いしましょう。ぜひ、手合わせ願いたいものです、クロウリー卿」

「……願い下げだ」

ゲブラさんがシルクハットを一振りすると、一瞬で二人の姿は消え去った。

その姿が完全に消え去ってからアレイさんはすぐに行動を開始した。

「何とか退けたな……ねえさんを迎えにいくぞ！」

「うん、わかった」

やっとねえちゃんのところに向かえる！

ときどきした。

「加護の受け方を教えてやる。馬は使わず加護を受けた状態の身体能力を駆使して向かうぞ」

「……わかった」

アレイさんはさっきの会話を聞いていたのだろうか、それともともと教えようとしていたのだろうか？

いずれにせよ悪魔の加護を受けねば次にセフィラと会ったとき戦闘に持ち込めない。

「誰の加護を受ける？」

「アガレスさん。フラウロスさんは……ちょっと危ないし」

先ほどのことを思い出して身震いした。

あのままフラウロスさんを止められなかったら——そんなこと、考えたくもない。故郷のこの美しい街は跡形もなく消え去っていただろう。

とはいっても今の時点で原形を全くとどめていないのだが。

「それが分かっただけで収穫だ」

そこでアレイさんはいったん口をつぐんだ。その視線の先にあるのはどうやら焼けた皮膚らしかった。

確かに毛皮に直接触れた腕や頬の辺り、首筋にかけてはひりひりと痛んだし動かそうとするといくらか突っ張ったが、動けなくなるような怪我はひとつもなかった。

「おれは平気だよ。早くねえちゃんのところに行こう」

「……無理はするな」

アレイさんは相変わらず不機嫌そうな顔で目を逸らした。

「加護を受けるのはそう難しいことではない。悪魔を使役するのは意志の力だ。こうありたいと願う強い心さえあれば悪魔の力を借り受けることは容易い」

「つまり、力を貸してほしいって思えばいいの？」

「……まあそういうことだ」

アレイさんはまだ何か言いたそうだったが、時間が惜しいと思っ
たらしい。

それは自分も同じことだ。

「やってみるよ」

右手首に括りつけたアガレスさんのコインを左手でぎゅっと握っ
た。

「アガレスさん、力を貸して！」

おれがアガレスさんの力を使えるように。

ねえちゃんを助けに行くために。

手の中のコインが熱くなる。その熱が全身にいきわたるような感
覚があった。

体が軽くなる。どれだけ遠くへでも飛べそうだ。集中したわけでもないのに感覚が鋭敏になっている。

こぶしを握ったり開いたりしてみた。

全身に力が溢れている。これまでにない高揚感が全身を支配していた。

「アガレス、さん？」

「ここにいます」

声が響いた。

同時に目の前にアガレスさんといつも一緒にいる金の目の鷹が舞い降りてきた。

「どうやら大丈夫そうだな……行くぞ、くそガキ」

「うん。でも、どこに？」

アレイさんは黙って東の方向の大きな山を指した。

夕陽が沈んだ今、その山は黒々とした影をあらわにしていた。

「……ラッセル山？」

「急ぐぞ。ついてこい」

「あ、待ってよ！」

すごいスピードで突如走り出したアレイさんを追って地面を蹴った。

体が軽い。信じられない速さで景色が後ろに跳び退って行く。

金目の鷹は全く遅れることなく自分にぴったりと寄り添うように空を切っていた。

「山のどの辺りかわかるの？」

斜め前を飛ぶような速度で走るアレイさんに問う。その背に浮かんでいるのは見慣れた褐色の剣士の姿だった。

飛び荒ぶ風の音がうるさい。

「おそらく登山道からそう外れてはいない」

「どうして？」

風に逆らうように声の音量を上げた。

アレイさんのバリトンが轟音の合間に鼓膜を揺らす。

「おそらくねえさんがバシンで移動した先はレグナの住処だからだ」
「え？」

「事件のあった日、レグナの住処から轟音を聞いた者がいる。それは十中八九セフィラとねえさんの戦闘によるものと見ていいだろうだが、そこにねえさんはいなかった」

あつという間にカトランジェの街を駆け抜けて、ラッセル山に向かう一本道に入った。

日が沈んでから辺りはどんどん暗闇に支配されていく。ところが加護を受けている今、全く視力は衰えなかった。それどころかいつもより遠くまで見渡せそうな気さえした。

「そうなると考えられるのは、セフィラがねえさんをどこかへ運んだということだ。このあたりにまだいたことから考えて、天使の力による移動は行っていないようだ。なぜそうしないのかはまったく分らない。ねえさんを束縛した時点ですぐにセフィロト国へ送ればよかったものをこんなところでぐずぐずと……まあ、こちらにとつてはそれが好都合だったわけだが。いずれにせよ、セフィラが物理

的にねえさんを移動したことは間違いない」

「だから登山道からそう離れたところには運べない、って言うんだね」

「そうだ」

なるほど。そういう風に考えればいいのか。

ひとつずつパズルを組み合わせるように、積み木を積んでいくように理論を組み立てていけばいいんだ。

「先ほどの二人がどういう行動をとるかは分らない。とくにあの細長い方のセフィラ……奴は何かがおかしい。とてもセフィロト国を第一にして動いているとは思えん」

「そうなの？」

「そう思わなかったか？ あいつの实力は俺でも勝てないかもしれない……それなのにフラウロスの加護を受けているわけでもないお前がほんの数刻だとしても耐えられると思うか？」

いわれて考えてみると、確かにあの手品師は自分と戦うよりも話すほうがずっと楽しそうだった。

加護についてもそうだった。弱みを突くところか、まるで弱点を洗い出して正そうとしているかのような口ぶりだった。

先ほどのやり取りでいろいろな情報を得た気がする。

「男のヒトが好きだって言ってたよ。アレイさんが好みなんだって」
「……」

返事がなかった。

微かにマルコシアスさんの笑う声がした気がする。

「それとね、天使さんには悪魔さんの片割れがいる事があるって言ってたよ」

「どういうことだ？」

「おれにもよくわかんない。ただ、フラウロスさんはカマエルさんとすごくよく似てて、お互いがお互いを消そうと思ってるみたいだったよ」

「マルコシアス、何か知っているのですか？」

一瞬の沈黙があつて、マルコシアさんは抑揚ない声で言った。

「耳にした事はある　だが我よりアガレスの方がよく知るだろう」

「ねえ、アガレスさん。知ってる？」

真横を飛ぶ金目の鷹に問いかけた。

「同じ魂は惹かれあい　いつか互いを滅ぼすだろう」

アガレスさんの台詞には聞き覚えがあつた。契約の時アガレスさんが自分に言つた言葉ととてもよく似ていた。

「一つを別つ元は　光輝にある　古の戦がそもその発端　光は世界を二分した　波紋は様々に」

「……」

やっぱりよく分からないよ。

アガレスさんはもう少し言葉を減らすか簡単な言葉にするかどちらかにして欲しいな。

「半身を捜せ　滅ぼせばそれが真実だ　幼き娘」

「ありがとう、アガレスさん」

分かりにくいアガレスさんの返答はひとまず置いておいて、記憶の糸を手繰り寄せてフラウロスさんそっくりな天使のカマエルさんを台詞を思い出した。

——いつか互いのいずれかを滅ぼさねばならぬ相手

ちりり、と痛みにも似た熱い感覚が額を軽く焦がした。

やけどの痛みとは違つそれに、思わず額に手を当てたが特に変わった様子はなかった。

むしろ走っている間は、風が焼けた皮膚に当たつて気持ちいい。

「悲しいな。自分の分身と戦うなんて」

カマエルさんの言葉に胸が締め付けられた理由はきつとそこにある。

同じもの同士戦うなんておかしい。一緒にいたらその力は倍になるはずなのに。

「戦つて一人を消すんじゃないくて、二人が一緒になつて一つになつたらしいのに」

言つとマルコシアスさんは唇の端で微笑んで、アレイさんはすごい速さで走っているというのに器用にもため息をついた。

「……お前の言葉はたまによく分かん。きちんとした言葉を習つたほうがいいぞ、くそガキ」

「おれにだつて分かんないんだよ！」

むつとして答えたが実際これ以上何も分からないのだ。

ただ黙つて人間にはありえない速度でラッセル山の麓まで続く道を駆け抜けた。

山の登山口に立つて、アレイさんはやっと歩を緩めた。ぶつかりそうになつて慌ててブレーキをかける。

足を止めてみたが全く息が切れていない。不思議なくらい力が沸いてくる。

「すごいね。ぜんぜん疲れないや。加護を受けてるヒトには生身じや敵いつこないってこと、よくわかつたよ」

軽く跳んだだけでアレイさんの身長を楽々と凌駕できる。

悪魔の加護があるだけでこれほどの身体能力が手に入るとは……！

「それなら今のお前には見つけられるはずだ」

「え？」

「もともとお前の洞察力は突出している。今は加護を受けて人知を超えたものに達しているはずだ。山に入ったら周囲をよく見ろ。おそらく何かしらの痕跡が残っているはずだ」

「……分かつた」

アレイさんの紫の瞳を見つめ返して頷いた。

山道としては整備された部類に入るラッセルの山越えは、それでもかなりの急坂だ。

斜面を這うようになって坂道が続いている。道の傍まで木々が迫っていて、完全に太陽が沈んでしまったこともあわせて実際より

ずっと狭い道に見えた。

アガレスさんの加護があるおかげで光がなくてもあたりの様子は分かったが、それでも夜の山道は不気味さをかもし出していた。

きつとねえちゃんが近くににいるはずだ。

感覚をさらに研ぎ澄ます。

その瞬間、木々の葉の動き一つ一つが見えた。静寂の中で小動物の動きが聞こえた。風の動きが目に見えるくらいはつきりと感じ取れた。森のざわめきが迫るように耳を侵して、風は気持ち悪くなるほどねっとり肌に絡みついた。

いつもと比べ物にならない情報が脳に流れ込んできて、思わずくらりとした。

眩量を感じて体が傾いた。

「しっかりしろ！」

アレイさんのバリトンが脳を揺さぶるような大声に聞こえて、頭の芯にまで響き渡った。

思わず顔をしかめると、だんだん感覚が元に戻ってきた。木々のする音が遠ざかって、風の揺らめきは目の前から消え去った。

膝について呼吸を整える。

心臓がすごい速さで脈打っている。

「うん、だいじょうぶ……ちょっと情報が多すぎて、びっくりしただけ」

ずきずきと痛む頭に手を当てた。

「加護を受ければ 凄まじい負荷が罹る」

マルコシアスさんが静かに言った。

「慣れるまで苦勞するだろう」

「うん。でも、この力を使いこなせたら何もかも見えそうな気がするよ」

「黄金獅子もその力を有していた」

マルコシアスさんの言う黄金獅子、というのは自分のご先祖様に当たるゲーティア「グリフィス」というヒトだ。稀代の天文学者と呼

ばれる、72人の悪魔と最初に契約を交わした張本人だ。

アレイさんの顔色が変わった。

「まさかそれは『千里眼』と呼ばれるものですか？」

「周囲の者はそう呼んでいた」

「……！」

紫の瞳が大きく見開かれた。

「黄金の瞳は 大地を見 風を聞き 流れを感じ 全てを知った」

金目の鷹——アガレスさんはまるで一遍の詩のように滔々と語った。

「黄金獅子を獅子たらしめた 能力だ」

「せんりがん？」

首を傾げると、アレイさんは信じられないといった口調で答えてくれた。

「稀代の天文学者ゲーティア・グリフィスは優れた五感を有しており、遠く離れた地の出来事を見て、鼓動の音でヒトの感情を読み取り、さらには肌で風を感じ気配を呼んだという。そしてその能力は『千里眼』と呼ばれていた、と伝承に残っている。まさか同じ能力をお前が持っているとは……」

「黄金獅子の末裔とは よく言ったものだ」

マルコシアスさんが微笑んだ。

「じゃあやっぱりこの力を使えばねえちゃんを探せるよね！」

「……そうだ」

アレイさんはまたもとの無表情に戻っていた。

アガレスさんの加護を全身に感じながら、もう一度山道を睨みつけた。

「じゃあ、もう一回がんばってみるよ」

一つ大きく息を吐いて、集中する。

肌が鋭敏になる。視界が広がる。森のざわめきが近づいてくる。

その瞬間、またも大量の情報が全身のいたるところから流れ込んできた——

SECT・25 過去への道標

全部を受け止めることは無理だ。情報量が多すぎる。

懐中電灯で照らすようにして一方向の情報を整理することから始めた。そのほかの情報は遮断する。

そうしようと思ってもなかなかうまくいかない。

いつもなら聞こえない音が様々に入り混じって頭痛を誘発する。

見えないはずのものが見えて目の奥が熱くなる。

それでも必死に手がかりを探した。

ねえちゃんを運び込んだならその痕跡が何かしらあるはずだ。

集中していた時間はほんの数十秒に過ぎなかったと思うが、まるで何時間も何かを探していたかのように脱力した。

全身から汗が噴出した。

思わず膝について荒くなってしまった呼吸を整えた。

それでも……

「見つけた……よ」

ここから見える範囲ぎりぎりのところに、大きな道から横に入る細い道が伸びていた。ずいぶん長い間使われていなかったのか草が隠していたのだが、そこを最近何かが踏み荒らした跡が残っていた。おそらく、セフィラたちがねえちゃんを運んだ跡だ。

きつとそうに違いない——そうであって欲しい。

「立てるか？」

「……うん」

膝が笑っている。

いくらか集中しただけなのに体中の力を使い果たしてしまったみたいだ。

それでも渾身の力を込めて近くの木にもたれかかるようにして立ちあがった。

「それでは動けないだろう」

「だいじょうぶだよ。ねえちゃんのところに行かなくちゃ……」
一歩踏み出してよろけた。

それをアレイさんが支えてくれる。

「そんな状態では足手纏いだ。ここで待っている」

「やだ、行く。ねえちゃんに会いたいんだ」

とは言っても先ほどから駆使した眼は白い霧がかかったように前が見えないし、アレイさんの声はすごく遠くに聞こえた。木にかけた手に力は入らないし、足元はふらついて真直ぐ歩けそうになかった。

どうやらアガレスさんの加護がなくなってしまったらしい。一瞬意識がとんだのが原因だろうか。

アレイさんのため息が聞こえて、体がふわりと浮く感覚があった。
「連れて行ってやるからおとなしくしている」

目の前にアレイさんの黒髪があった——どうやらここはアレイさんの背中の上らしい。

いつの間にかマルコシアスさんの加護も消えていた。

ぼんやりと霞がかった視界は夜の闇も手伝って周囲の様子はほとんど分からなかった。

「場所はどこだ？」

「小さい道。ここから見えるぎりぎりくらいの所、すぐに草で隠れてて見づらいんだけど左に抜ける細道があるよ。少し踏まれてるからすぐ分かんと思う」

「わかった」

正面から風が吹いてきた。

それは風が吹いたのではなくアレイさんが走り出したからだとすぐに気づいた。ぼんやりした視界の中で、アレイさんが草に分け入ったのも分かった。

この先にきつとねえちゃんがいるはずだ。
ときどきした。

小道は入り口こそ隠してあったが、しばらく行くと平坦な道に変わった。

「かなり人が通った跡があるな。頻繁に使われていたらしいが……ここ数年は使われていないようだ」

「そうなの？」

視界がぼんやりしてよく見えない。

「ああ。この先に何かあるのか……それこそレグナの住処にあったような天使崇拜の村や教会が残っているかもしれない」

「！」

レグナの住処、と聞いて胸がずきんと疼いた。

それを隠すようにアレイさんの首にぎゅっとしがみついた。

「……あまりくっつくな、暑苦しい」

「でも」

「離れる。置いていくぞ」

「むう……」

仕方がないので手をほどいて体を離れた。置いていかれては困る。少しずつ視界が晴れてきた。

眼が慣れてくると今アレイさんが歩いているの道は小さな馬車が一台とおれるほどに幅の広い未知だということが分かった。

いったい何故こんな外れたところに整備された道があるんだ？

「本当にこの先は何かの隠れ里らしいな。だが轍の具合から見てもすでに何年か使われていないだろう。捨てられた里と見て間違いない」

まだ先が開ける様子はない。

暗い森の中に向かって道が続いていた。

どれだけ歩いただろう、完全に眼と耳が復活した頃にようやく先が見えてきた。

木々の間に建物の影が見え隠れしている。

とてもこの山の中に似つかわしくない立派な建造物だ。王都ユダの貴族のお屋敷みたいに大きな館が森の中に忽然と現れた。

ひどく不自然だ。道を隠しているのにこんな堂々と居城を構えたのでは隠れ里の意味がない。

「これが隠れ里？」

アレイさんがいぶかしげな声を出した。

それはそうだ。確かにそうなんだけど……

「アレイさん……」

声が震えそうになった。

「止まって。降りるよ」

「どうした？」

訝しげにしながらもアレイさんは自分を降ろしてくれた。

心臓が耳元でばくばくと音を立てている。

怖い。怖い。

「わかんないけど、あのお屋敷が怖いんだ」

何故だかわからないけれど震えが止まらなかった。開けてはいけない扉を開けかかっているようで息が苦しくなった。

屋敷を視界に入れないようにしてアレイさんの背中に張り付いた。だんだん気持ち悪くなってきた。

フラッシュバックの時と同じだ。

「ここで待っている。ねえさんを連れてすぐ戻る」

アレイさんが行こうとしたけれど、マントの裾をぎゅっと掴んで離さなかった——離せなかった。

一人になるのが怖かった。

紫の瞳が歪んだ。

怒ったのかな。そうだね、ワガママ言ってるもんね。

でも、どうしてもあのお屋敷は怖いんだ。

「行くか行かないかすぐに決める。これ以上ねえさんをほっつておくわけにいかない」

単純な質問がとても難しく感じた。

行きたくない。でも、一人でここにいるなんて無理だ。

きつとあの屋敷にねえちゃんがいるんだ。助けに行きたい。ねえちゃんに会いたい。会いたい、会いたい……

でも震えが止まらない。

「行……く」

お腹の底に力を入れて声を絞り出した。

それだけで吐きそうになるほど気持ち悪かった。

「無理するな。駄目だと思ったらすぐに言っんだ」

アレイさんはそう言うつとゆっくりお屋敷に向かって歩き始めた。

全身を襲う恐怖と嫌悪感に立ち向かいながら、その背中を必死で追いかけた。

SECT・26 血の再会

王都ユダで見た貴族のお屋敷はほとんどが白い壁だったのに、このお屋敷は壁が真っ黒だった。

巻きついた蔦が禍々しく演出しているその屋敷は見覚えがあるのかどうかとも思い出せなかったが、全身が警鐘を鳴らしていた。

胃が反り返りそうだ。全身の震えも止まらないし、治ったはずだった背の逆十字の傷が微かに痛んだ。冷や汗で背中がぐっしより濡れていた。

お屋敷自体はもう誰も住んでいない事がすぐに分かった。窓はあちこち割れていて、壁が崩れている箇所すらある。

アレイさんは躊躇わず扉に手をかけた。

きしんだ音がした、と思ったらすさまじい音を立てて扉は反対側に倒れていった。

その音に思わずびくりとする。

「入るぞ」

静かな屋敷にアレイさんのバリトンが響いた。

「うん」

精一杯の返事をして屋敷に足を踏み入れる。

その途端——血の匂いがした。

もう限界だった。

「うあああああ——！」

全身を凄まじい激痛が貫いた。

目の前を銀髪の天使が通り過ぎていく。むせ返るような血のにおいと真っ赤に染まった視界が自分の中をかき乱す。

自分の手が真っ赤に染まっている。

銀髪の天使の群青の瞳が近づいてくる。6枚の翼が暗闇に閃いた。痛い 苦しい

「助けて……！」

気が遠くなりそうな痛みと衝撃の中で、様々な光景が目の前を通り過ぎていった。

これまでより少し鮮明になった映像の背景は……

「ラック！」

バリトンの鋭い声で我に返った。

目の前に紫の瞳があつて、ほっとした。アレイさんの胸に頭を預けて息をついた。

フラッシュバックは消えたが背中 of 逆十字の傷はまだ痛んだ。

「ああ、前にも一度こんなことあつたね……」

どうやらアレイさんの声を聞くと正気に戻れるみたいだ。

「このお屋敷ね、たぶん知ってる。昔来たことあるよ。もしかしたら、住んでたのかもしれない」

フラッシュバックで見える過去の光景の背景はこのお屋敷のものだ。

そう唐突に確信した。

「何だつて?!」

「よく分かんない。ぜんぜん覚えてないんだけど、そういう風景が見えたんだ、さっき」

吹き抜けホールの天井にある大きなシャンデリア。目の前に伸びる大きな階段と、その向こうに見えるのは全面にはられた大きな窓

「……え？」

その窓を見上げた時、何か影が映った。

とても見たことのある、ずっと捜し求めていたシルエットだった。

「ねえちゃん！」

その瞬間に何もかも忘れた。

背中 of 古傷の痛みもフラッシュバックの光景も全身を襲っていた嫌悪感も恐怖も、すべてが幻のように消滅した。

十字架に両手を広げて括りつけられたねえちゃんの姿がそこにあった。

先ほどまで全く動かなかった足が動いた。

一気に階段を駆け上った。

「ねえちゃん！」

ねえちゃんはぐったりとしていて眼を開ける様子はなかった。

括りつけられた十字架の根元にはガラスのようなもので出来た球体があり、それは赤くてどろどろした液体で満たされていた。

「すぐ降ろすよ！」

追いついたアレイさんと協力してねえちゃんを降ろそうとした時・
・聞きたくて、でも聞きたくなかった声が響き渡った。

「レメゲトン！」

はっとして振り向くと、階段の下に立っていたのは銀髪のヒトたちだった。

暗闇に浮かぶ銀髪——それは再びフラッシュバックを呼び覚ました。

全身を激痛が貫いた。同時に襲い掛かってくる凄まじい恐怖と嫌悪感、そしてまるで壊れた鏡に映し出されたような断片的な映像群が目の前を駆け抜けた。

これまでで最も鮮明な映像だった。

見たことのある6枚翼の天使は銀髪と群青の瞳、それに彫刻のように整った顔立ちをしている。

その天使は自分のほうに近づいて、細く長い指をこちらに向けた。額が焼けるように熱くなった。

「ああああああ！」

全身の痛みを全て払拭するような熱さに喉の奥から悲鳴がほとばしった。

額が焼けるように熱い。

あの時と同じだ。

初めて銀髪のヒトの天使さんを見た時と——

「ミ……カエル」

自分のものでない声が喉から絞り出される。
嫌だ。嫌だ。

おれを支配しないでくれ！

「会いたい ミカエル」

やめてくれ！

額と背中 of 逆十字の傷が熱い。フラウロスさんを抱きしめた時よりも熱い。

気が狂いそうだ……！

「しつかりしろ、このくそガキ！」

アレイさんの声で現実に取り戻された。気がつくときアレイさんと二人の銀髪のヒトが階段下で打ち合っていた。

その背後にマルコシアスさんがいて、加護を受けて一方的な攻撃を仕掛けているのが見て取れた。

荒い呼吸を整えて立ち上がるうとしたが、全身に力が入らなかった。

アレイさんは二人を相手にしながら叫んだ。

「ねえさんをすぐに降ろせ！ そのままでは命が……！」

「そうはさせないよ」

「！」

階段の手すりに降り立ったのは、一人の手品師。マジシャン

体が言うことをきかない。今にも床に沈んでしまいそうだ。

「彼女一人でもセフィロトに持ち帰らないと、王がうるさいんだ」

「ねえちゃん……渡さない！」

負けるわけにはいかない。

ここにいるねえちゃんを守るんだ。やっと見つけたんだ。絶対に連れて帰るんだ！

「フラウロスさん、力を貸して！」

その瞬間、体の隅々まで力がみなぎった。

アガレスさんに加護を受けた時とは全く違う感覚だった。

体の内に秘められたエネルギーが今にも暴走を起こしそうな感覚だった。

「おやおや、すばらしい成長だね。ほんの数時間で加護まで受けられるようになってしまうとは。本当に面白い素材だ」

「どっか行け！　ねえちゃんに近づくな！」

こいつがねえちゃんをこんな風に動けなくしたんだと思うと怒りがおさまらなかった。

その感情に連動するように右手から火の玉が飛び出した。

「おっと」

マジン

手品師——ゲブラは軽く跳んで階段の真ん中に着地した。

「感情に任せた攻撃は読みやすい。いくら加護を受けてもそれじゃ僕には勝てないよ」

「知るか！」

両手を前に突き出すと、真直ぐな火の槍がゲブラに向かって飛んだ。

彼は全く慌てることなく天井近くまで飛び上がり、なんと自分の目の前に着地した。

「！」

「真直ぐな攻撃はよけやすい。攻撃はもつと捻ったほうがいい」

熱を込めた右手で殴りかかったが、あっさりとかわされた。

次々こぶしを繰り出したけれど全く当たらない。攻撃がかすりもしない苛立ちでさらに手数を増やすが全く当たる気配はない。

「くそお！」

がむしゃらに繰り出した左足の蹴りも軽いステップでかわされてしまった。

「いや、面白いね。どんどん成長しているよ」

嬉しそうな声に神経を逆なでされた。

そこからは無意識のうちに体が動いていた。

両手に火の玉を作り出した。そのうち一つをゲブラの頭に向かっ

てぶつける。

それが避けられるのは計算のうちだ。本命は次……

「はあっ！」

気合と共にもう片方の手を横に薙いだ。

先ほどの攻撃を避けたときに軸が後ろにぶれている。体を折って避けるしかないゲブラに、何の慈悲も湧かなかった。

横に薙いだ手を返し様、上に向かって捻りあげた。

そう、ガードがあいたゲブラの喉元に炎の塊をぶつけたのだった。

「ぐっ……！」

苦しげなうめき声と共にゲブラは階段の下に吹っ飛んだ。

そのまま床に倒れこんで動かなくなる。

ちょうどアレイさんが銀髪のヒトたちを床に沈めたところだった。

SECT・27 グレイシャーⅡⅡグリフィス

荒い呼吸を整えて、すぐにねえちゃんのほうを振り返る。

だいぶ扱いに慣れてきた炎で括りつけていた縄をすぐに焼き切った。ぼう、と音がして縄が焼けるのが分かった。

ふわり、とねえちゃんの体が宙に浮く。

「ねえちゃん……」

おれの力だけじゃ本当は無理だけど、今はフラウロスさんの加護があるから軽々とねえちゃんの体を受け止める事が出来た。

やっと帰ってきたねえちゃんの顔は硬く閉じられていて、まるでもう目を覚まさないかのような不安を覚えた。

それでも今腕の中にいるというだけで泣きそうなくらいに嬉しかった。

「やっと戻ってきたな」

いつの間にかアレイさんが隣まで来ていた。

「すぐに戻ろう。おそらく血がかなり足りていないはずだ」

「血が？」

そう言われてはつとして十字架の根元についていた硝子の球体进行い出す。

赤くてどろりとした液体で占められていたもの。

「血の制約だ……死なない程度に、しかし動けない程度に血を流させる。それをずっと繰り返すことで人質を動けなくする一つの方法だ」

「っ！」

「この十字架はそのための器具だ。それも流した血を集められるようになってるらしい」

信じられない。そんな悲惨な物が存在するなんて！

ところが、振り向くと十字架の根元に赤い球体はなくなっていた。同時にゲブラの声が階下から響いた。

「仕方ないからこれだけで我慢するよ」

銀髪の手を片手で二人抱え、さらに反対の手には真つ赤な液体で満たされた硝子の球体に乗せたゲブラは、さすがに先ほどの攻撃が効いているのか、苦しそうな表情をしていた。

「さっきの攻撃、かなり効いたよ……本当に先が楽しみだ。今度こそ戦場で会おう、黄金獅子の末裔のグレイシャー……グリフィス？」

「?!」

その名前に忘れられていた魂が反応した。

心臓がどくりと脈打って、冷や汗が顎まで伝った。

「それ……おれの名前なのか？」

「そうじゃないかな。ここを使う前に屋敷をチェックしたら、ここは王都を追放されたグリフィス家の隠れ屋敷だったようなんだ」

「何?!」

「ああ、資料はもうすべてセフィロト国に送ったから探してももう何もでないよ。グレイシャー……グリフィス……資料に一人娘の名前として載っていたよ。年は今年で18になる娘という君ぐらいしくないだろう。君は黄金獅子の末裔なんだろう？」

返答できずに口をつぐむと、ゲブラはくすくすと笑った。

「本当に大変だよ。ティファレットが君に執着するわけだ。かく言う僕もそうだけどね、君の隣にいる彼もきつとそうなんじゃないかな？」

「どういうことだ?!」

「そのうちきつと分かるだろう。背負うものの大きさに。世界の広さと関係性に。そしてその時君はいたいという結論を下すんだろっね？」

まるでアガレスさんが紡ぐように全く理解できない台詞を吐いて、ゲブラはくすくすと笑った。

「とても楽しみだよ」

そうしていつものようにふいに姿を消した。

天使さんも召還してないのに、なぜあのヒトはいつも消える事が出来るのだろう？

あとには静寂が満たす空間におれとアレイさんとねえちゃんだけが残された。

「グレイシャー……グリフィス……それがお前の本当の名前なのか？」

「分かんない……ぜんぜん覚えてないんだ」

改めて階段の上から玄関ホールを見渡した。

確かにフラッシュバックで見る光景の背景と同じではあったが、何の懐かしさも感じない。本当に自分はここにいたのだろうか。

全く思い出せない。

無理に思い出そうとするとまたあのフラッシュバックが帰ってきてそうだった。

「まあいい。それは後でも調べられることだ。とにかくねえさんを医者に連れて行かねば」

「分かった」

と、言っただけがいいが視界がぐるりと回転した。

おかしいな、と思ったときにはもう遅かった。

フラウロスさんは魔界へ帰ってしまったて、加護を失った自分は完全に意識を失ってしまったのだった。

きっとその後一番苦労したのはアレイさんだと思う。

ねえちゃんとおれを一人でカトランジェの街まで運んで、医者を呼んでさらにはほとんど付きっ切りで看病してくれたんだから。

目が覚めたとき、隣のベッドにねえちゃんが眠っていた。

顔は蒼白だったが、近づいて見ると息をしているのが感じられてほっとした。

「起きたか」

バリトンの声が響いた。

「アレイさん……ここは？」

「ねえさんの店の奥だ」

言われてみると天井の白さとか壁の絵なんかに見覚えがあった。

ベッドに起き上がると、少しだるさは残っていたがずいぶんと回復していた。ただ、動く顔とか首とかの皮が突っ張った。

そういえばフラウロスさんの炎で少し火傷をしたんだった。

手のひらを見ると真っ赤になって腫れていた。ここも火傷したらしい。

服はそのままだったが、両手の籠手はずされていた——左手の甲のラースのコインが剥き出しになっていて落ち着かない。

「アレイさん、籠手は？」

「ここだ」

アレイさんが渡してくれたのは、焼け焦げた黒い籠手と黒く変色した一枚の羽根だった。

一瞬首を傾げたがすぐに気づいた。ここに旅立つ前アイリスに頼んで籠手の裏に縫い付けてもらったマルコシアスさんの羽根だ。

「フラウロスに直接触れるなど自殺行為だ……マルコシアスの加護に守られたな」

「あつ、あの時の……」

フラウロスさんの炎が目の前に迫った時に優しく包み込んでくれたのはきつとこれだ。灼熱の炎の中で自分を守ってくれたのはマルコシアスさんの光だったのだ。

変色してしまった羽根を受け取って両手で包み込んだ。

これがなかったら大火傷、運が悪ければ命を落としていたかもしれない。

「ありがとう、マルコシアスさん」

いつもみんなに助けられてばかりだ。

どうやら自分はまだまだ未熟者らしい。

「マルコシアスさんにお礼が言いたいんだけど、呼び出してくれな

いかな」

「いいだろう」

アレイさんが名を呼ぶとすぐに褐色の肌の剣士が姿を現した。
この狭い部屋で背の大きな翼は少し邪魔そうだった。

「無事で何よりだ 幼き娘」

「ありがとう、マルコシアスさんのお陰だよ。この羽根がおれを守ってくれたんだ」

「それは我が加護の一部 主を守るよう働く だがフラウロスの炎は 防げぬようだな」

マルコシアスさんの手が腫れた頬に触れた。

微かに痛んで顔をしかめると、すぐに手を引いてくれた。

「こうなるのが分かってたの？」

「お主の性格上 命の危機があると思った」

「だろうな。考えなしの無鉄砲だからな」

アレイさんがため息をついた。

むっとしたけれど本当のことなので言い返せない。

「これからもきつと何回も……」

言いかけてアレイさんは口を噤んだ。

「心配事が尽きぬな」

マルコシアスさんは優しげに微笑んだ。

その笑顔を見て思わずときどきした。

「これは クローセルからだ」

「クローセルさん？」

思わず首を傾げると、マルコシアスさんは一枚の羽根を差し出した。

受け取って見ると、彼の羽に似ていたがほんの少し根元が青みがかったている気がした。

「水を使うクローセルの加護があれば フラウロスの炎も遮断できるだろう」

「クローセルさんがおれにくれたの？」

「持っているといい きつと役に立つ」

「わかった。今度お礼言っておくね！」

「我的加護も 与えよう」

褐色の肌の剣士は自らの翼から一枚の羽根を抜き取って手渡してくれた。

純白のそれは手の中で風もないのにさざめいて柔らかな感触をもたらした。

「ありがとう。大事にするよ」

「出来れば使わないでいて貰いたいな」

「アレイさん、もしかしておれのこと心配してくれてたの？」

「……してない」

「そうなの？」

「お前は心配して欲しいのか？ 毎回毎回死にそうな目にあうんだ、心配していたらこっちの身が持たん」

「おれだって好きで危険な目にあってるわけじゃないよ！」

「少しは努力しろ」

アレイさんがいつもの調子に戻ってしまったようだった。

今回の旅の間はいろんな事を教えてくれてちよつとだけ優しくかったのに。

「アレイさんのいじわるー！」

「好きに言え」

そのやり取りを見て楽しそうに微笑んだマルコシアスさんは、そのまま空気に溶けるように消えていた。

2日後には東の国境付近まで足を伸ばしていたベアトリーチェさんが合流しておれが完全に回復すると、すぐにアレイさんは倒れるように眠りについた。

これまでほとんど休んでいなかったせいだろう。

邪魔をしないように静かに眠らせてあげることにした。

店の奥のベッドに横たわったねえちゃんが目を覚ます気配はなかった。

ベアトリーチェさんはずっとねえちゃんの傍についていて、その優しい瞳でねえちゃんを見つめていた。

「ねえちゃんはいじょうぶなの？」

ベアトリーチェさんにこっそりそんな事を聞くと、彼女はいつものように優しい笑みを返してくれた。

「大丈夫ですよ。もう何日もしないうちに目を開けるはずです。そうしたらみんなで王都に帰りましょう」

「ほんと？」

心の底からほっとした。

ねえちゃんが帰ってこなかったあの夜から張り詰めていた何かをやつとぶつりと途切れた気がした。

そのせいなんだろうか。

夜は今まで眠れなかった分を取り戻すようにぐっすり眠る事が出来た。

だから起きる時はぱつちりと目が覚めた。

真っ先にねえちゃんが眠っている部屋に向かう。

何だかすごくいい予感がした。

「おはよう、ベアトリーチェさん」

「おはようございます」

その予感に当たっていた。

ずっと待ち望んでいた声がした。

「おはよう、ラック……何だか久しぶりね。元気だったかしら？」

「ねえちゃん……」

ずっとずっと見たかった気まぐれ猫の金目がやさしく微笑んだ。

腰まであるストレートのブロンドがふわりと揺れた。

躊躇わずにその胸に飛び込んだ。

やっぱりねえちゃんは甘い匂いがした。

その幸せを胸いっぱい吸い込んでから、ねえちゃんにばれないように少しだけ涙を流した。

ねえちゃんはその次の日にはすっかり元気になっていた。

ベアトリーチェさんは報告のため一足先に王都へと出発し、自分たちもねえちゃんが回復次第王都へ戻るようになっていた。

ベッドの端に頬杖をつくとき、ねえちゃんが頭を撫でてくれた。

久しぶりの感触に思わずにこりと笑う。

「ありがとう、ラック。助けてくれたのね。怪我はしなかった？」

「うん、だいじょうぶだよ」

本当はフラウロスさんを抱きしめた時に負った火傷がまだ少しひりひりしたんだけど、それは絶対に言わないでおこうと思っていた。

後ろに立っていたアレイさんはそれに気づいているんだろう、何か言いたそうにしていたけれど何も言わないでいてくれた。

「聞いて、あのね、フラウロスさんと契約したんだよ。それから、アガレスさんの加護があると『千里眼』っていうのが使えるようになったの。まだうまく使えないけどね」

「千里眼ですって？」

ねえちゃんはその名を聞いて驚いた。

アレイさんはため息をつくような感じで言葉を吐き出した。

「信じがたいことに本当だ」

「すごいじゃない！」

ねえちゃんが嬉しそうに頭を撫でてくれて、その感触が懐かしくて思わず相好を崩した。

「阿呆面で笑いやがって」

アレイさんの嫌味が気にならないほど、幸せな気持ちに包まれていた。

「それからおれが住んでたかもしれないお屋敷があって、おれの本当の名前も分かったかもしれないんだ」

「どういうこと？」

ねえちゃんは眉を寄せてアレイさんに説明を求めた。

アレイさんはここ数日間のセフィラとの戦闘をねえちゃんに説明し、またグリフィス家の隠れ里の話も簡単に織り交ぜた。

「グレイシャー……グリフィス……それがあなたの本当の名前のね」

「そうかもしれない。でも、おれはラックだよ。3年前にねえちゃんが拾ってくれて、名前をつけてくれた日からずっと」

過去が分かるうとも、どこへ行こうとも、職業が変わるうとも。

「おれはレメゲトンのラック……グリフィスだ。言葉にしたらすごくはつきりした。もう探索者のラックじゃないんだって思ったよ」

街の中にゲブラとネツアクが現れて、カンナが危険にさらされた瞬間に何か自分の中で変わった気がした。

今の気持ちをうまく言葉に出来るか分からなかったけれど、外に出しておかないといつか後悔するような気がした。

だから少しずつ言葉を選んで、うまく伝わるようにがんばって紡いでいった。

「ゲブラとネツアクが街の中に現れたときにね、ヒトを守りたいって思ったんだ。街を壊されたくないって思ったんだ。もしそんなこ

とをしようとする奴がいたら…… やっつけてやるって。おれはきつとこの世界が好きなんだ。だから傷つけて欲しくない」

ねえちゃんとアレイさんが驚いたようにこちらを見ていた。

あの瞬間にきつと自分はカトランジエの街に抱く望郷の念を完全に切り離れた。

新しい世界で、ねえちゃんやアレイさんがいる世界で精一杯自分を磨いて、試して生きたいと思った。そしてそうしようと決めた。

「きつとレメゲトンってそういう職業なんだよね。大切なヒトを守らなくちゃいけないんだ。みんなが幸せに暮らせるように。おれはそのお手伝いをしたいよ」

王様に与えられた仕事だからじゃない。

ねえちゃんがそうしろって言ったからじゃない。

これは、自分自身の意思だ。

「おれ立派なレメゲトンになるよ。もつといろんな事勉強して、もつと強くなつて国の人たちを守っていききたいよ。だから、いろんな事教えて欲しい。大切なものを…… 守れるように」

まっすぐにねえちゃんの金の瞳を見つめた。

「『探索者』のラックはもういないよ。おれはラック＝グリフィス、グリモワール王国のレメゲトンだ」

いつか言ったせりふを繰り返して、にこり、とねえちゃんとアレイさんに微笑みかけた。

どれだけ混乱していてもフラッシュバックの苦しみに苛まれていてもアレイさんの声が自分の耳に届くのは、きつとアレイさんがおれの新しい世界の象徴だからなんだろう。

過去が見せたフラッシュバックから救い出してくれるのは新しい世界の道標だ。

いつだったか過去が知りたと思っていた。あの銀髪のヒトと初めて会った後だった。過去が原因でねえちゃんと引き裂かれるのがすごく嫌だったからだ。

でもいつしかその気持ちは消えていた。

ねえちゃんと一緒にいるために必要なのは過去じゃなくて未来だ。これから自分がたくさんの知識を身につけて、もっともっと戦えるようになること。それが一番大切なんだ。

「大きくなったらね、ラック」

ねえちゃんがとても優しい瞳で髪を撫でてくれた。

「身長は伸びてないよ？」

「違うわ。本当に、成長したわね。嬉しいわ……」

まるで泣きそうな顔で頭を撫でてくれるねえちゃんはとても喜んでるように見えた。

だから自分もととても嬉しくていつまでもその手のひらの感触を楽しんでいた。

最後に、明日には王都に向かって出発するとアレイさんが宣言した。

だから午後からカトランジェの街でみんなにちゃんとお別れを言いにいくことにしたんだ。

SECT・29 ありがとう

ゲブラとの戦いで破壊してしまった道にはまだその爪痕が多く残っていた。

灰色の石畳はめくれ上がったままだったし、割れた窓は布で一時的に塞いであるだけだった。焼けた街路樹は黒い傷口を顕わにしていた。

それを見ていられなくて少し目を伏せた。

フラウロスさんがうまく言うことを聞いてくれなかったのは自分のせいだ。

もっともつと強くならなくちゃ。みんなを守るように。

からんからん、と軽快な音をたててカフェに飛び込んだ。

マスターがお腹をたゆんと揺らしてこちらを向く。

「おう、ラック。ミーナさんはもう大丈夫かい？」

「うん、元気になったよ。ケーキ持って帰って一緒に食べるんだ！

フルーツケーキちょうだい。3つね！」

指を3本立てて言うのと、マスターはショーケースからフルーツケーキを三つ取り出して箱に入れてくれた。

きれいに包装して包みを渡してもらったとき、ぽつりと言った。

「あのね、マスター。おれ、王都に行くんだ。ねえちゃんと、アレイさんと一緒に」

「そうか」

「立派なレメゲトンになれるようにがんばるよ」

マスターは優しい瞳で笑った。

「大きくなったら、ラック。こうやって子供たちは巣立って行ってしまうんだなあ……」

ねえちゃんと同じ事を言ってマスターは大きな手でぐしゃぐしゃとおれの髪をかき回した。

「行っておいで。でも、ここはお前の故郷に違いない。いつでも帰ってくるといい」

「うん！」

大好きだったマスターのお腹ともお別れだ。

名残惜しかったけれど、ケーキの箱をもってマスターの店を後にした。

ああそうだ、ちびマスターにも挨拶しなきゃ。あとは鍛冶屋のゼルト、それから……

考えながら歩いていると、明るい少女の声がした。

「ラック！ もう大丈夫なの？」

「あ、カンナ」

商品を棚に並べている果物屋の看板娘、カンナが声をかけてくれた。

「レメゲトンになったって本当だったのね。もしかするとミーナさんもあの綺麗な男の人レメゲトンなのかしら？」

「うん、そうだよ。二人ともすごく強いんだ。おれもがんばらないと！」

「じゃあラックはもうこの街には戻ってこないのね」

「おれは王都で立派なレメゲトンになる勉強をするよ。今度は街をこんなめちゃくちゃにせずにあいつらを追っ払ってやるから！」

そう言うときカンナは少し寂しそうに笑った。

「ラックがいなくなると寂しくなるわね」

「また遊びに来るさ」

最初にこの街を離れた時とは全く違う感情が自分を満たしていた。絶望でも喪失でもない、希望と決意が後押ししている。これまでの世界から離れるんじゃない。新しい世界を創っていくんだと——これから広がっている未来に期待を持つことが出来る。

もっと広い世界を知る事が出来たから。

「ねえラック、鍛冶屋のゼル兄ちゃんから聞いたんだけど、あなた

女の子だったの？」

「そうだよ」

今回この街に帰ってきてから何度この質問をされただろう。いかにねえちゃんの言葉が正しかったかを知る結果となってしまう。つた。

「知らなかった。でも言われて見るとすごく美人になった気がするわ。何で気づかなかったのかしら。年は幾つなの？」

「18歳らしいよ」

「私より年上じゃない！」

カンナは驚いた声を出した。

「もう、ぜんぜん知らなかったわよ。びっくりさせないで。」

「別に隠してたわけじゃないよ。勝手にみんながそう思ってたんだ」これも何度も繰り返した台詞だ。

「それじゃあ、あの綺麗な男の人はもしかしてラックの恋人なの？」

「コイビト？って、何？」

そう言うときカンナは驚いたように目を丸くした。が、すぐに困ったように笑った。

「そうよね、ラックだものね。いいわ、気にしないで」

「？」

よく分からなくて首を傾げると、カンナはふふふ、と楽しそうに笑った。

「ラック相手じゃあの人も大変ね」

何だかねえちゃんも似たようなことを言っていた気がする。

そりゃおれは馬鹿だし記憶力も全然ないし何にも出来ない弱いレメゲトンだけど、アレいさんに迷惑をかけるつもりはさらさらないはずなのに。

「あのね、ラック。あの綺麗な男の人、すごくラックのことすごく大切に思ってるのよ。私が助けを呼びに行った時だって何もかも放り出して飛んでいっちゃったんだから」

「嘘だあ。アレいさんはおれのことうるさいガキだと思ってるよ。」

「いつもイジワルだしシツレいなことばかり言っし」

そりやたまに、ごくたまに優しい事だってあるけれどそれは本当に珍しいことだ。

「そうなのかしら。でも、お礼は言っただろうがいいわよ」

「うーん……分かった」

でも、素直に言えるかなあ。

言えたとしてもアレイさんからまたイジワルな台詞を受け取るところを予想して、今のうちに少し身構えておくことにした。

マスターの店のケーキとカンナのところまで貰った桃を手になえちやんの店に戻ると、アレイさんは店のテーブルでいつだったか教えてくれたカードの占いをやっていた。

おれが入ってきたことに気づくとカードをすぐに片付けてしまった。

「何を占ってたの？」

「ガキは知らなくていい」

すでにその口調にむっとしたけれど、ケーキの箱と桃のことを思い出して機嫌を直した。

うん、それにちゃんとお礼を言うって決めたんだった。

「あのね、アレイさん」

「何だ？」

「カンナがね、あ、カンナっていうのは果物屋さんの女の子だよ」

「ああ、あの時の」

「アレイさん、おれが助けてって言った時にすぐに来てくれたって聞いたから、あの……」

改めて言うのって何だか照れくさい。

真直ぐにアレイさんの紫の瞳を見るのが何だか気恥ずかしくて、すこし視線を外してしまった。

「ありがとう」

なぜだろう。これまで人の目を見るのが恥ずかしいなんてことなかったのに。

ありがとうと思っただらちゃんと言えだし、話す時は人の目を見なさいというねえちゃんのお教えに従っていた。

それなのに今はすごく照れくさくてアレイさんを見る事が出来なかった。

こんなこと初めてだった。

アレイさんは予想通りイジワルな返答をくれた。

「そんな嫌そうなお礼はいらん」

「嫌なわけじゃないよ。ただ……かしこまって言うのがすごく恥ずかしかっただけだ」

「恥ずかしい？ お前にそんな感情があったのか」

「知らないよ。おれだってびっくりしてるんだ。今までこんなことなかったのに……」

本当に不思議だ。でも、すごくドキドキしている自分がいる。ただお礼を言うだけだって言うのに、なんでこんなにも照れくさいんだろう。

唇を尖らせると、アレイさんはいつもみたいに無表情でぼそりと言った。

「お前はいつも危なっかしいからな、知らない場所で危険な目に遭われると厄介だ。これから……」

アレイさんは言いかけて口を噤んだ。

「これからは……何？」

「何でもない。忘れる」

アレイさんは早口でそう言うとそのままそっぽを向いてしまった。

「気になるよ」

「絶対言わん」

そんな力込めて言わなくてもいいじゃないか！

むっと唇を尖らせると、ねえちゃんが店の奥から出てきた。

「あらどうしたの、また喧嘩したの？」

「ねえちゃん聞いてよ。アレイさんがねー……」

「やめろくそガキ」

「ガキって言うな！」

「アレイ、ラックをからかうのはやめなさい」

ねえちゃんが窘めてくれたけれど、アレイさんは返事をしなかった。

「もう……明日には王都に帰るのよ。二人とも準備しなさい！」

「はあい」

アレイさんが何を言おうとしていたのかとても気になったけれど、きつとイジワルな台詞に違いない。

聞かなくてもよかった。

そう思っただけで忘れてしまった。

SECT・30 舞踏会の調べ

王都に戻ってすぐに王様の所へ報告に行った。

コインを貰ったときの大きくて眩しい部屋はもう使わないんだろ
うか、今回も書類で埋まった小さな部屋で仕事中の王様と話すだけ
だった。

でも王様はただねえちゃんが戻ったことを喜んでくれた。それが
とても嬉しかった。

アレイさんと二人でかわるがわる今回何が起きたかを報告すると、
ゼデキヤ王は唇をひき結んだ。

「今回もセフィラが絡んできたか……ネブカドネツアル王は本気だ
な」

険しい顔の王様は、その辺にいるおじちゃんとはぜんぜん違っ
ていた。オーラが違う。人の上に立つ者の威厳が備わっている。

その瞳には帝王の光を宿していた。

「グリフィス家の隠れ里も一度捜査せねばなるまい。たとえセフィ
ラが資料を奪っても、何かしら情報が残っているはずだ」

「それには私が参ります、ゼデキヤ王」

「ねえちゃん？」

「どうしても確かめたい事があります」

ねえちゃんは何かを決心した顔をしていた。

「ふむ……いいだろう。10日もあれば往復できるな？」

「はい。ありがとうございます」

「ただ、すまぬがあと3日ほど王都に滞在してくれぬか？3日後に
息子の誕生会を開くのだが、そこで新しいレメゲトンのお披露目も
兼ねようと思っているのだ。後見人のファウスト女伯爵にはぜひ出
席して欲しい。こんな時勢にパーティなど本当は開いている場合で
はないのだが……」

ゼデキヤ王は困ったように笑った。

あれ、息子って確か……

「ゼデキヤ王、クトウルフ国大使との謁見のことなのですが……」

そこへ、一人の青年が顔を出した。

その顔にはとても見覚えがある。

「失礼しました、謁見中でしたか」

「サン！」

にこりと微笑みかけると、ねえちゃんにそっくりな顔が微笑み返してくれた。

「ラック、無事に帰ってきたんだね！ ファウスト女侯爵もご無事で何よりです」

「ご心配をおかけしました、殿下」

「貴方が無事に戻ってこられる事が何より大切です」

同じ顔が二つ並んでいるのは、とてもおかしい感じがした。

銀髪のヒトもアイリスとリコリスもそうなんだけど、あの二組は完全に同じものだから不自然じゃない。

「3日後のお前の誕生パーティーでは新しいレメゲトンのお披露目も兼ねることになった」

「そうですか。楽しみです」

サンはにこりと微笑んだ。

やっぱりちよつとだけねえちゃんとは違う柔らかな微笑みに、すこしドキドキした。

王様との謁見を終えて、ねえちゃんは楽しそうに笑った。

「ライバル出現かしら？ 面白いことになってきたわね。相手はラックと同じ年代のしかも王子様なんて手ごわいわよ、アレイ？」

「何がだ」

アレイさんが顔を引きつらせている。

よく分からずに首を傾げると、ねえちゃんはにこりと微笑んでくれた。

「いいのよ、ラック。あなたはあなたの好きなようにしなさい」

ねえちゃんの微笑が目の前にあるだけでも幸せだったから、他のことはどうでもよくなった。

今はねえちゃんが隣にいてくれれば、それでいい。

「ガキの服はどうするんだ。今度はヨハンの服を借りるわけにもいかないだろう」

「大丈夫、ラックの正装はすでに発注してあるわ。もう少し掛かりそうだけれど、急いでもらいましょう」

「正装って、ねえちゃんが着てたやつ？　もしかしてずっと前に採寸したあれ？」

「そうよ」

「また踵の高い靴を履くのかあ……」

「あら、ラック用にそんな靴あったかしら？」

「ダイアナさんがくれたんだよ」

そうだ。クラウドさんとダイアナさんのことをまだ話してない。

まだまだねえちゃんに報告することはいっぱいあったみたいだ。

ダイアナさんがくれた服をねえちゃんは気に入ってくれるだろうか。リコリスとアイリスに頼んでクローゼットから引っ張り出してもらわなくちゃいけない。

それを思い出したらすぐに帰りたくなった。

帰る先はカトランジェの街じゃなくねえちゃんのお屋敷だ。

「早く帰ろう、ねえちゃん。まだまだいっぱい話したい事があるんだ！」

パーティのある三日後までに正装が仕上がってきた。

ねえちゃんと同じ、細身のシルエットが美しい黒のドレスだった。裾には悪魔の紋章が刺繍されていて、胸元もふんだんに開いているし、よく見ると背中が腰の辺りまで広く開いている編み上げのものだった。

このまま着ると瀬の逆十字傷や首筋につけられたセフィラの標的となった印まで見えてしまう。

「大丈夫、マントで隠れるわ」

ねえちゃんはその言って最後に漆黒のマントをかぶせてくれた。

黒い手袋で左手の甲を隠したし、ねえちゃんとおそろいの金鎖のベルトにアガレスさんとフラウロスさんのコインを下げた。

それにダイアナさんに貰った銀のペンダントと蒼水星の髪留めをつけた。

靴は新しく拵えてもらった黒のピンヒールで、ぴつたりと足にあったサイズのせいか前の靴より歩きにくいことはなかった。

それでもジュデツカ城に行くまでには苦労したし、到着してからも苦労の連続だった。

ねえちゃんとヨハンと一緒に歩いてくれたんだけど、二人が足を止めることもしばしばだった。

「二人とも先に行っていていいよ。遅刻しちゃうよ？」

「何言ってるの。主賓はあなたなのよ、ラック」

ジュデツカ城が広すぎるのって、かなり問題だと思う。

今日は王様がいつもいるところじゃなくて隣にあるパーティ用の建物なんだとか。そんなたくさん家を建てていたいどうする気なんだろう！

もう帰りたいよ。

「もういいよ。おれ帰るよー」

「ここまで来てなんて事を言うの」

「そつだよラック、あと少しじゃないか！」

ねえちゃんがあきれたようにため息をついて、ヨハンの子犬みたいにまん丸な瞳で一生懸命に言った。

「お手をお貸ししましょうか、ミス・グリフィス」

聞き覚えのある声に振り返ると、ねえちゃんと同じ顔の男性が立っていた。

「ミュレク殿下」

ねえちゃんとヨハンがさつと頭を下げた。

自分も頭下げたほうがいいのか、と思っているとサンはにこりと笑って手を差し出してくれた。

「あとは引き受けるから、どうぞ先に行って、ヨハンとそれにミーナ姉様」

「公式の場ではファウストの名でお呼びください、殿下。お心遣い感謝いたします。グリフィス女爵をよろしく願います」

ねえちゃんにはにこりと笑うとヨハンと共に先に行ってしまった。

「さあ、お手をどうぞ」

「あ、ありがとう」

前にアレイさんがしてくれたみたいに、サンは手をとって歩き出した。

それに従って歩を進める。

手を引いてもらっただけでずいぶん歩きやすい。

「今日は誕生日なんだった？おめでとう！」

「ありがとう、ラック。君も爵位をいただいたんだろう？」

「んーよく分かんない。とりあえずレメゲトンになったからお披露目するって王様は言ってたよ」

「レメゲトンになって悪魔と契約を結ぶと自動的に爵位がもらえるんだ。いずれにせよ、一度公式の場で挨拶したほうがいい。いろんな貴族の人と話して知り合っておくといいよ。きつと力になれる人もいるはずだ。あ、でも……」

「でも？」

「レメゲトンが苦手な人もいるんだ。ほら、不思議な力使うからちよつと怖いと思う人もいるみたいでさ。そういう人にはあんまり近寄らないほうがいいかもしれない」

「分かった。ありがとう」

にこりと微笑むと、サンも微笑み返してくれた。

「ラックはやっぱり素直だね。一緒にいるとほっとするよ」

「ありがとう。サンは優しいな」

微笑み返されるとやっぱり少しドキドキした。マルコシアスさんに微笑まれたときと一緒だ。すごく嬉しくなる。

「アレイさんだったら絶対イジワルばかり言うよ。阿呆面で笑うな」とか」

「……ラックはクロウリー伯爵のことすごく好きなのかな？」

「え？何で？」

「いつも彼の話ばかりしてるからさ」

そうかなあと首を傾げると、サンは少し笑った。

「ほんとに君はかわいいな」

ねえちゃんと同じブロンドの髪がさらりと揺れた。

サンにかわいいって言われるとすごく嬉しい。何だかドキドキする。

「ありがとう」

素直に褒められて嬉しかった。だからお礼を言った。当たり前のようにさらりと出てきた言葉だったけれど、少し引かかった。

あれ、やっぱりちゃんと言えたよ。何でアレイさんを前にすると素直に言えなかったんだろう……？

でも深く考える暇はなかった。

サンに手を引かれてパーティ会場に足を踏み入れたからだった。

SECT・31 もう一つの選択肢

扉を開けると、目の前にはたくさんのヒトたちがひしめいていた。
「うわあ……！」

思わず声が漏れる。

大きな吹き抜けのそのフロアにはふかふかの絨毯が敷き詰められていて、天井にはきらめかしいシャンデリアが下がっている。女性たちは色とりどりのドレスに身を包んでいて、胸には輝く宝石がちりばめられていた。

華やかな場面に似つかわしいとても美しい音楽は小さなステージ上の音楽家たちが運んでくれているようだ。

皆グラスを片手に朗らかに談笑している様は絵本で見た舞踏会の景色とそっくりだった。

ホールだけでなく扉が開放された中庭にもヒトがたくさんいて、とても数え切れそうになかった。今ここにいるだけでカトランジェの街の人口より多いんじゃないだろうか？

「やっと今日の主賓が到着したようだ」

そこに王様の声が響いた。

見ると、ホールの中央から二階に向かって伸びる大きくて豪華な階段の中ほどにゼデキヤ王が立っていた。

ゼデキヤ王は自分とサンを示して高らかに宣言した。

「本日19の誕生日を迎えるサン」ミュレク「グリモワールと、新たにレメゲトンに就任したラック」グリフィス。どうか盛大な拍手でお迎えください！」

その瞬間に割れるような拍手が響き渡った。

びつくりしてよろけると、サンが支えてくれた。その顔が思ったより近くてどきりとした。

「さあ、行こう」

ねえちゃんと同じ顔だけれど、金でなく灰色の瞳でサンは優しく

見つめてくれた。

「うん」

手を引かれるがままホールの中央まで進み出た。

「お美しい方ですわね」

「本当、殿下とよくお似合いだわ」

誰かがそんな風に呟く声も聞こえた。

ねえちゃんとヨハンの姿を探したけれど、人が多すぎて全く見つからなかった。知らないヒトたちがたくさんいて目がチカチカした。

「ご機嫌麗しゅう、殿下」

すらりと背の高い、王様と同じくらいの年の男性が声をかけてきた。とても身分の高いヒトらしく、周りのヒトは見守るように少し距離を置いていた。

サンは極上の笑みを湛えてその男性に挨拶した。

「お久しぶりです、クロウリー公爵」

クロウリー？

よく見るとそのヒトの不機嫌そうな目つきに見覚えがありすぎるほどあった。

切れ長の眼に端正な顔立ちの男性は、何年も後のアレイさんの姿を想起させた。きつとこんな風にあんまり笑わない、頑固そうなおじちゃんになるんだろうな。

「クロウリー伯爵のお父上だよ」

サンがこっそり呟いてくれる。

うん、よく似てるよ。

「お初にお目にかかります、グリフィス女爵」

「初めまして、ラック・グリフィスです。よろしくお願いします」

最近やっと自然に出来るようになった目上のヒトへの挨拶を実行した。それ以外あんまり喋るなってねえちゃんが言ってたから、喋るのはサンに任せてにこにこ笑っていた。

アレイさんのお父さんの他にも、ナントカ侯爵とかナントカ伯爵とか言うヒトたちがたくさん挨拶をしていた。

とてもじゃないけど全員覚えるのは無理だ。

サンはとても自分と同じくらいの年とは思えないくらいにしっかりとっていて、たくさんの大人たちを前にしても一歩も物怖じしなかった。そこにはやはりゼデキヤ王と同じ黄金のオーラが感じられた。それに対して自分はいえは挨拶するのにもとくに飽きていた。誰か知っているヒトはいないかときよろきよろきしていると、後ろからとんとん、と肩を叩かれた。

「退屈しているようですね、お嬢さん」

振り返ると、金髪に緑翠の男性が立っていた。

「クラウドさん」

よく知ったテノールの響きに何だかほっとした。

その隣には若草色のドレスに身を包んだダイアナさんが立っていた。

「その服、素敵よ。すごく似合っているわ」

「ありがとう。ダイアナさんもすごく綺麗だよ」

にこりと微笑むと、ダイアナさんもふんわりと微笑んで頭を撫でてくれた。

「もう、この子本当になんてかわいいのかしら……！」

サンはその様子を見て微笑みながら二人に頭を下げた。

「ご無沙汰しております、フォーチュン夫妻」

「お誕生日おめでとうございます、殿下。なかなかご挨拶にお忙しいようで……ご苦労様です」

「本当は面倒なんですけれど、こんな時くらい少しはがんばらないと」

サンは困ったように笑った。

そうすると先ほどまでのオーラは消えて、年相応の青年に見えた。「ですが姫は退屈しているようです。少し、お借りしてもよろしいですか？」

うん、すごく退屈なんだよ！

目で訴えると、サンは行っておいで、と手で示した。

今度はクラウドさんに手を引かれて人ごみの中を移動する。どうやら音楽家のステージの方へ向かっているようだった。

ステージの近くでは広くスペースが開いていて、そこでたくさん
のヒトが踊っていた。

軽快なワルツが響いている。

クラウドさんはその場所まで行くと、跪いてこう言った。

「一曲お願いできますか、姫」

どうしたらいいのか分からずにダイアナさんに助けを求めると、
そつと囁いてくれた。

「『喜んで』と言って手をとればいいのよ」

差し出された手に恐る恐る自分の手を重ねる。

「よ、喜んで？」

アレイさんがいたらなぜ疑問系なんだと突っ込まれたかもしれな
い。

でもクラウドさんはとても優しいからそんな事はせずに、思わず
見惚れるような微笑でもって返してくれた。

これまで踊ったことなかったのだけれど、クラウドさんが
導くとおりに動くと、まるで背中に羽根が生えたみたいに軽くステ
ップを踏む事が出来た。

何だかたたくさんの視線を集めていたようだけれど、あんまり気に
ならなかった。

くるりくるりと回るのはとても楽しかった。ピンヒールの靴を履
いていたはずだったけれどそれもすっかり忘れられるくらいにうま
く踊れたと思う。

曲が終わって軽く礼をすると、ぜんぜん知らないヒトがまた声を
かけてきた。

「一曲よろしいですか、ミス・グリフィス」

「喜んで？」

クラウドさんはダイアナさんの手をとっていたから、自分も次のパートナーを探さなくちゃいけないんだろう。

そのヒトは確かさつき挨拶した群衆の中にいた気はするんだけど、全く思い出せなかった。

「お上手ですね」

「踊るのは初めてだよ」

「本当に？信じられません」

その男性はたぶんアレイさんと同じくらいの年で、着てる服からしてもすごく身分の高いヒトなんだろうってことくらいしか分からなかった。

ただ、鼻の辺りに散っているそばかすが鍛冶屋のゼルを思い出させて、少し切なくなった。

「ミス・グリフィス。あなたは本当にお美しい」

「どうもありがとう」

特にお世辞に興味もなかったし、でも言ってくれたことにはお礼を言わなくちゃいけないから義務のようにそう答えた。

みんなそう言うってくれるけれど、別段嬉しくもなかった。だからと言って嫌ではなかったが。

それから何人ものヒトと踊ったけれど、みんな似たような言葉を並べているだけだった。

踊るのにも飽きてきた。

そう思っていると、ブロンドの髪が目の前を横切った。

そのブロンドの持ち主は自分の前で跪いて手を差し出した。

「姫、お手をどうぞ」

「喜んで」

にこりと笑ってサンの手をとった。

曲が終わってもサンは手を離してくれなかった。

「もう少し一緒に踊ってくれない？」

「いいよ」

今度はスローテンポの曲が流れ出した。

「ねえ、ラック」

「なあに？」

「君はもし戦争が起きたらどうする？」

「……分かんない」

戦争、と言う言葉は何となく知っていた。国同士が兵隊を使って喧嘩することだ。

たくさんのヒトが戦ってたくさんのヒトが死ぬって聞いても、何だかあんまり実感が湧かなかった。ただ、自分は血が嫌いだから戦争も大嫌いだろうと思うくらいだ。

「もしかすると戦争が起きるかもしれない。そうすれば君はレメゲトンとして戦いに赴かなくちゃいけないだろう」

国同士の戦いってというのがいったいどういうものなのか想像もつかなかった。

これまでに経験したセフィラとの戦闘とは全く違うものになるんだろうか。

「僕は君をそんな戦地に送りたくないんだ。ラックとは会ってからほんの少ししか経ってないけど君がとても綺麗な心の持ち主だっていうことはわかるよ。だから行って欲しくない」

サンの灰色の瞳が強い光を帯びた。

「レメゲトンをやめなる気はない？」

びっくりした。

まさかそんな事を言われるとは思ってもみなかったから。

でもサンの瞳は真剣だった。

「レメゲトンをやめても爵位は残るし、グリフィス家の末裔なら政治でも重要な役職に就くことだって可能なんだ。わざわざ危険を冒すことなんてない。君は女性なんだから」

そのとき唐突に理解した。サンの笑顔を見ると少しドキドキする理由――

「ありがとう、サン。おれのこと女だからって気にかけてくれるのはサンだけだよ」

サンだけが自分のことを女性として扱ってくれている。だからちよつとドキドキしてしまうんだ。

「でもおれはレメゲトンをやめないよ。決めたんだ。大切なヒトたちを守るって。もっとたくさんのことを覚えて、もっと強くなって…… おれが今住んでいる世界を守りたいんだ」

- - - おわり - - -

サンはそれを聞いて少し驚いたようだった。

でも、ねえちゃんと同じ顔で、でも違う表情で笑いながらこう言
った。

「……きつともう固く決心しちゃったんだね。僕が何を言ってもそ
の結論は変わらないんだろう？」

「うん、ごめんね。でも心配してくれてありがとう」

「ううん、いいんだ。でも、辛くなったらいつでも言って。少しで
もラックの力になりたいから」

「ありがとう」

ちょうど曲が終わった。

サンは軽く礼をして自分の前を去った。

次のヒトに誘われる前に、自分もダンスの広場から離れた。

広い広い会場を抜ける間もいろんなヒトの視線が刺さって痛かつ
た。視線は気にしないようにしたいんだけど、さすがにそれは無理
だった。

ねえちゃんたちはどこにいるんだろう？

探してみたけれど見つけれなかった。気がつくと王様の姿も消
えていたし、じい様や他のレメゲトンの姿もなかった。

おかしいなと思ったけれど、知らないヒトに呼び止められて対応
に困るのも嫌だったから出来る限りの速度で——何しろ足元が足元
だ——広間を駆け抜けた。

開放された中庭のほうはまだヒトが少なかった。

夜の涼しい風が顔にあたって気持ちいい。ひとつ、大きく深呼吸
した。庭の緑の匂いが体の隅々まで満たされて幸せな気分になった。
それなのに、またぜんぜん知らないヒトの声が後ろから聞こえた。

「ミス・グリフィス。レメゲトンへのご就任おめでとうございます」
「ありがとうございます」

しまった、また話しかけられてしまった……

すごく嫌そうな顔をしていたはずだ。でも相手のヒトは意に介さない様子で一方的に話し続けた。

どうやらこのヒトはエドモンソン子爵と言って、北の都カインからはるばるこのパーティのためにやってきたらしい。年は自分よりずいぶん上で、頭が半分くらい禿げ上がっているのが気になってしょうがなかった。

ぜんぜん話を聞いていなかったが、エドモンソン子爵は嬉しそうに領土の自慢話をしているようだった。

ああ、どうやってこの場を離れようかなと思っていると、聞きなれたバリトンの声がした。

「エドモンソン子爵」

「おお、これはクロウリー伯爵」

「そちらのご婦人をお借りしてよろしいかな？」

そう言いながらアレイさんはおれのことを指差した。

もしかして助けてくれたんだろうか。

ワインと思われる赤い液体の入ったグラスを傾けるアレイさんはとても様になっていた。憂いを帯びた表情と透き通るグラスが壊れそうに危うかった。

じつと見つめていると、案の定不機嫌そうな声が返ってきた。

「何だ」

「いや、アレイさんはやつぱりきれいだなあと思って」

返事は返ってこなかった。

でもその沈黙はとても心地のよいものだった。

「ミユレク殿下はどうされている」

「忙しそうにいろんなヒトと話してるよ。おれは退屈だから逃げてきたんだ」

アレイさんの紫の瞳を見るとすぐほっとできた。そして、人ごみの中で自分が思ったより緊張していたことを知った。

「こういった社交の場に少しは慣れた方がいい。これからこういう機会も多いだろう」

「面倒だなあ」

「まず敬語を覚えろ、話はそれからだ。お前の言葉遣いはまったくなつちやいない」

「これでもがんばってるんだよ!」

頬を膨らますと、ちょうど給仕のヒトがワインの入ったグラスを渡してくれた。

軽くお礼を言って口に含む。

甘い香りなのにすっぱい味が口の中に広がって思わず顔をしかめた。

「美味しくない」

「ガキが」

「ガキって言うな!」

まだ半分以上残っているグラスとにらめっこして、鼻をつまんで飲み干した。

喉の奥がつんとすっぱくなった。

「あのね、サンがね、レメゲトンやめないかって言ったの」

「皇太子を呼び捨てにするんじゃない」

「でもね、おれは立派なレメゲトンになるって決めてたから、断っちゃったよ」

何となく頭がふわふわとしてきた。

お酒のせいなんだろうか。

「おれもつと強くなりたいよ」

呟いて、ふと思い出した。

「そうだ。ねえアレイさん。この間言いそびれた続き、教えてよ。」

『これからは……』のあとに何て言っつもりだったの?」

「そんな事言っただ覚えはない」

「言ったよ！絶対！」

唇を尖らせてアレイさんの紫の瞳を見上げたが、そっぱを向いているらしく視線が合わなかった。アレイさんは変なところで子供っぽいんだ。

一歩踏み出そうとして、よろけた。

慣れない靴の上にお酒のせいで頭がふらふらしていたのが原因だろう。

「危ないな、気をつけろ」

アレイさんは当たり前のように支えてくれた。

見た目以上に逞しい腕に少しだけ驚いた。でもよく考えてみると、ごく稀にだけ撫でてくれる大きな手はとても温かいし、大きく腕の中に包み込んでくれた時はとても安心できる。

アレイさんに触れていると、いつだってとても温かな気持ちに包まれるのだ。

「ね、アレイさん」

「何だ」

「踊ろう？」

今ならすごく軽いステップで踊れる気がした。

「女性が男性を誘うもんじゃない。作法の欠片もない奴だな」

「じゃあ誘ってよ」

間髪いれずに言うアレイさんは小さくため息をついたが、すつと膝を折って自分に向かって手を差し出した。

「一曲お願いできますか、御婦人^{レディ}」

「喜んで」

アレイさんに導かれてもう一度ステージの傍に戻ってきた。

頭がふわふわしているせいかさつきほどヒトの視線が気にならなかった。

思ったとおり、さつきよりずっと体が軽い。アレイさんがリードするままくると体が動く。マルコシアスさんやクロ・セルさん

が翼で空を飛ぶ時つてきつとこんな感じなんだろう。

すごく気持ちよかった。

「アレイさん」

「今度はなんだ」

「いつも助けてくれてありがとう。おれアレイさんに何回助けてもらったかわかんないや」

今度はすんなりと感謝の言葉が滑り出た。

少しびっくりしながらも、ちゃんと言えてよかったと思った。

何をしていいか分からずに迷った時は今やるべきことを一つだけにしてくれた。強烈なフラッシュバックに遭い我を忘れた時だつてアレイさんの声でちゃんと戻ってくる事が出来た。

「すぐくワガママかもしれないけど、おれ、アレイさんに傍にいて欲しいんだ」

いつだったか同じ事を言った気がする。

でも確かこの間はアレイさんが返事してくれなかったんだ。

自分はねえちゃんの隣にいて、その反対隣にアレイさんがいるといい。二人ともすごく大切で、本当に一緒にいて欲しいと心から思った。

今回ねえちゃんがいなくなつて、アレイさんと二人で探しに行ったことでその気持ちを確信した。

アレイさんが隣にいてくれなきゃ嫌だ。

「……お前はいつも危なっかしいからな、知らない場所で危険な目に遭われると厄介だ。これからは」

アレイさんはそこでいったん躊躇うように言葉を切った。

紫の瞳が揺れる。淡い夜の空のように。

その色に吸い込まれるようにして微笑むと、アレイさんはくすぐったいくらいに耳元でポツリと囁いた。

「すぐ助けられるようにずっと傍にいてやる」

その言葉はすごく嬉しかった。

きつと自分はその言葉を望んでいた。

サンのように弱いからといって安全な場所に匿って欲しかったわけじゃない。

危険な場所に行っても平気なようにたくさんのことを教えて欲しかった。辛い事があっても隣にいて支えて欲しかったんだ。

「ありがとう」

どうやら自分は思ったよりずっとアレイさんが好きらしい。

でもそれは言わないでおこう。

きつとイジワルで返されるに決まっているんだ。

墮天の翼が生えたように踊るその横では、パーティの終わりを告げるワルツが奏でられていた。人々は皆手に手をとって踊りだし、宴の終焉を楽しんだ。

明るい光と美しい音楽に彩られた華やかな世界は人々を夢のような世界へと誘った。

この曲が終われば家路につかねばならない刹那の夢だ。

でも、いつまでも踊っていたかった。

とても温かい光を灯した紫の瞳を見つめながら、この優しいヒトの手を離したくなかったから。

・ ・ ・ おわり ・ ・ ・ (後書き)

to be continued . . .

この物語は連作です。

【LOST COIN - head】 <http://ncode.syosetu.com/n3660c/>
【LOST COIN - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n3665c/>
【LAST DANCE - head】 (本作)
【LAST DANCE - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n4617c/>
【PAST DESIRE - head】 <http://ncode.syosetu.com/n6324c/>
【PAST DESIRE - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n7899c/>
【WORST CRISIS - head】 <http://ncode.syosetu.com/n0921d/>
【WORST CRISIS - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n0973d/>

順にお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4082c/>

LAST DANCE -head-

2010年10月8日13時52分発行